

3 第18次調査の記録 3

(1) 概要

さて調査地点は現在、丘陵を横断し桑原と元岡の両地区を結ぶ幹線道路（県道桜井太郎丸線）沿いにあり、水崎山から北に派生する二つの尾根に挟まれた谷地内にある。谷地は幅約100m、奥行き約300mを測る。その標高は12～46mであり、上流に従い急斜面となる。この谷地には戦前から昭和40年頃までは谷水田と棚田がつくられていたといふ。その後斜面の棚田は造成工事を経て蜜柑園が開かれている。昭和60年以降に蜜柑園は中止され、小面積の水田と畠地が残ったが、これも次第に経営が途絶え、放置されたために周囲は竹林と雑木林となっていた。地域住民の話ではこの谷に戦前より遡って民家（農家）が存在したことは間かないといふ。なお、現在（調査前）は西側の県道に沿った水田は埋め立てられ民家と農業用倉庫などが建てられた。移転用地として土地取得後にこれらの建物などは撤去され、放置されていた農地とともに調査開始時には著しい荒れ地となっていた。遺跡はこの谷の地下2～6mに埋没していた。

(2) 基本土層と遺構面

調査地点内の土層堆積物の様相は複雑である。細かな堆積状況は谷部内の地形や堆積環境で著しく異なり、また農地造成などの人為的造成により本来の堆積物を失っている範囲もある。基本土層は前回示したが、ここでは2区SB454付近の基盤層確認の深掘りトレンチの成果を基に合成図したFig.を示しつつ基本的な堆積状況を再度まとめて示しておきたい。付近は近代の蜜柑園造成面①～④により、ほとんど旧地形をとどめていないが、堆積状況の復元は可能である。基本的堆積物は上部から、I層：腐植土・近・現代造成土、II層：暗褐色砂～シルト質土、III層：褐色有機質シルト質土、IV層：黒色粘質土・上部砂疊、V層：黄褐色風化レス、VI層：下部砂疊、VII層：岩盤（花崗岩）となる。I～IV層は完新世の堆積、V、VI層は更新世、VII層は第三紀の形成である。谷部両側の斜面では地表下数十cmとI・V層など僅かな被覆土でVII層の風化媒乱土となるが、斜面下部にしたがい被覆土が厚くなり、谷奥中央部ではIV層上だけでも3～5mに達する。

なお、調査1区に形成されたSX100付近ではIV層は古代に人為的に掘削されているために欠落し、II層相当の流入土として最深で5mに達する堆積があった。また遺構が集中する調査1区の南北斜面にはII層中に人工的盛土が含まれている。

なお繰り返しになるが、遺構面は基本的に表土直下～II層上位で第1面（近世）・2面（中世）、II層下位で第3面（古代）、III層上位で第4面（古墳時代後期）、IV層上部で第5面のうち弥生時代～繩文時代中期、V層上部で第5面のうち繩文時代早期～旧石器時代資料を検出、確認した。今回の報告は主にIII層上位で確認した第4面とする古墳時代住居跡群である。

(3) 第4面の遺構と遺物

第4面は1～2区を中心古代、中世遺構の直下に検出した。古代の斜面造成や中世水田造成など、また近代の畠地とくに蜜柑園造成により相当破壊されている。比較的保存状況の良い1区におけるIII層面での遺構の確認は、谷部東斜面や西側緩斜面付近において第3面とした古代遺構面との厚さ十数cm～数十cmの造成盛土を介して明らかにできた部分もある。しかし、多くの地点では土色が類似し、谷部特有の水成作用によりグライ化もあり見極め難く、検出に困難を極めた。また住居跡のほとんどが単独で斜面高所側を削り、その排土を低所側へ拡げて造成面を設けて建設されている

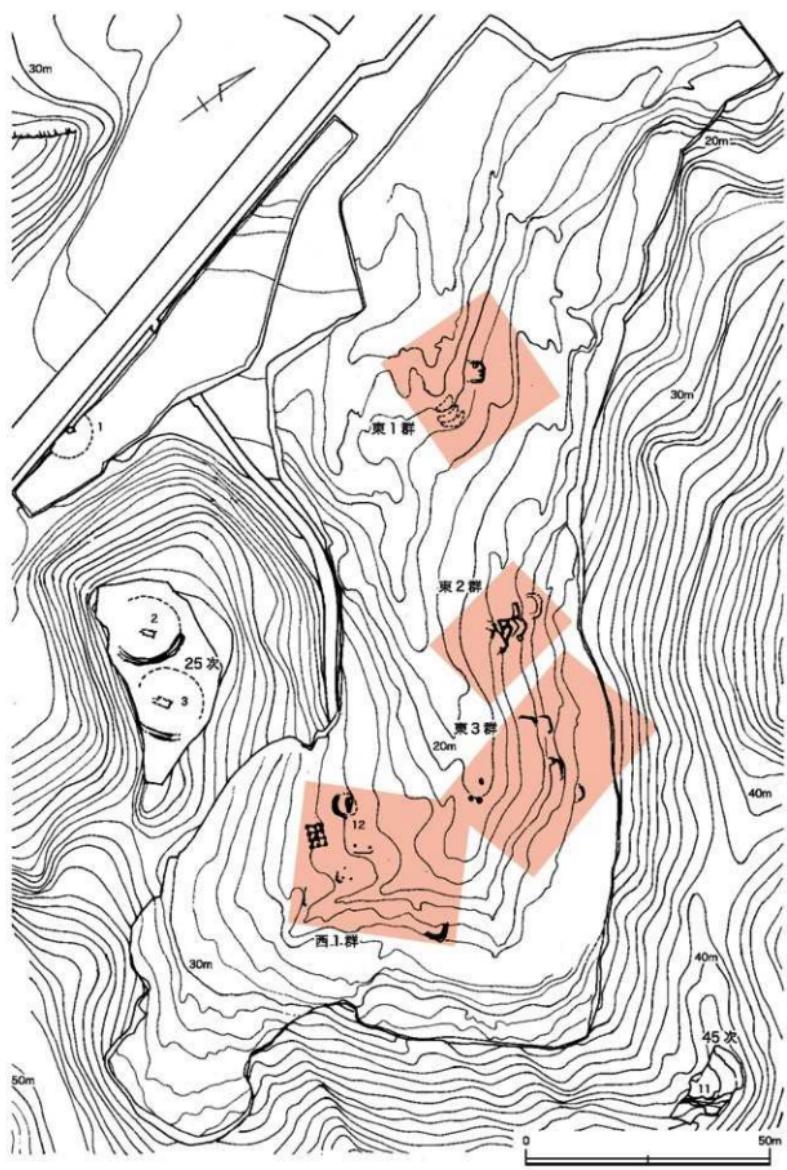


Fig.8 18次第4面造構配置概念図 (1/1,000)

ために、遺存部分は住居の斜面側の一部や後背部に限られている。Ⅲ層面で一部を検出した遺構が、掘り下げを進めてⅣ層上部やⅤ層上部で初めて検出できる場合も少なくなかった。したがって、第3面と第4面、あるいは第5面との区分は存在するものの、遺構群の厳密な分離が成功したとは言い難い。2区の中央流路SX404の東側斜面では広範囲に古代、中世遺構の直下が即Ⅴ、Ⅶ層であり、竪穴式住居はSC398の1棟の検出にとどまったが、このように削平が著しい状況であるため、この範囲が現状のように本来少数であったとは断定できない。

さて、18次調査区では第3面において中央流路とその周辺に多数の大型遺構が検出された。中央流路は、本来自然に形成された浸食谷の底部であるが、谷奥部では第3面段階に大規模な人為的造成が加えられている。まず、流路に沿って両側斜面を人為的に造成し平坦面を形成する。それは斜面上側をL字形に掘削し、その排出土を斜面下側に移動し盛土を形成する。また、流出防止のためか部分的に石垣や葺石状遺構で補強されている。18次調査区で検出された第3面の掘立柱建物の多くはこうした壇状遺構上に設けられている。これらの壇状遺構は、全体として遺存状況が悪いが、これは江戸期以降の水田造成に加え、戦後の蜜柑園造成時の工事で壊されたためである。

これらの壇状遺構は谷部の広範囲に広がるが、これに先行すると見られる第4面遺構の住居跡はほとんどがこの古代壇造成や近代蜜柑園造成により破壊されている。但し破壊は斜面の傾斜を変えるほど深くまでは及ばず、住居跡の奥側が遺存している例が多い。また、斜面西側の掘立柱建物SB335は、こうした壇造成を伴わず、切り合い関係や柱穴形態、主軸方向で第3面のものとは異なることなどから第4面遺構と判断した。

中央流路部については、第3面で、厚い包含層が形成され、多量の須恵器、土師器をはじめ、貴重な木簡、馬具の居木などの木製品、金属器や石製品が出土した。この包含層は上流部（調査1区範囲）をSX100、下流部（調査2区範囲）SX404として全体グリットとは別に区分して遺物取り上げをおこなった。谷部の第4面はこの包含層最下部において古墳時代後期のみを出土する範囲を含めたが、主に斜面の壇造成土下や陸橋SX187、SX224を除去しつつ掘り下げた範囲であるが、その埋土中からは第3面に劣らぬほどの多くの遺物が出土した。遺物は古墳時代後期の須恵器、土師器が主体であり、斜面上の東3群住居群からの廃棄物と考えられた。なお、この包含層の最下部となる1区Ⅳ層の上部砂礫層直上において植物質の籠に須恵器類が入れられた状態で出土した（SX289）。また、周辺に貝ブロック（SX276, 277）や植物種子、動物歯牙などが集中出土した。これらの遺構、遺物より下位には古墳時代遺物の出土は無く、これらが本谷部への第4面集落形成初期の遺構、遺物とみられた。

1) 竪穴式住居 (Fig.8)

本遺跡において第4面の竪穴式住居は約21棟が確認できた。主に18次調査区の中央1、2区に分布している。住居は谷の斜面にほとんどが一棟ごとの小規模造成により設けられており、関連遺構を含めて複数箇所に集中して分布している。ここでは中央の流路SX100・404で東西に分け、さらに東側を3群、西側を1群に区分して報告する。

(1) 東1群 (Fig.9)

東1群では、第4面遺構として竪穴式住居跡SC389と石組遺構SC430～431、包含層SX404がある。石組遺構は住居の南約10mにある湧水点であることから飲料水として、包含層は西側直下の低地で須恵器、土師器の破片が多く出土したところから廃棄地として利用されたと見られる。

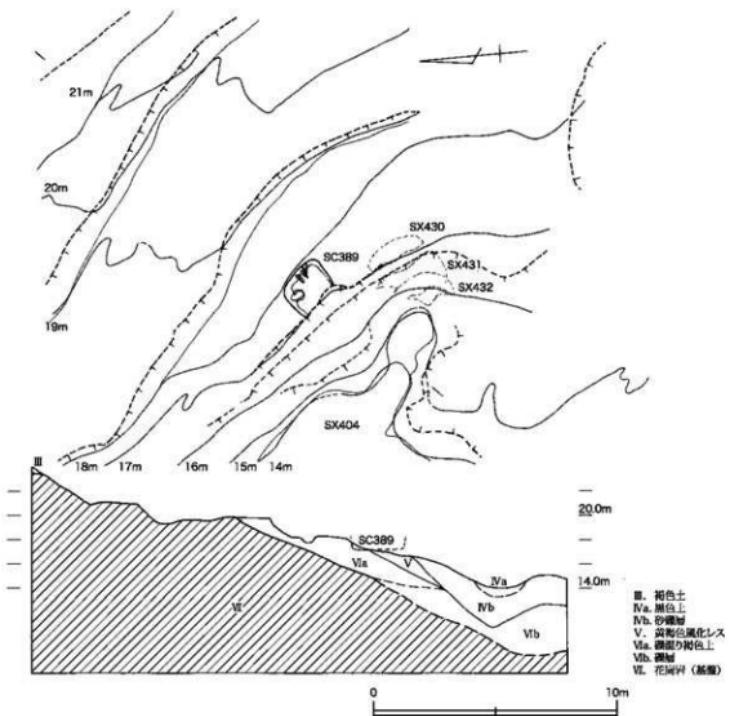


Fig.9 第4面東1群遺構配置図 (1/200)

SC389 (巻頭図版 1-2、Fig.10)

N12 グリット付近にあり、谷の東側斜面に一棟のみが単独で検出された。住居はやや歪んでいるが、隅丸方形であり、斜面下方側の南西部は削平されて失っている。残存する規模は略南北で 3.5m、東西 2.8m 以上である。主柱穴は明瞭でないが、四隅 4 本柱と見られる。北～東側に段差 10cm 以下のベット状遺構があり、周囲を壁溝がめぐる。竈は北、東の 2 方向に設けられ、北側竈は焚口、両壁、石製支脚、煙道が認められる。壁面は下部が一部残されており、竈内に土師器壺 (5, 6)、櫃 (8) 片が散布していた。東側竈は斜面上方に向かい、住居壁面のほぼ中央に設置される。幅、長さ共に 0.7m の範囲に少量の焼土片が散布していた。竈の内部幅は 0.2 ~ 0.3m であり、両壁部分には石材抜き跡が認められる。本来は礫骨材で、粘土被覆の竈であったと見られる。右壁には裏込めと見られる礫が残されているが、主石材は抜き取られている。保存状況からみて、2 つの竈は同時期ではなく、東→北の順に造り替えられたと見られる。本住居内出土遺物には須恵器壺類 (1, 2)、壺 (3)、土師器壗 (4)、壺 (5, 6)、擬似須恵器壺 (7)、櫃 (8) がある。須恵器壺蓋 1 は上部埋土への流入遺物であり、それ以外の遺物からみると、本住居の埋没時期は 6 世紀中頃～後半代と推定される。

(2) 東2群 (Fig.11)

I13・14 グリット付近にあり、谷の東側斜面に密集して10棟が検出された。住居は谷が狭まり、急斜面となる位置で上部4棟と下部6棟に分かれる。1棟の竈付住居C237を除き造成のため竈の存否は不明である。

SC205 (Fig.12)

I13 グリットに検出した。現代造成面の崖際に住居隅部が残る。検出面は標高約26mであり、長軸がN-51°-Wをとる。建物規模は4.5×2.0m以上である。壁、床面共に浸食が進むが、覆土は暗褐色土で、少量の出土遺物には、須恵器甕(9)、高杯(10)土師器甕がある。

SC232 (Fig.13)

I・J-14 グリットに検出した。検出面は標高約24mであり、隅丸方形の住居である。SC205、234～235との重複があるが、前後関係は不明である。短軸がN-6°-Wをとる。建物規模は4.5×2.5m以上で東側に段差約10cmのベッド状遺構がある。柱穴は不明である。柱穴ないが、南東隅部に0.9×0.6m前後、深さ0.1～0.2mの土壙がある。相当の削平が予測される。出土遺物には、須恵器壺類(12)、甕(13)がある。6世紀末頃か。

SC234

I14 グリットに検出した。検出面は標高約25.5mであり、斜面側に直線的な壁を見ることから方形基調の住居である。斜面上方の東側に浅い柱穴1個があり、床面に板石が配置される。住居の長軸はN-29°-Eをとる。建物規模は5.5×1.2m以上である。柱穴は未検出である。出土遺物はない。

SC235

I14 グリットに検出した。検出面は標高25.0mであり、斜面側で壁が直線から曲線へ変わることから隅丸方形の住居と見られる。SC234と並行に配置する。SC234を切り、SC232、236に切られる。建物規模は南北5m以上である。

SC236

I14 グリットに検出した。検出面は標高約24.5mであり、隅丸方形の住居である。SC235を切り、SC237～239に切られる。長軸がN-28°-Wをとる。建物規模は3.8×1.5mである。

SC237

I14・15 グリットで検出した。検出面は標高約23.5mであり、隅丸方形の住居である。南側壁に竈が設置されるが、壁部ではなく、中央の石製支脚と土師器類が集中出土した。規模は3×2.7m以上である。長軸はN-05°-Eをとる。

SC238

I14 グリットに検出した。検出面は標高約23.6mであり、隅丸方形の住居と推定される。長軸はN-5°-E前後をとる。SC239、240に切られ、斜面下方北側に溝を巡らす。残存する規模は約1.3×0.9mである。

SC239

I14 グリットに検出した住居である。検出面は標高約23.7mであり、SC236～238を切り、SC240に切られる。隅丸方形の住居である。長軸はN-02°-Eをとる。規模は1.9×1.3m以上である。柱穴は不明。遺物の出土はない。

SC240・241

I14・15 グリットに検出した隅丸方形の住居である。検出面は標高約23.2mであり、SC237～239を切っている。SC240床面で主軸を異にする黒褐色土の住居痕跡を見出したが、ほとんど掘り

込みが残らず、平面プランのみを記録し、SC241とした。貼床部であろう。SC241を240が切ると考えられる。長軸はSC240がN-40°-E、SC241がN-65°-Eをとる。規模はSC240が5.8×1.1m以上、SC241が2.8×0.9m以上である。

(3) 東3群 (Fig.10)

F～H14～17グリット付近にあり、谷部の東側斜面に三段に分かれて、計5棟が検出された。建物は斜面の上段1棟、中段3棟と下段1棟に分かれる。5棟は全て隅丸方形住居と考えられる。
SC048

F・G15グリットに検出した隅丸方形住居である。東斜面の上段にあり、斜面側に住居隅部が残されている。検出面の標高は26.5mである。おおよその主軸はN-10°Wであり、北側壁直下に壁溝が廻る。住居規模は2×2m以上である。床面には3本の柱穴が認められたが、伴うものか、主柱かは不明である。

SC049

H14・15グリットに検出した住居である。クランク状に屈曲する壁と竈跡が検出された。SC307の埋没後に、これを切り構築されている。SC307の建て替えの可能性も考えたが、両者の間に長期の放置期間を示す腐植土層の形成があり、別住居と判断した。本住居は斜面下方から造成掘削が大きく、規模や構造は不明である。竈は東側壁に設けられ、炉体、炉壁などは失われている。中央に支脚と見られる角柱礫が2個立ち、周囲に土師器類の破片が集中する。SC237と同様に竈封じの儀礼に関わるものか。出土遺物には須恵器壺類(1～4)、壺(5)、台付直口壺(8)、土師器甕(6、7)、甕(8)がある。壺類から6世紀後半頃か。

SC298

HK15グリットに検出した住居である。東側斜面中段に設けられている。検出面は標高約24.5mであり、二本柱の住居である。長軸はN-34°-Eをとる。建物規模は2.7×2.0m以上である。柱間は桁間1.7～1.8mである。柱穴は円形であり、径は15～20cmである。直交軸にも柱穴があり、これが伴うか疑問である。柱穴の深さは0.1～0.3mと浅い。出土遺物はない。

SC307

H14・15グリットに検出した住居であり、東側斜面上段に造成された平坦面にわずかに床面、壁溝が検出された。検出面は標高約24.7mであり、柱穴は未検出である。

SC309 (巻頭図版2-1)

H15グリットに検出した住居である。東側斜面下段側は造成されている。検出面は標高約23.0mであり、二本柱の住居である。復原するとSC49、307との重複があるが、前後関係は不明である。長軸はN-55°-Wをとる。規模は3.3×2.2m以上である。柱間は1.4～1.5mである。柱穴は不整円形であり、保存の良い東側で径0.3m前後、深さ0.2m前後と深い。住居西側壁には保存状態は悪いが、竈があり、部分的に焼土が遺存した。遺物は土師器甕(12)がある。

(4) 西1群 (Fig.19)

F～H16～19グリット付近にあり、谷の西側斜面に大溝SD41を挟んで住居4棟と建物1棟が検出された。SD41の出土遺物から見ると、これらの遺構はSD41掘削以前に構築されたと考えられる。また建物はSB335に隣接するH19グリットに古墳SX271がある。このうちSC340～342は暗褐色包含層直下で壁溝のみの検出であり、壁などを見逃したこととも考えられる。

SC389

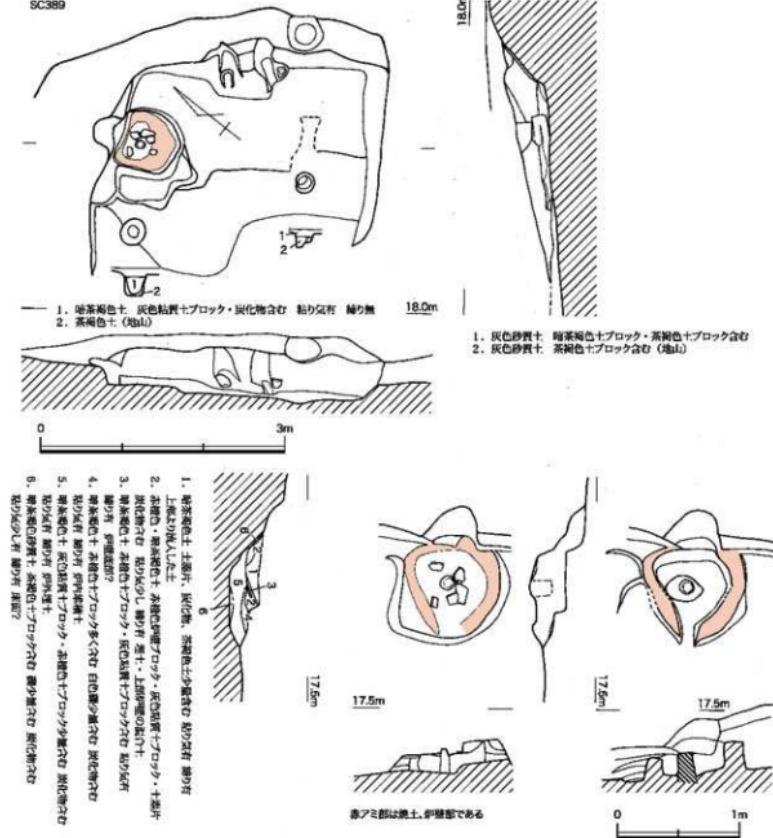


Fig.10 積穴式住居 1 (1/60, 1/40)

SC314 (巻頭図版 2-2)

H16 グリットの第4面に検出した方形住居である。南側斜面上部に設けられている。造成により北～西側は削られ「L」字形に住居隅部が残されている。検出面は標高約 26.0m であり、隅部が直角に近い住居である。長軸は N-05°-W をとる。規模は南北 3.3m 以上、東西 2.5m 以上である。柱穴は不明であり、壁溝内に二列の有機質帯が認められた。

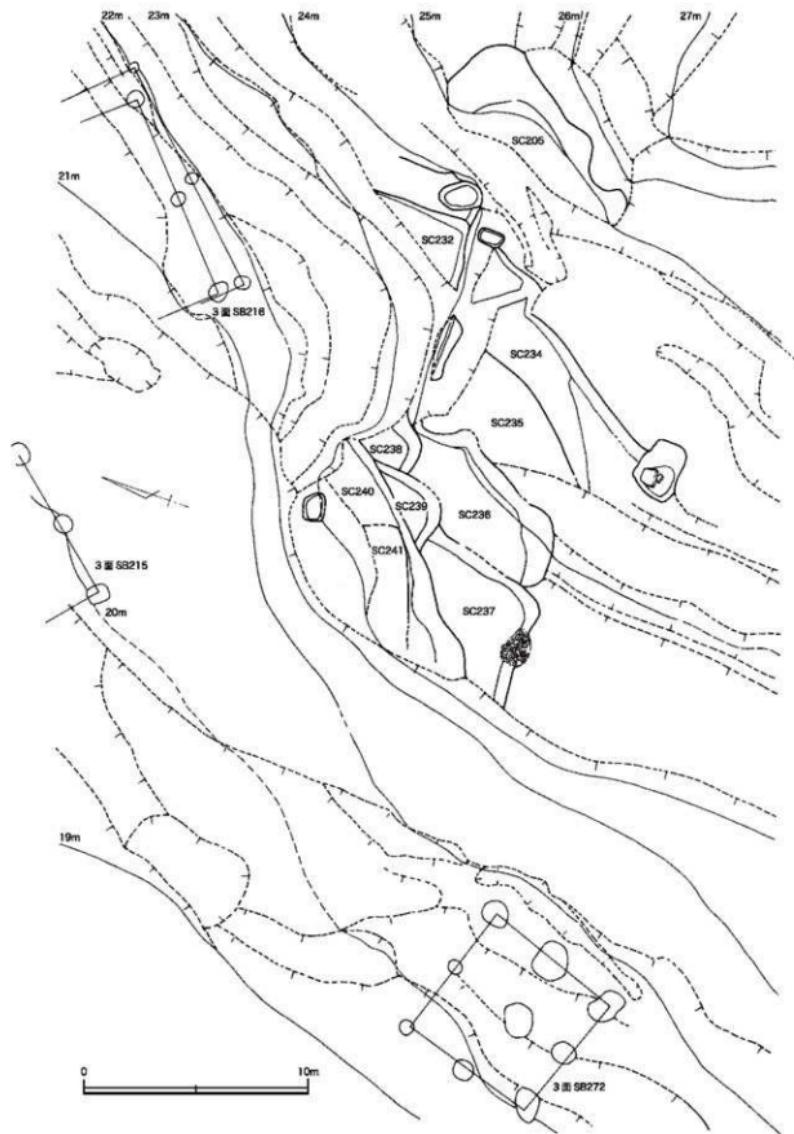


Fig.11 第4面東2群造構配置図 (1/200)

SC340

F・G18 グリットに検出した隅丸方形住居であり、第4面で壁溝のみを検出した。西側緩斜面に設けられている。旧谷部から続く地表直下に検出面があるため、類似した基盤土と遺構内埋土の区別が困難であり、住居全体を把握することが出来なかった。検出面は標高約26.3mである。二間三間の側柱建物である。同じ第4面のSB281との重複があるが、先後関係は不明である。東側の柱穴4個が明瞭で直線的に配置し、長軸はN-41°-Wをとる。建物規模は3.7×0.8m以上である。柱穴は不明であり、一部はSD41に切られたとみられる。

SC341

G18 グリットに検出した四本柱の隅丸方形住居であり、西側緩斜面に設けられている。本住居も旧地表直下で壁溝の一部を検出したものである。検出面は標高約24.2mであり、直角に近い壁溝を有する住居である。他の住居との重複はないが、北側2.5mに建物主軸の一一致するSC342がある。その配置や異なる埋土から同時期に存在したとは考え難いが、先後関係は不明である。長軸はN-63°-Eをとる。住居規模は推定で4.5×4.0mである。柱間は桁間1.7～1.8m、梁間1.2～1.4mとゆがみがある。柱穴は残りが悪く、円形か不整円形、隅丸方形であり、径もしくは長辺が0.2～0.3m、深さ0.1～0.3mと比較的浅いが、二段掘りとなるものがある。検出面が地山直上でもあり、本来盛土遺構などがあったもの大きく削平されたと考えられる。

SC205

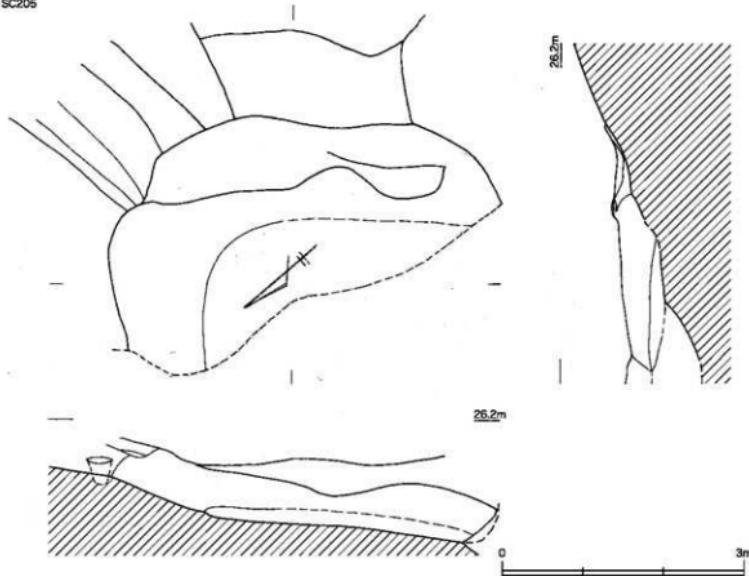


Fig.12 穹穴式住居2(1/60)

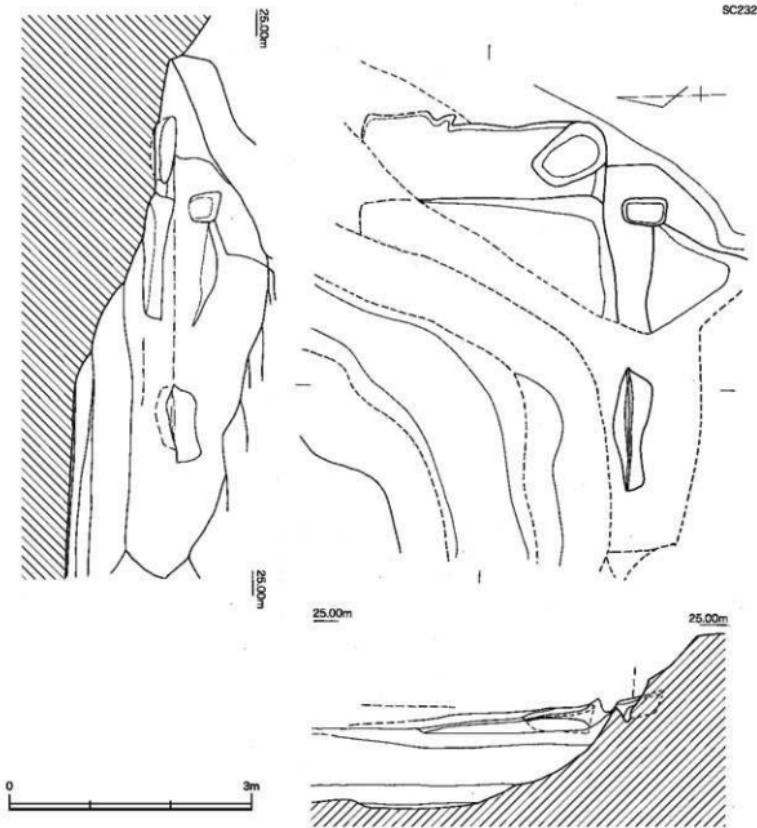


Fig.13 壁穴式住居 3 (1/60)

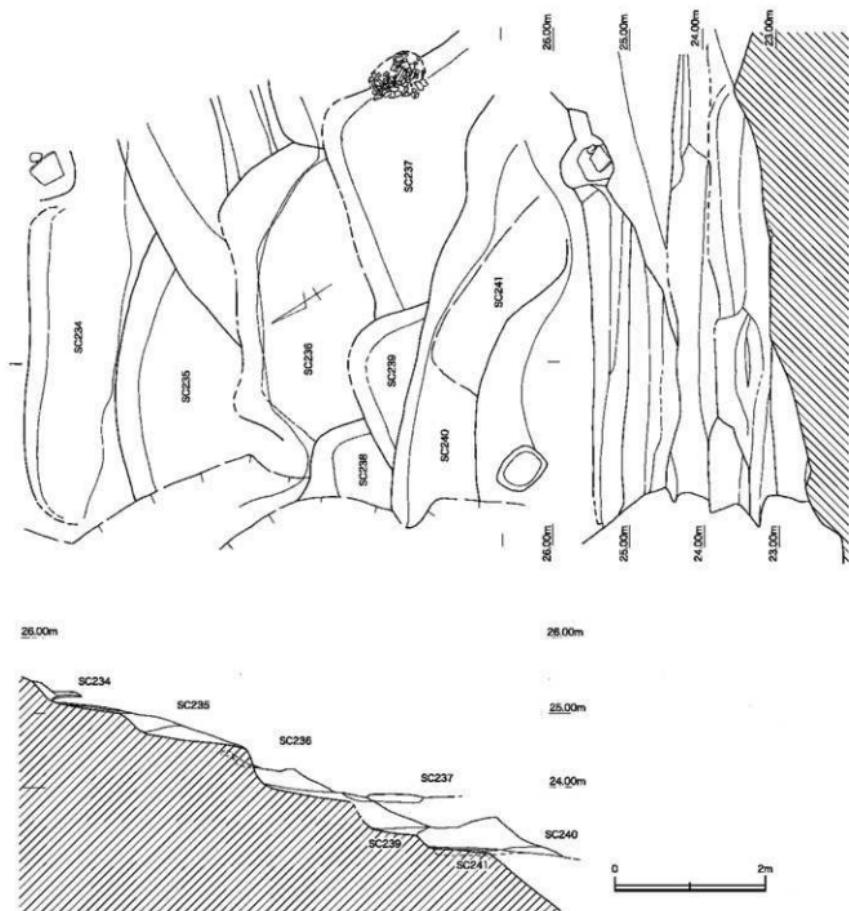


Fig.14 壁穴式住居 4 (1/60)

SC342

H18 グリットに検出した方形基調の住居であり、西側緩斜面中央に設けられている。南壁と三本の主柱が確認された。本建物の西側約 2m に古墳 SX271 の墳丘端部がある。検出面は標高約 25.0 ~ 25.4m であり、四本柱の住居である。住居主軸は N-47°-E をとる。規模は推定で 5.2m × 5.5m である。柱穴は不整椭円形であり、長軸 0.2 ~ 0.3m、深さ 0.1 ~ 0.3m である。



Fig.15 第4面東3群遺構配置図 (1/200)

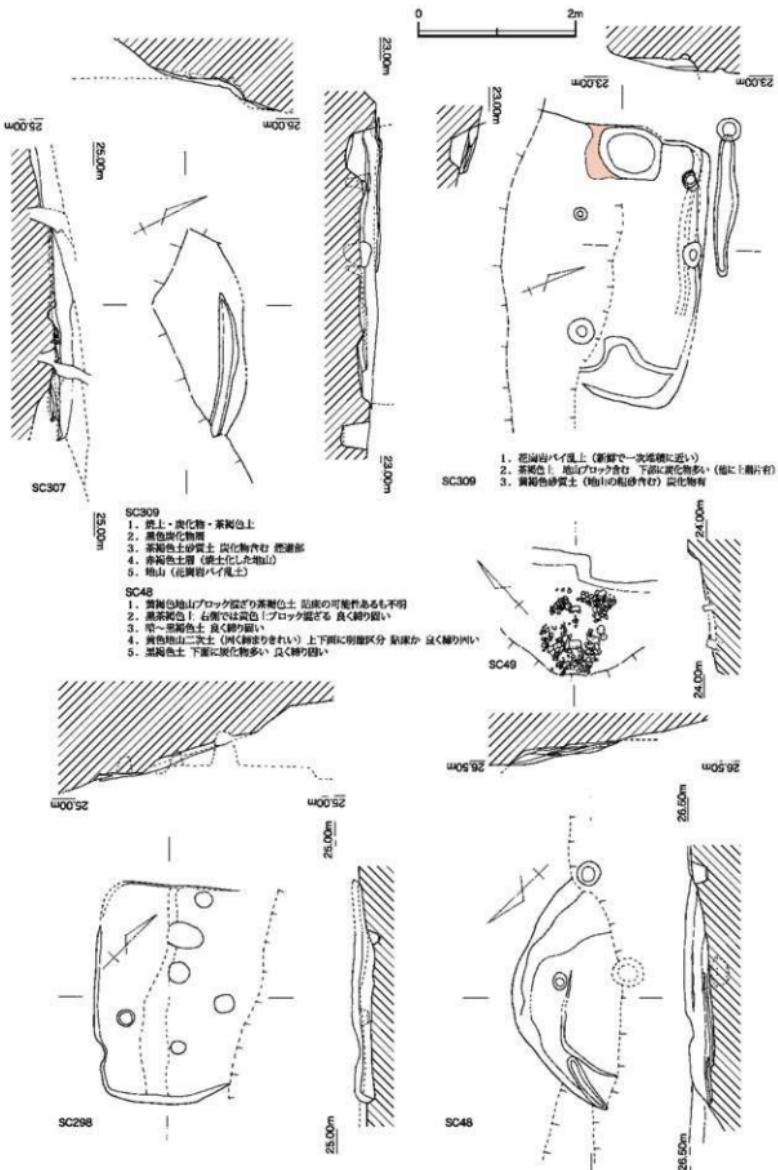


Fig.16 壁穴式住居 5 (1/60)

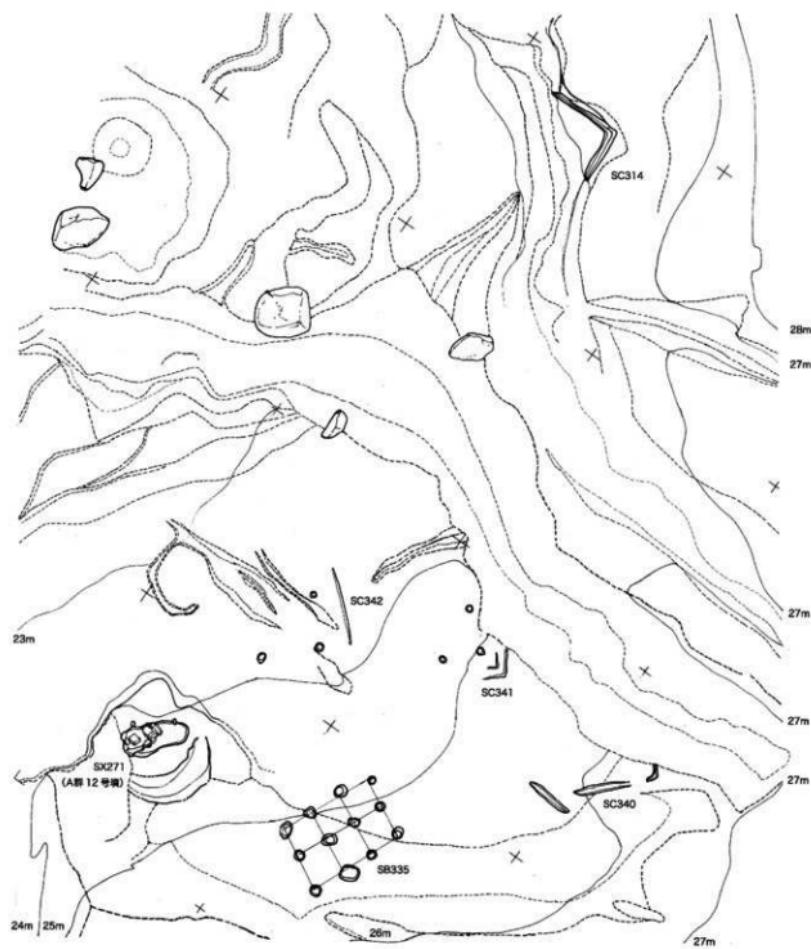


Fig.17 第4面西1群造構配図 (1/200)

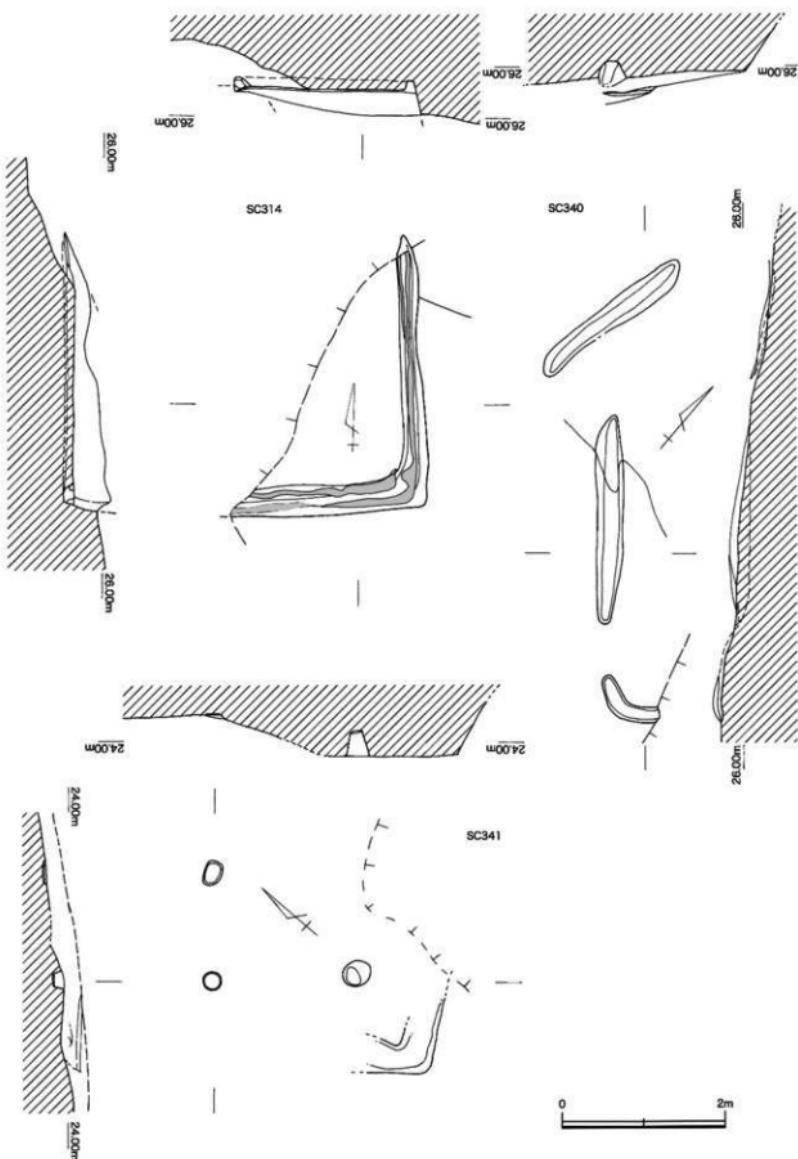


Fig.18 設穴式住居 6 (1/60)

2) 捩立柱建物

SB335 (Fig.19, 25)

G19 グリットに検出した建物であり、西側斜面にある。竪穴式住居西1群中にある建物である。検出面は標高約 24.9 ~ 25.5m であり、二間三間の縦柱建物である。SB244 と重複があり、より先行する。長軸は N-60°-W をとる。建物規模は桁行 4.0 ~ 4.5m、梁行 3.2m である。柱間は桁間 1.1 ~ 1.5m、梁間 1.4 ~ 1.7m とばらつきが大きい。柱穴は不整梢円形であり、径 0.5m 前後、深さ 0.2 ~ 0.4m である。出土遺物は少なく、柱穴上部から須恵器高杯(1, 2)、土師器椀(3)、高杯(4)がある。

3) 古墳

SX271 (桑原古墳群 A 群 12 号墳)

I・J16 グリットの第4面で検出した古墳である。調査当初は古墳と判断できず、「SX」ナンバーを付したが、小規模の古墳であると判断した段階で周辺の桑原古墳群 A 群の末尾番号を付し「9号墳」とした。その後 25 次調査で 9 ~ 11 号墳の確認、呼称があったため、改めて 12 号墳としたものである。本古墳は調査 1 区西側緩斜面に設けられている（巻頭図版 3-1）。検出面は標高 23.8 ~ 24.5m である。周辺には花崗岩石材の散布が多く、また古代の壇造成に伴う石垣状構造もこの古墳の周辺に多い。古墳南側の斜面上方には「C」字形の周溝が巡る。周溝底に見える墳丘端部からの復元では、直径約 5m の墳丘が復元される。墳丘の北～東側は古代の壇造成時に削平されている。古墳の主体部は中央に設置された小型の横穴式石室である。石室は南に開口し、石室も石材が抜き取られ、検出時には大きく破壊されていた。石室掘り方は長さ 2.9m、幅 1.6m、深さは最大 0.6m である。石室は掘り方の北側に設置され、南側は閉塞部と前庭をなしている。石室は左壁のみが残り、2 つの腰石がある。また、羨道部には幅 0.7m、幅、厚さ共に 0.4m の扉が設置される。通常なら閉塞施設があるべき位置で、当初から石室に四壁が設けられた石棺状の石室が復元される。内部の法量は長さ約 0.9m、幅約 0.6m、高さ 0.5m 以上と復元される。

出土遺物には石室材間や周溝などから須恵器、土師器類が出土した (Fig.26)。須恵器には坏蓋(1)、坏身(2, 3)、土師器椀(4, 5)、高杯(6)、壺(7, 8)、甕(9, 10) がある。須恵器はⅢ b ~Ⅳ a 期であり、6 世紀第4四半期に位置付けられる。

4) 石組遺構

SX430 ~ 432

本遺構は前回報告の井戸北群に隣接し、湧水点である南斜面を弧状に覆っている。検出面は標高約 15 ~ 16m である。石組みは三段に分かれ、各石組みの間には通路状の平坦面が形成されている（巻頭図版 3-2）。最下段の SX432 は一部に湧水があり、井泉を被覆しているとみられた。石積みの間に須恵器、土師器の小片が散在していたが固化に耐えうるものは少ない。なお、SX432 の北側から完形の須恵器台付直口壺と動物骨と歯牙部が出土した。動物骨は保存状況が悪く、検出段階で粉化崩落してしまった。その出土範囲は広くなく、径数十 cm 程度であった。歯牙部については、山崎純男氏により馬との判断が示されており、出土状況を考え合わせると馬の頭部のみが埋められたことも考えられる。石組み遺構内からの出土遺物 (Fig.30) は、須恵器坏蓋(1)、高杯(2)、台付直口壺(3)、横瓶(4) がある。このうち台付直口壺は、口縁部を北東に向けて埋置されていた。

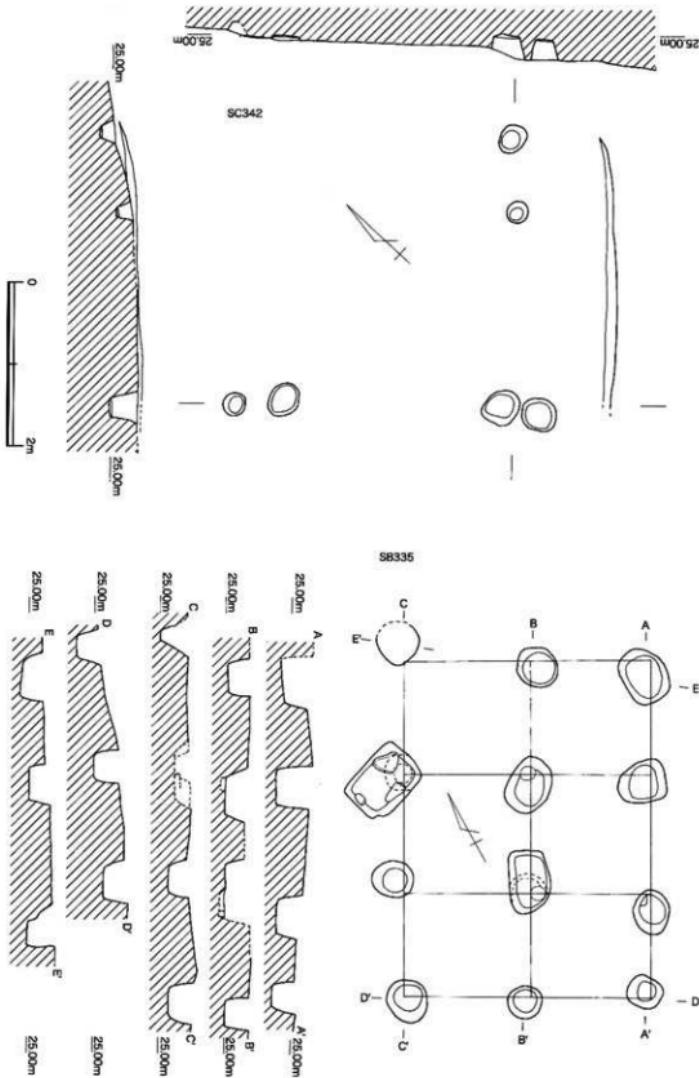
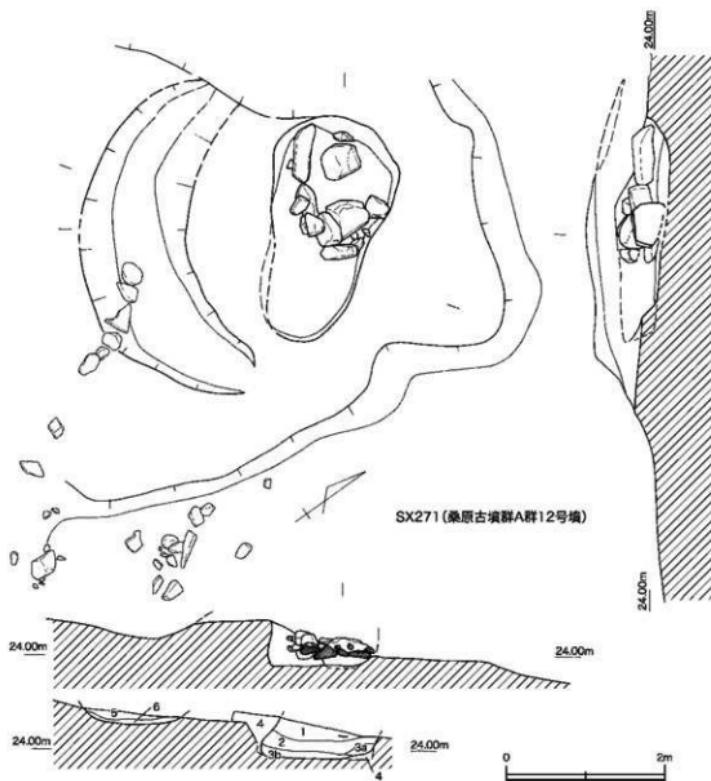
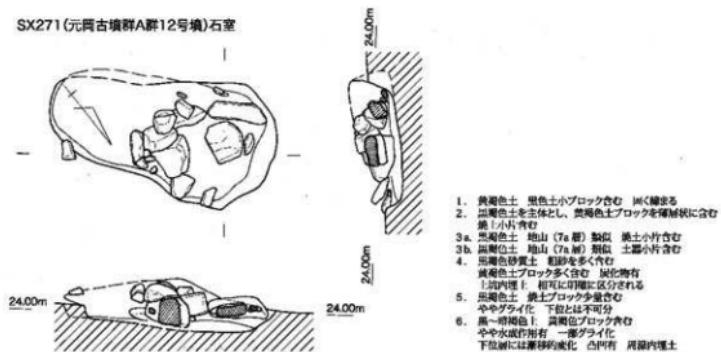


Fig.19 堪穴式住居 7、据立柱建物 (1/60)



SX271(元岡古墳群A群12号墳)石室



1. 黄褐色土 塗色土小ブロック含む 土く壁泥炭
2. 加瑪色土を主体とし、黄褐色土ブロックを複数枚に含む
第1小片含む
3. 黄褐色土 地山(7a部) 級似 土小片含む
- 3a. 黄褐色土 地山(7a部) 級似 土小片含む
- 3b. 地面側土 地山(7a部) 級似 土小片含む
4. 黄褐色土 塗色土小ブロック含む 土く壁泥炭
黄褐色土ブロック多く含む 土く壁泥炭有
「土内壁」：柱石に周囲に区分される
5. 黄褐色土 塗土ブロックを壁含む
ややグライ化 下部とは不可分
6. 黑一帯褐色土 黃褐色土ブロック含む
やや水底作用有 一部グライ化
下位には漂移的変化 凸凹有 土質内埋土

Fig.20 古墳 SX271 (桑原古墳群 A群 12号墳) (1/60)

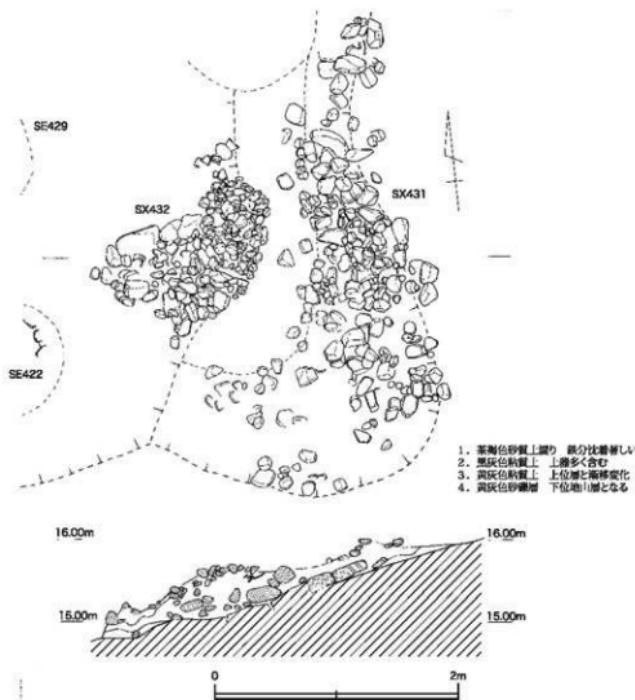


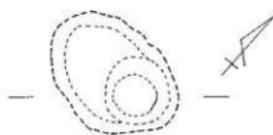
Fig.21 石組遺構 SX431, 432 (1/60)

2 埋納遺構

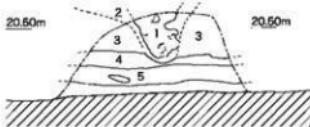
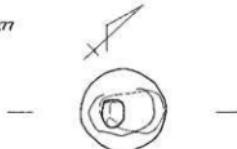
SX289 (巻頭図版 4-1, Fig.22・27・28)

通称「ザル須恵器」と呼んでいる、編籠に須恵器を配置した状態で出土した遺構である。G16・17 グリットの第4面で検出した。SX100 の基底層にあたるIV層中部で完形品の須恵器が集中して出土し始め、注意していたところ標高約 22.8m で配列状況の須恵器坏身とその下部の編籠を確認した。編籠は浅い掘り方に据えられていたが、土圧によるものか平板化し、かつ地下水のある南～西側の基盤の砂礫（IV層）に接する部分は保存状況がよくない。掘り方は検出面で長さ 0.9m、幅 0.8m、深さ約 0.1m である。編籠は遺構下面に接する径約 0.8m の範囲に残存していた。編籠は植物を裂いた薄板で製作され、肉眼では竹製の編組品に近く、単純な笊目編みである。北～東側は当初の編みの密度を保つが、南～西側は全体に編みが緩んでいる。底部は残存しないが、経板の集約状況から見て単純な「菊底編み」と推定される。また口巻きは皮藤状をなす。以上の点からこの編籠は浅い盆状の形態をなすものであったと見られる。

SX276



SX277



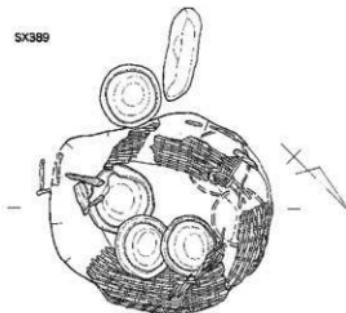
1. 白層 青褐色沙質土 粘り無 白色の貝が層状に織り木片を少量含む
2. 青褐色沙質土 粘り無 木片を少量含む
3. 青褐色沙質土 粘り有 小片を少量含む
4. 黑褐色沙質土 粘り有 織り張り強い 白色の石を含む
5. 青褐色沙質土 粘り無 織り気有 木片が多く含まれる

0 2m

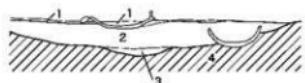
0

2m

SX389



23.0m 23.0m



1. 上層にわざかな三色砂質土
2. 黑色粘質土
3. 褐分粒層
4. 灰白色砂質土

0 50cm

Fig.22 その他の遺構 (1/20, 1/10)

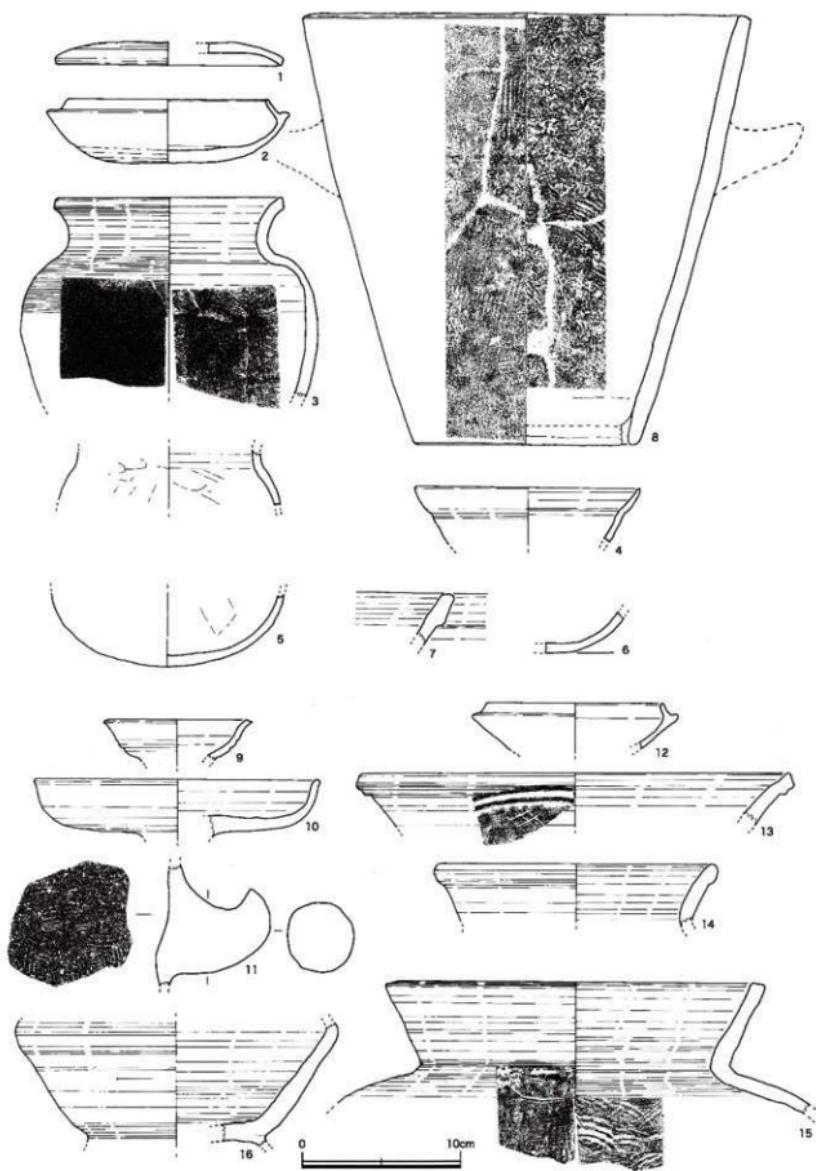


Fig.23 坪穴式住居出土遺物 1 (1/3)



Fig.24 積穴式住居出土遺物 2 (1/3)

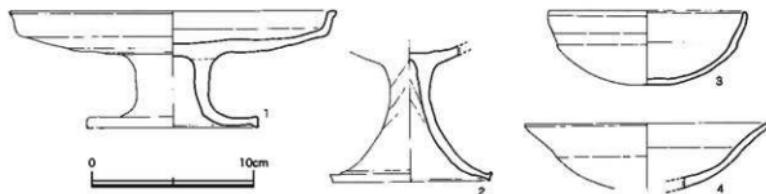


Fig.25 縦立柱建物出土遺物 (1/3)

本遺構とその上部から多数の遺物が出土した (Fig.27・28)。籠内には須恵器坏身 3点 (6～8)、南にずれて坏身 1点 (10)、西側の籠下に土師器椀 2点 (11、12) があった。籠下の土師器は当初から下に据え置かれたものか、埋没後籠が破碎すると共に潜り込んだものかは不明である。また本遺構内上部で籠内から遊離したと判断できる遺物に須恵器坏蓋 (1～5) が出土している。遺構の上部で出土した遺物には、須恵器坏蓋 (13～18)、坏身 (19～21)、壺 (22)、壺 (23)、土師器椀 (23～27)、高坏 (28)、甕 (29、30) がある。さらに周辺からは須恵器坏身 (1、2)、土師器椀

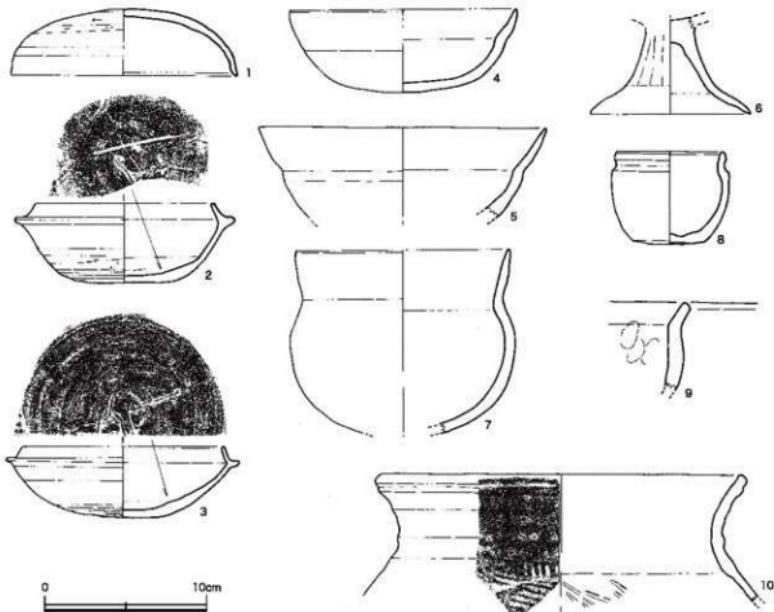


Fig.26 古墳 SX271 (桑原古墳群 A 群 12 号墳) 出土遺物 (1/3)

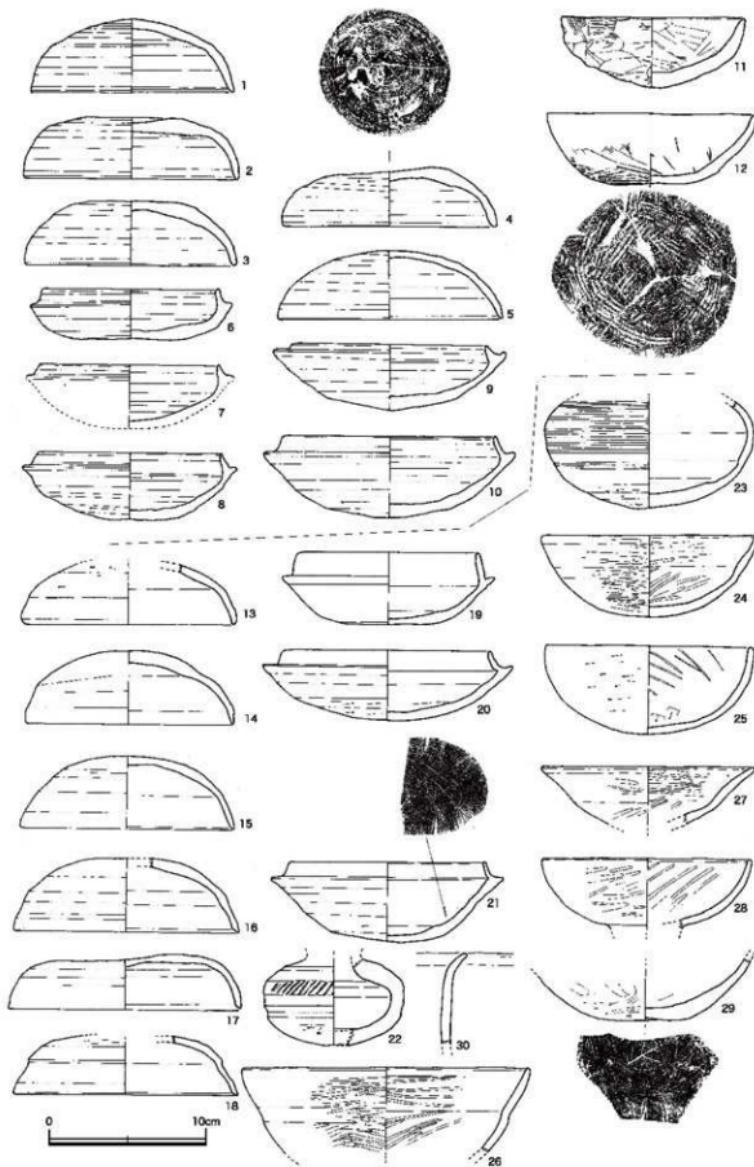


Fig.27 繡籠埋納遺構 SX289 出土遺物 (1/3)

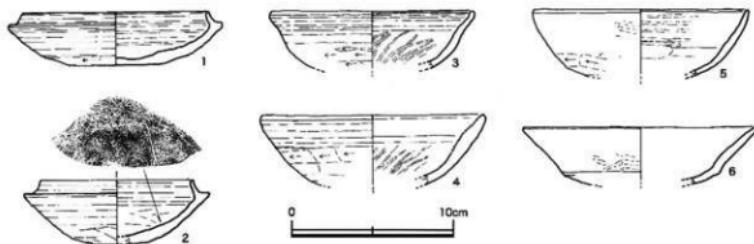


Fig.28. 編籠埋納造構 SX289 周辺出土遺物 (1/3)

(3～6) が出土した。遺構本体の須恵器はⅢ b 期であり、6世紀第3四半期と考えられる。周辺遺物の上限も同時期である。この遺構は出土遺物がほとんど环形に限られ、完形品であることから、何らかの祭儀に関わるものと考えられる。また、遺構周辺にはⅣ a 期に下がる遺物も存在していて、その関係は検討が必要となろう。

SX276-277 (Fig.42)

SX100 の最下部で、G16・17 グリットの第5面で検出した掘り方をする貝だまり遺構である。検出した標高は何れも 20.6m 前後であるが、少量の貝殻片がより上位から出土し始めていたことからみて、本来遺構の掘り方はより上位にあったと考えられる。SX276 は調査時点で周囲を掘り過ぎて

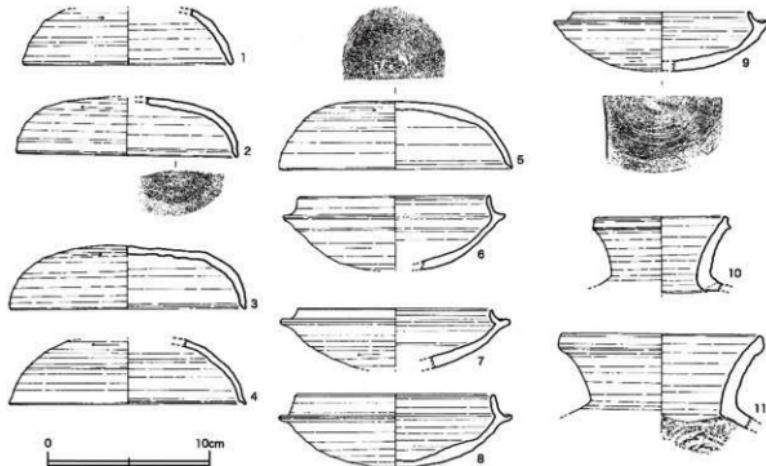


Fig.29. 貝ピット SX276, 277 出土遺物 (1/3)

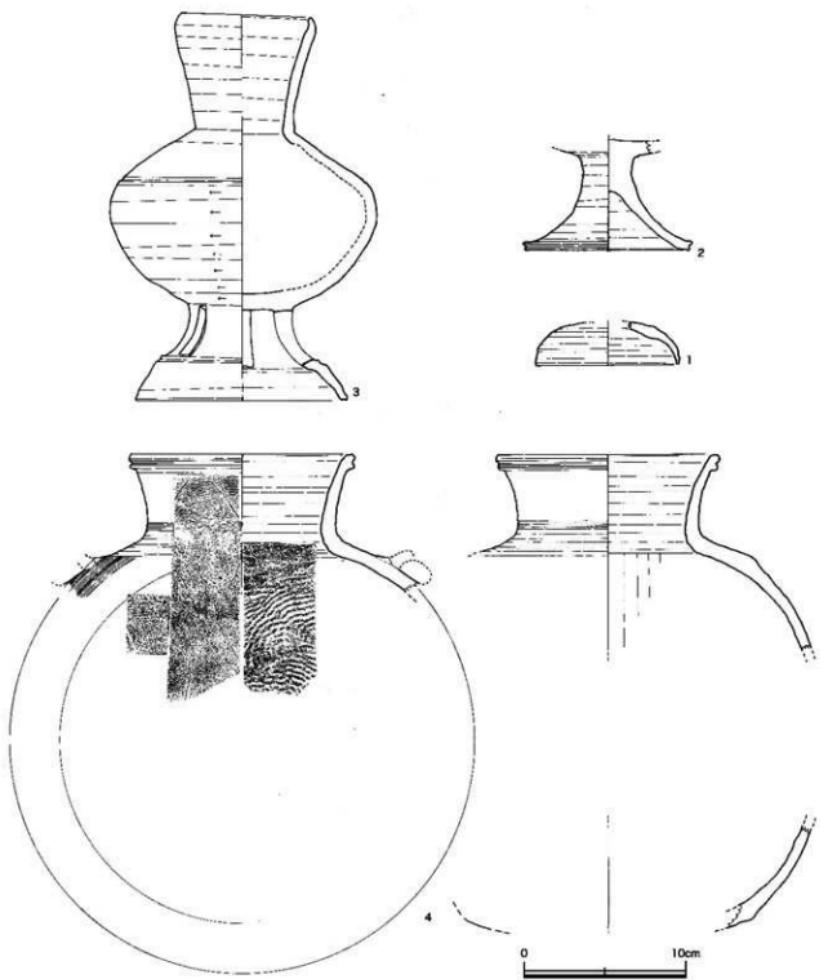


Fig.30 石組造構 SX431, 432 出土遺物 (1/3)

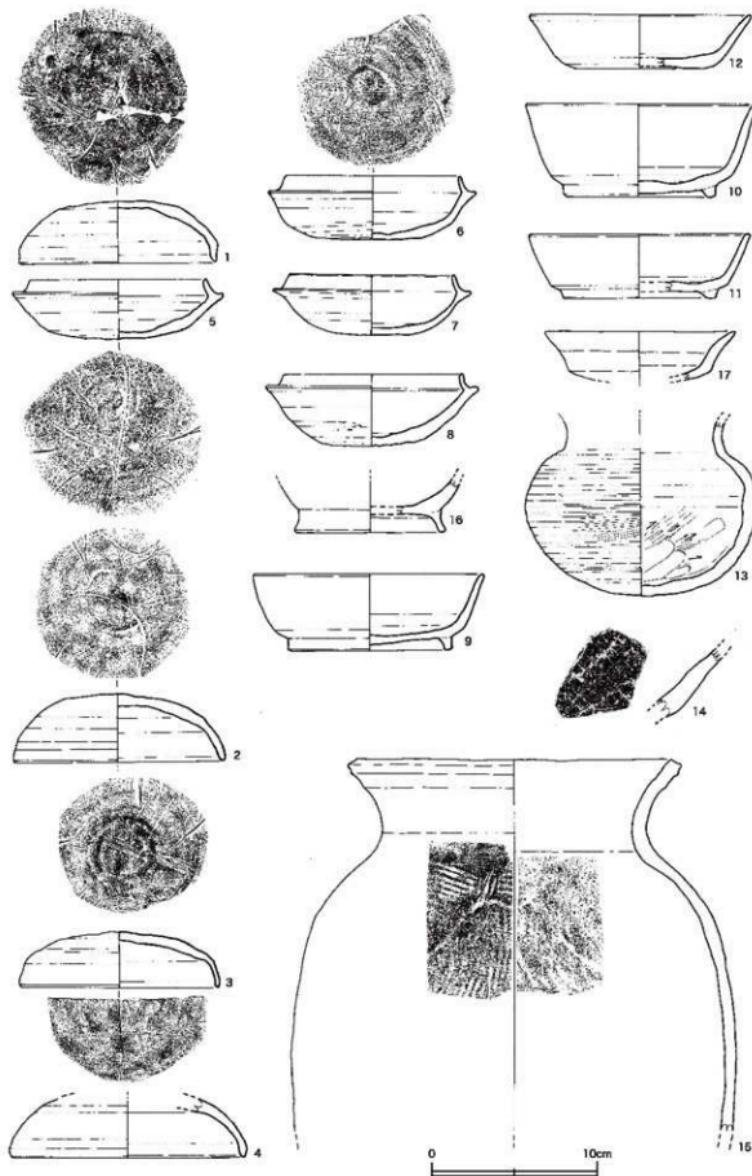


Fig.31 その他の遺構出土遺物 1 (1/3)

しまったが、推定で長さ 1.2m、幅 0.8m の平面橢円形で東側に二段掘りに下がる深さ 0.4m の柱穴状の掘り方をもつ（巻頭図版 4-2）。SX277 は径約 0.7m の円形で、深さは 0.1m である。これらの遺構の覆土は全て水洗し、貝類などの自然遺物を回収した。その内容は後述の 14) に示す。なお、本遺構内からの容器類の出土はないが、直上と周辺から須恵器が出土している（Fig.29）。須恵器には坏蓋（1～5）、坏身（6～9）、壺（10～11）がある。その特徴からⅢ a～b 期であり、6 世紀第 2～3 四半期と考えられる。

3 包含層

13) その他の遺構

SX100・404

調査 1・2 区の谷部にある流路である。本来自然流路であるが、古代において人為的造成が加えられ、流走方向などを変更している。同じ流路であるが、上流側の調査 1 区の範囲を SX100、下流側の調査 2 区の範囲を SX404 とした。前者が長さ約 70m、後者が長さ約 110m である。上流側では複数の枝溝がある。SX100 は調査 1 区内で大きく二つの流れに分かれれる。主流の中央部で湧水点を含む範囲と南西側に分かれ、調査 4 区に延びる旧流路部分がある。

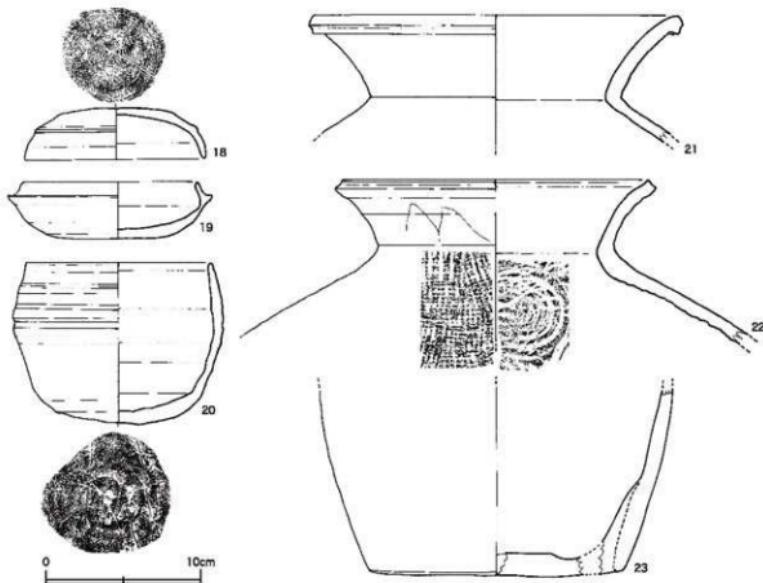


Fig.32 その他の遺構出土遺物 2 (1/3)

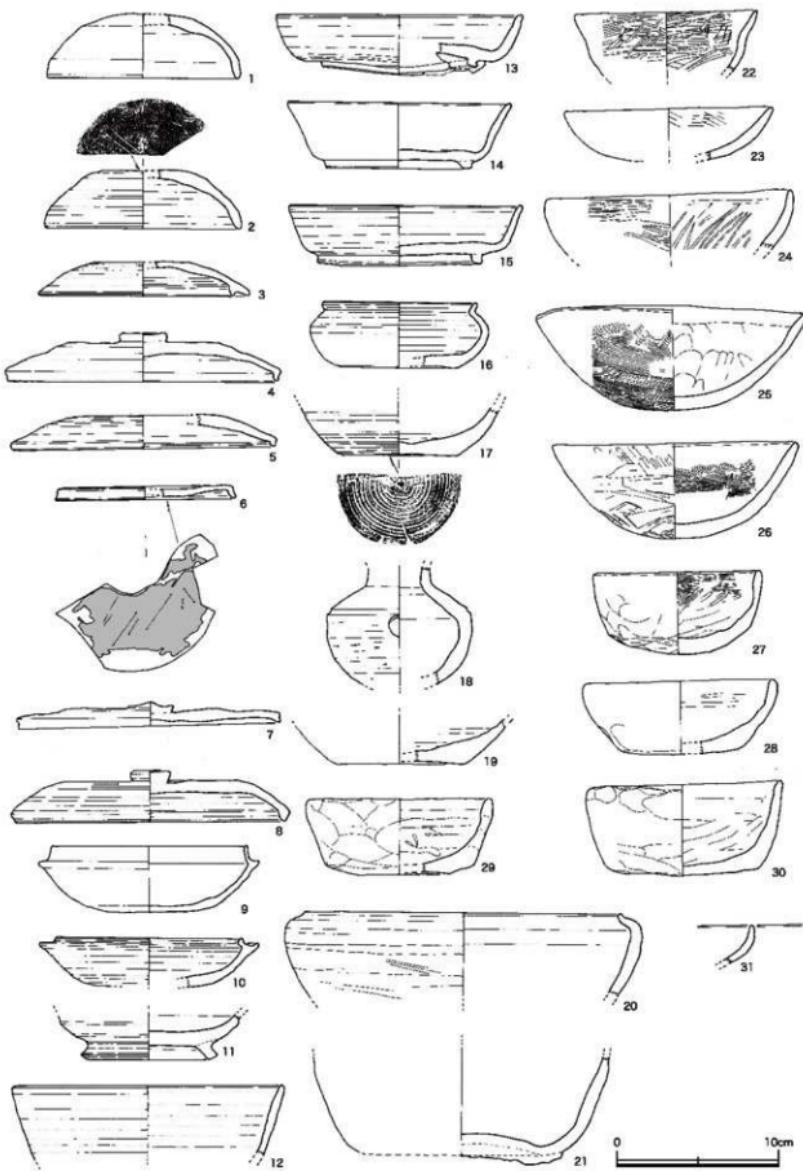


Fig.33 包含層 SX404 北部（5～8 区）出土遺物 1 (1/3)

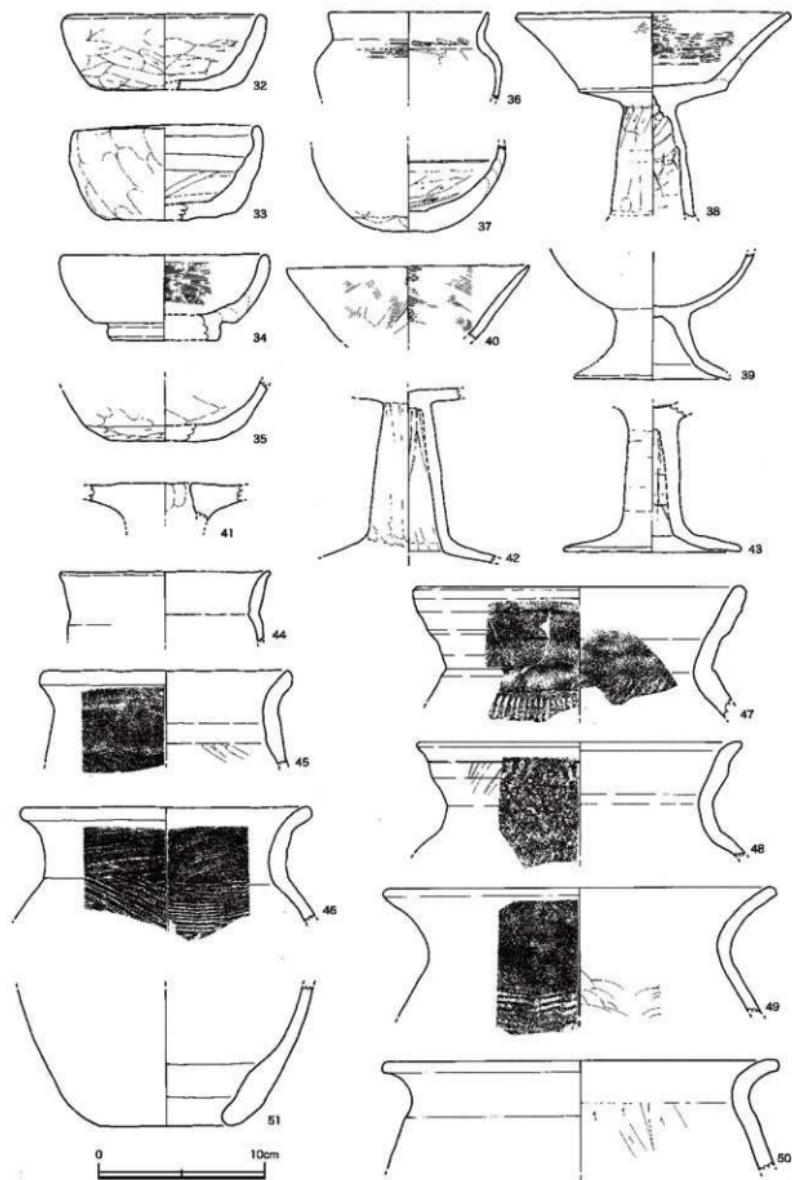


Fig.34 包含層 SX404 北部（5～8 区）出土遺物 2 (1/3)

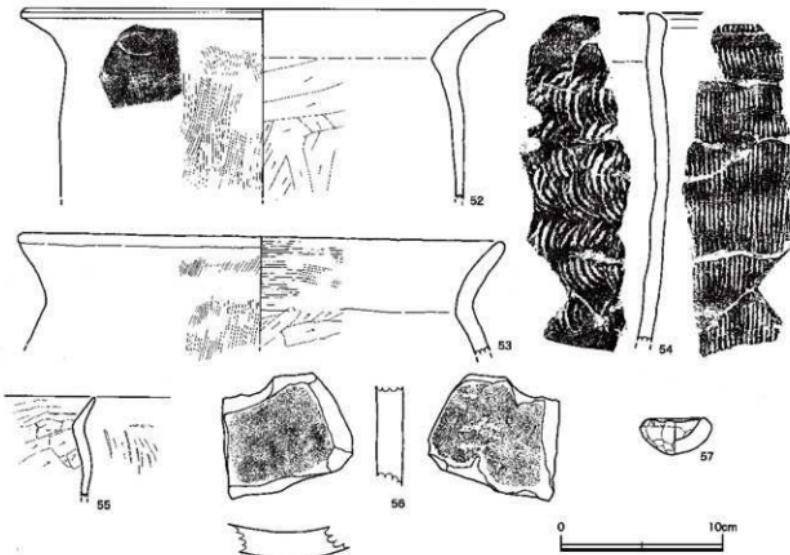


Fig.35 包含層 SX404 北部（5～8 区）出土遺物 3（1/3）

第5面は、こうした自然流路を利用した段階であり、旧石器・縄文時代から古墳時代まで継続している。そのうちとくに古墳時代には流路内や斜面に包含層などが形成されており、第4面の大規模な造成以前の古墳時代後期集落段階には廃棄場としての利用があったとみられる。前回は両包含層（SX100,404）の上半部遺物を報告した（1102集）が、今回は中～下半部出土遺物を報告する。この中には第3面に伴う造成盛土内の遺物も含まれる。若干の古代遺物が含まれるのはそのためである。

また、住居跡の報告でみたように集落内遺構の保存状況が悪く、出土遺物も少ない。そこで、豊穴式住居群の斜面下にあたる斜面から包含層 SX100,404 下部の遺物を抽出して、その資料を補うことしたい。また、報告は両包含層を北側からおよそ 30m 単位で区分し、SX404 北部、中部、南部、SX100 北部、中部、南部とする。因みに住居群との関係は、SX404 中部が東 1 群、SX100 北部が東 2 群、SX100 中部が東 3 群、SX100 南部が西 1 群のそれぞれ斜面直下に位置し、最も近接している。それぞれの内容は周囲に古墳時代住居群の存在しない SX404 北群、南群の遺物量が少なく、較差があることからも、何らかの有意性を認めてよいと考えられる。以下ではその内容を示す。

SX404 北部からは 57 点の須恵器、土師器類が出土した（Fig.33～35）。須恵器には、壺蓋（1～8）、壺身（9～15）、竈（18）、鉢（20・21）、壺類（16・17・19）がある。須恵器杯蓋（6）には内面に研磨痕と墨痕があり、転開覗とみられる。8世紀前半代か。土師器には、椀（22～35）、高壺（36～41）、壺（42～44）、甕（45～50・52～54）、竈（51・55）がある。他にミニチュア鉢形土器（56）、瓦片（57）がある。

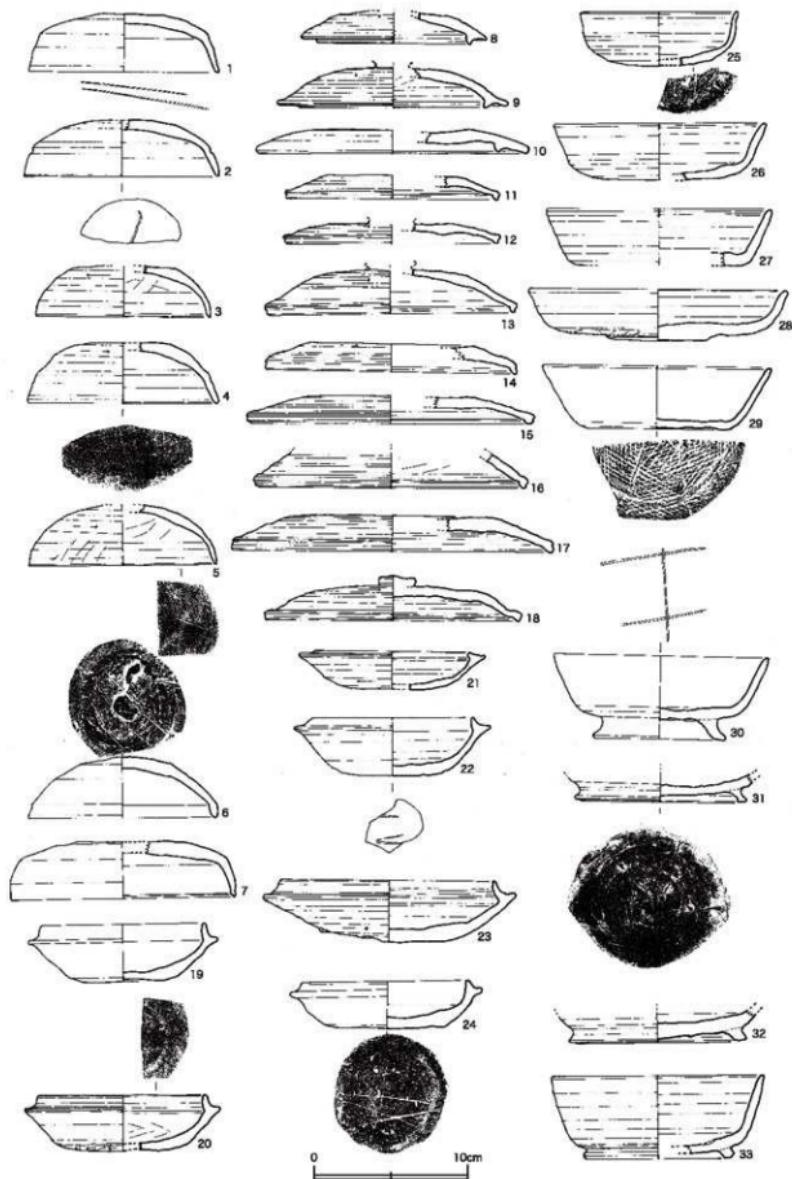


Fig.36 包含層 SX404 中部（1～4 区）出土遺物 1 (1/3)

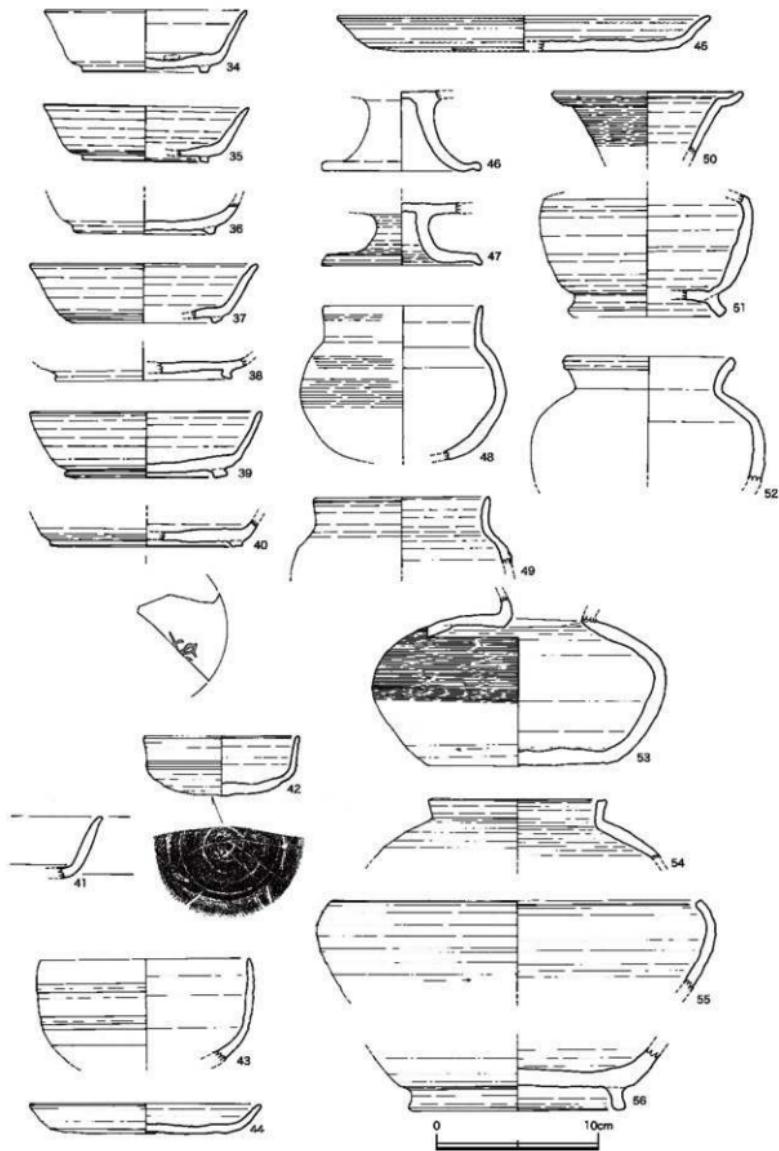


Fig.37 包含層 SX404 中部（1～4 区）出土遺物 2 (1/3)

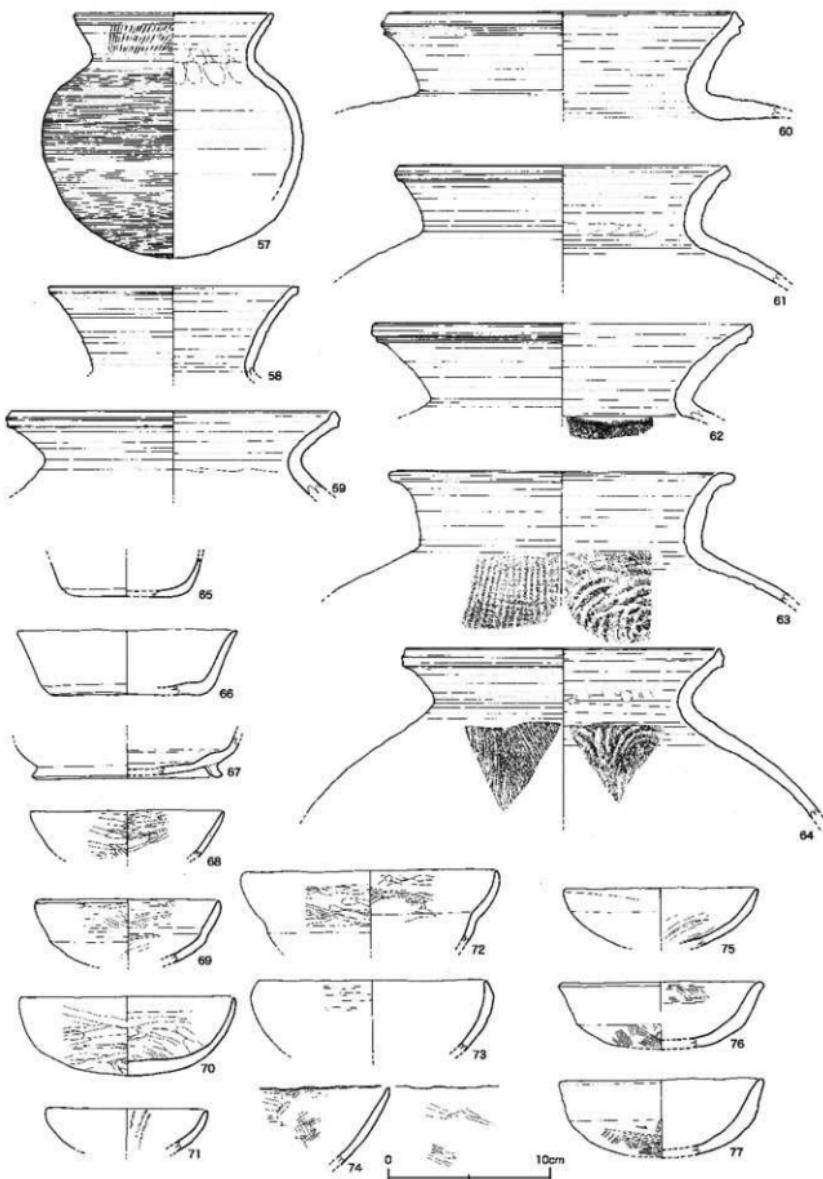


Fig.38 包含層 SX404 中部（1～4 区）出土遺物 3 (1/3)

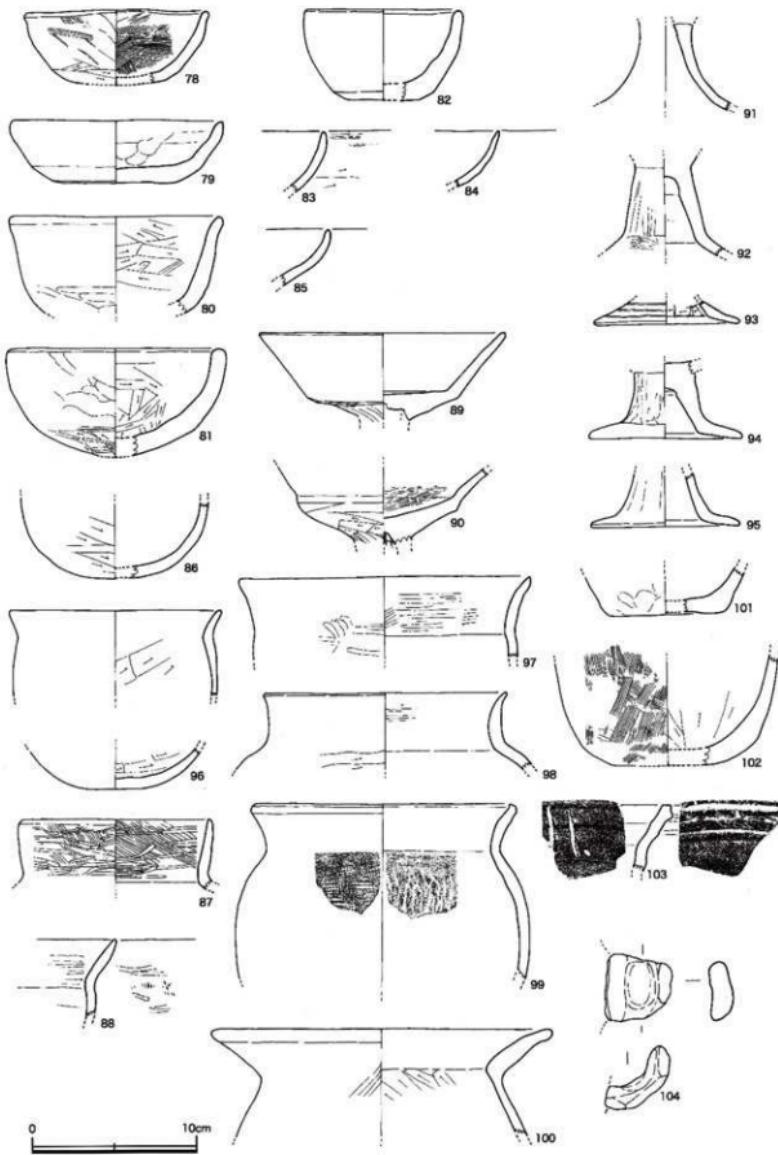


Fig.39 包含層 SX404 中部（1～4区）出土遺物 4 (1/3)

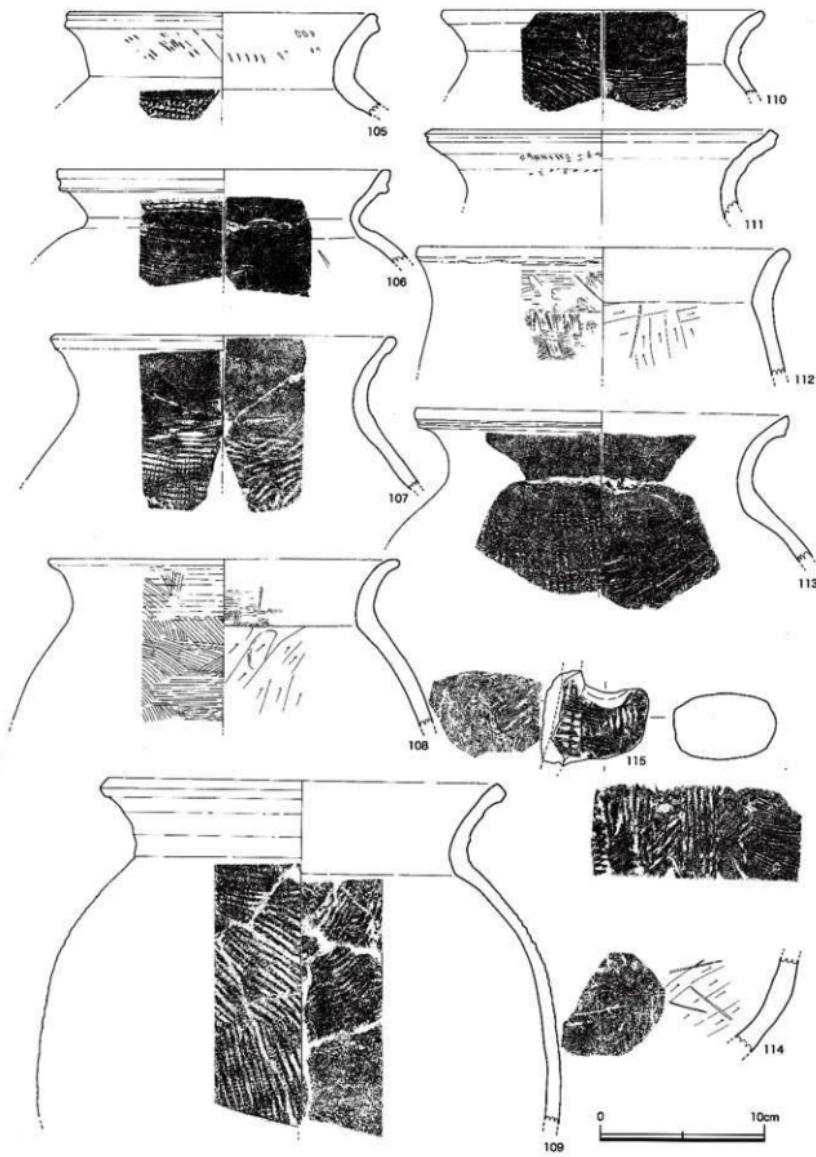


Fig.40 包含層 SX404 中部（1～4 区）出土遺物 5 (1/3)

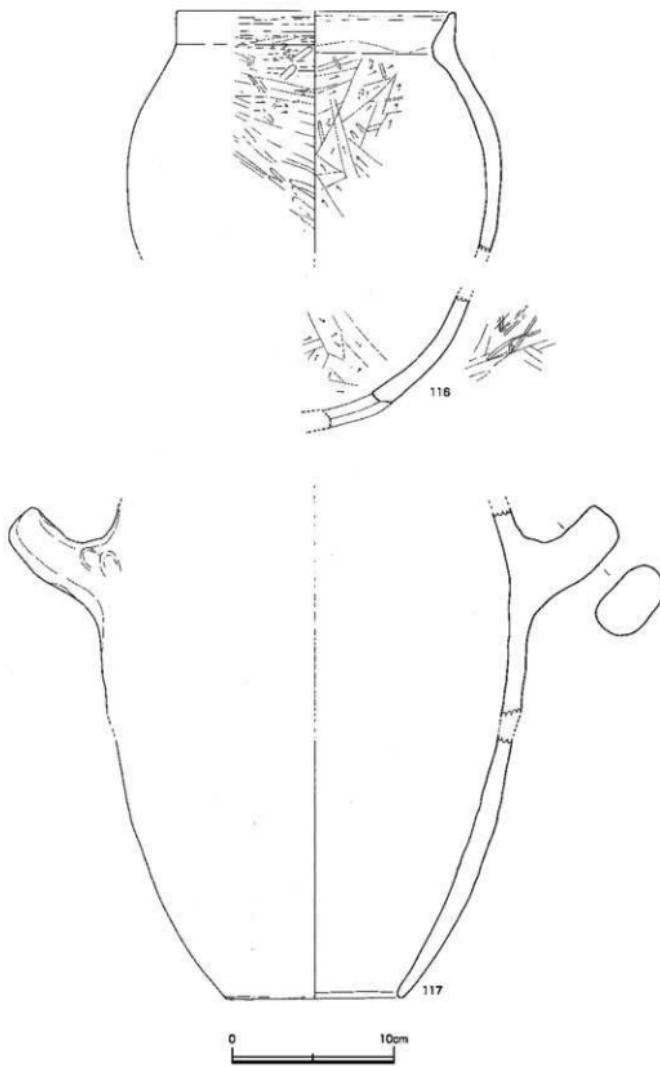


Fig.41 包含層 SX404 中部（1～4区）出土遺物 6 (1/3)

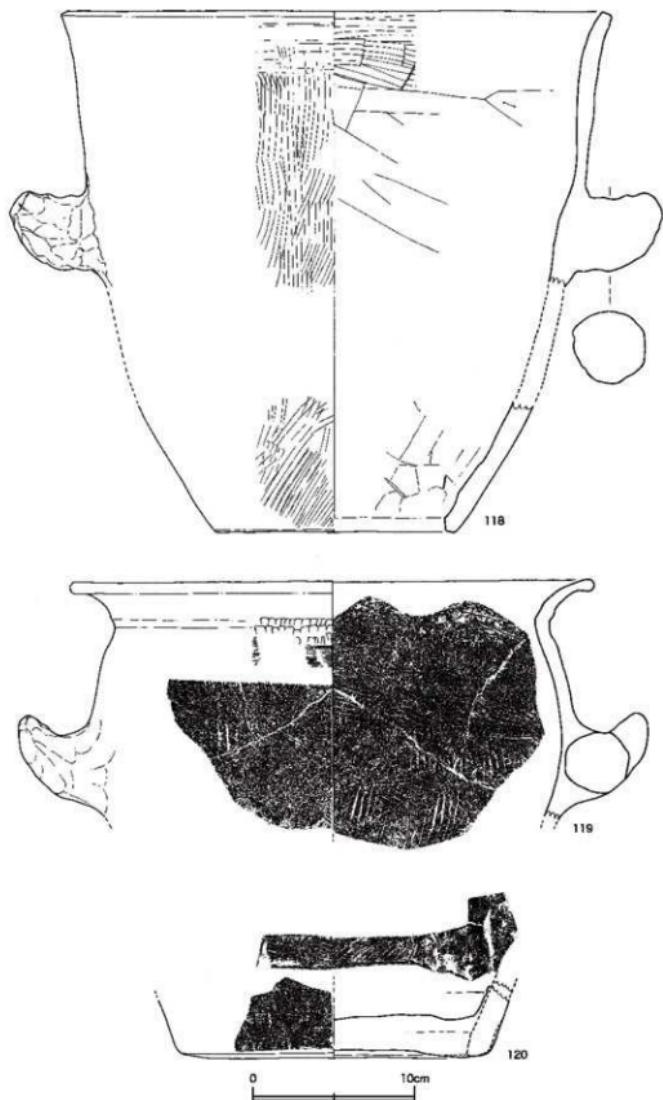


Fig.42 包含層 SX404 中部（1～4区）出土遺物 7（1/3）

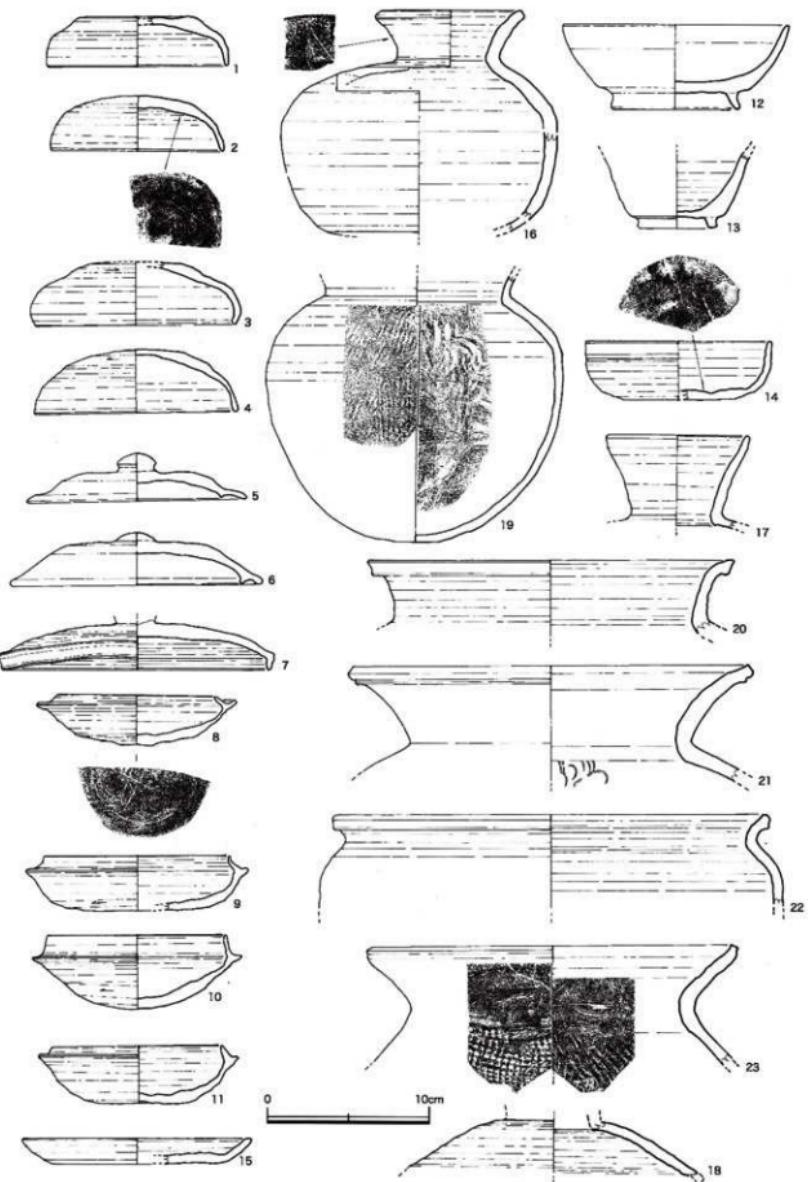


Fig.43 包含層 SX404 南部 (9 ~ 12 区) 出土遺物 1 (1/3)

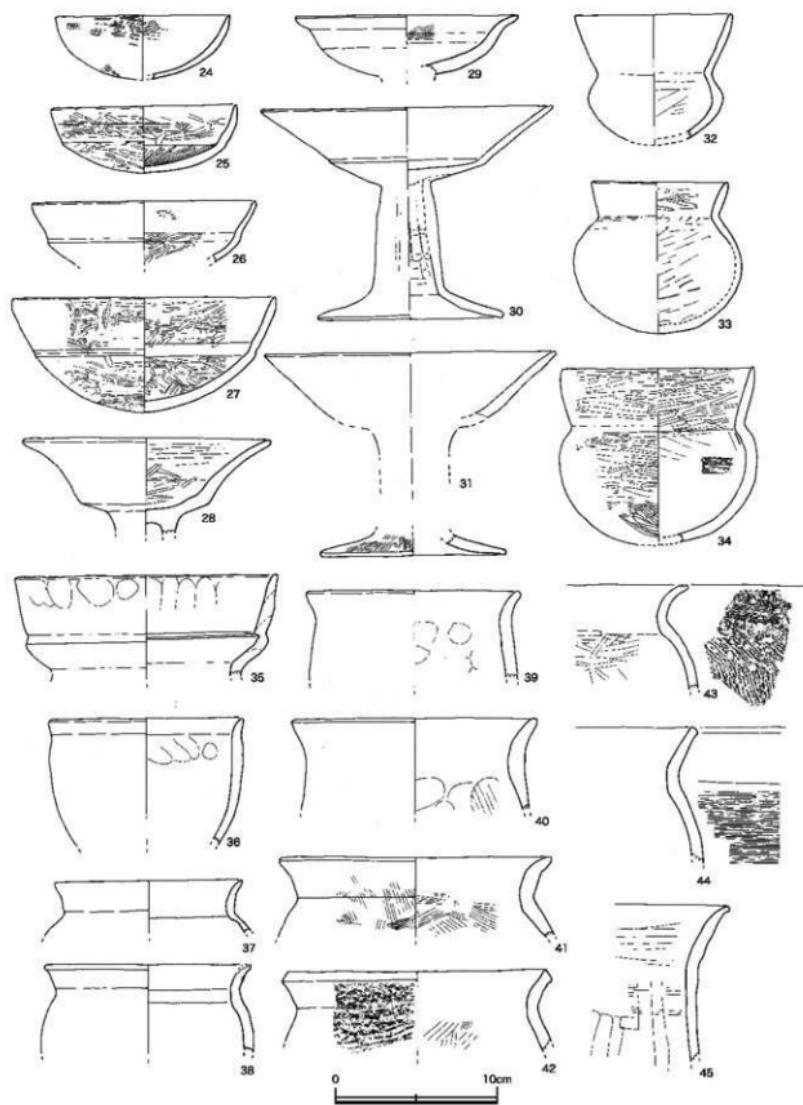


Fig.44 包含層 SX404 南部 (9 ~ 12 区) 出土遺物 2 (1/3)

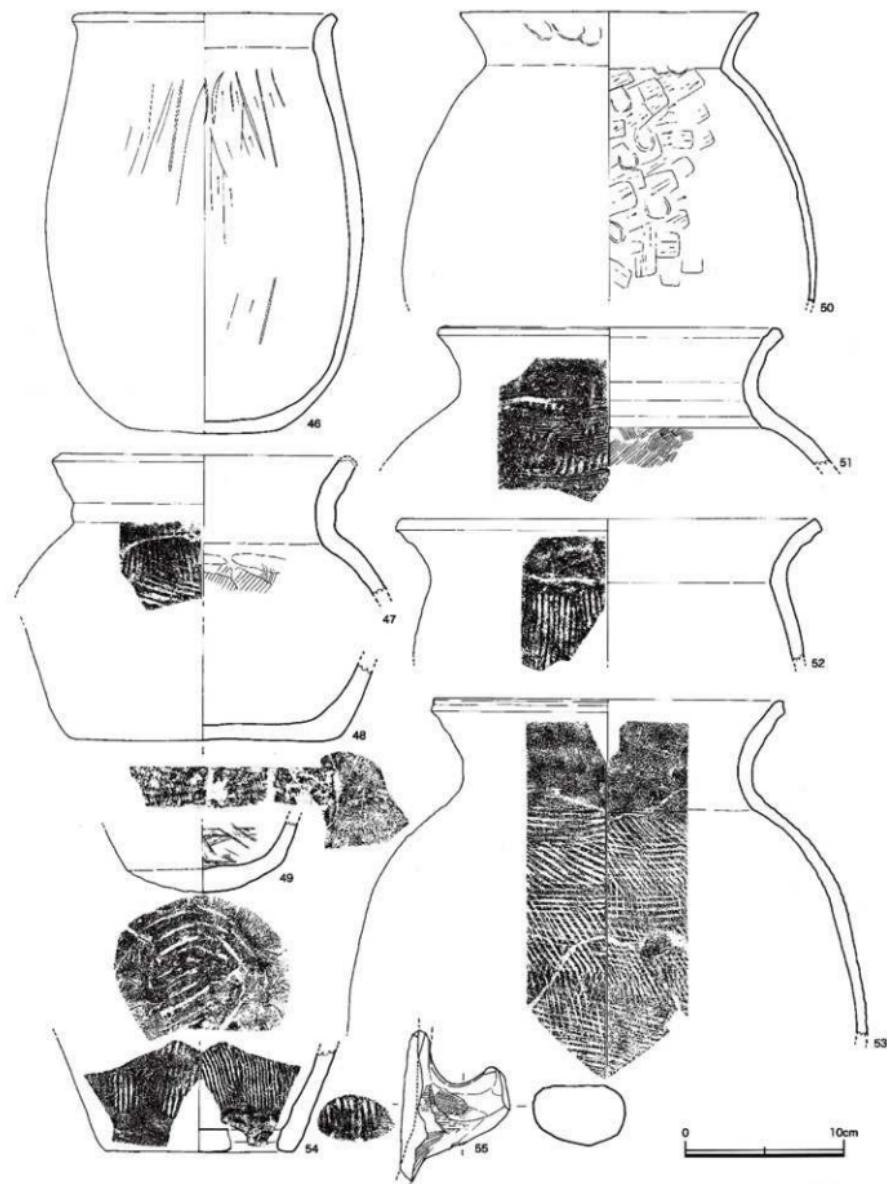


Fig.45 包含層 SX404 南部 (9 ~ 12 区) 出土遺物 3 (1/3)

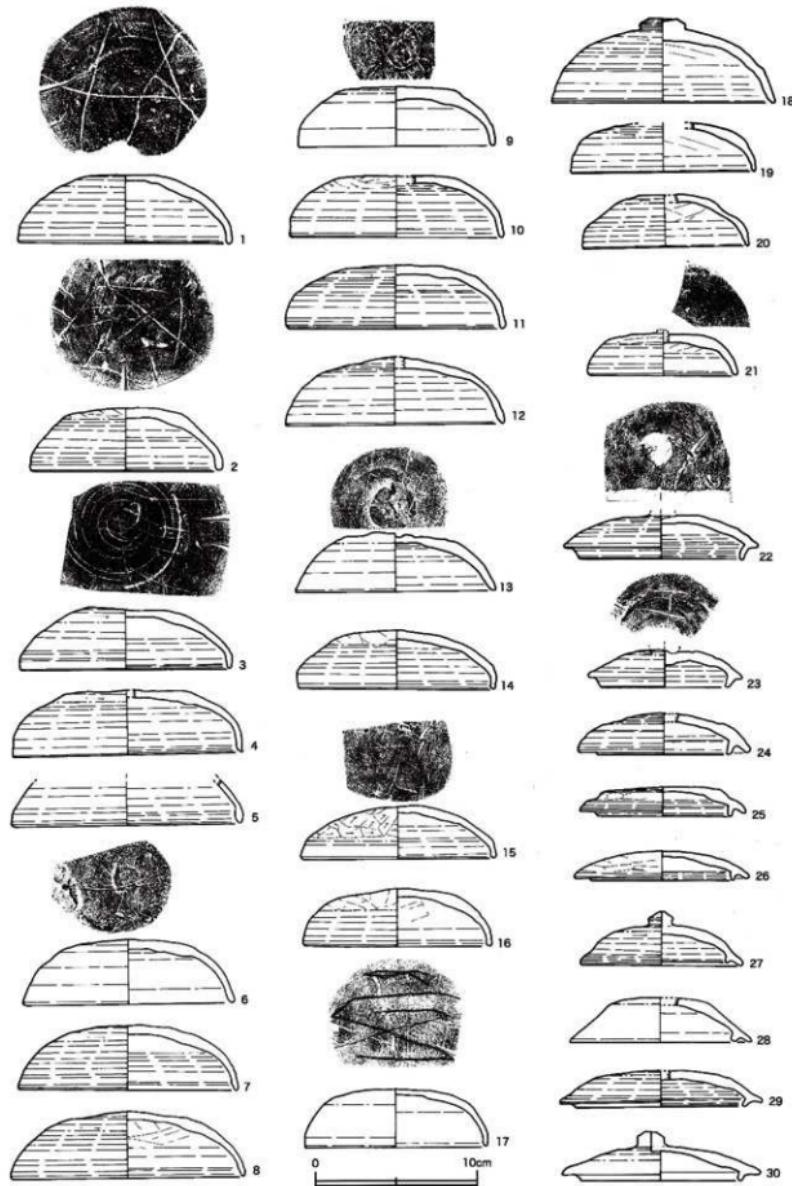


Fig.46 包含層 SX100 北部 (G ~ I 区) 出土遺物 1 (1/3)

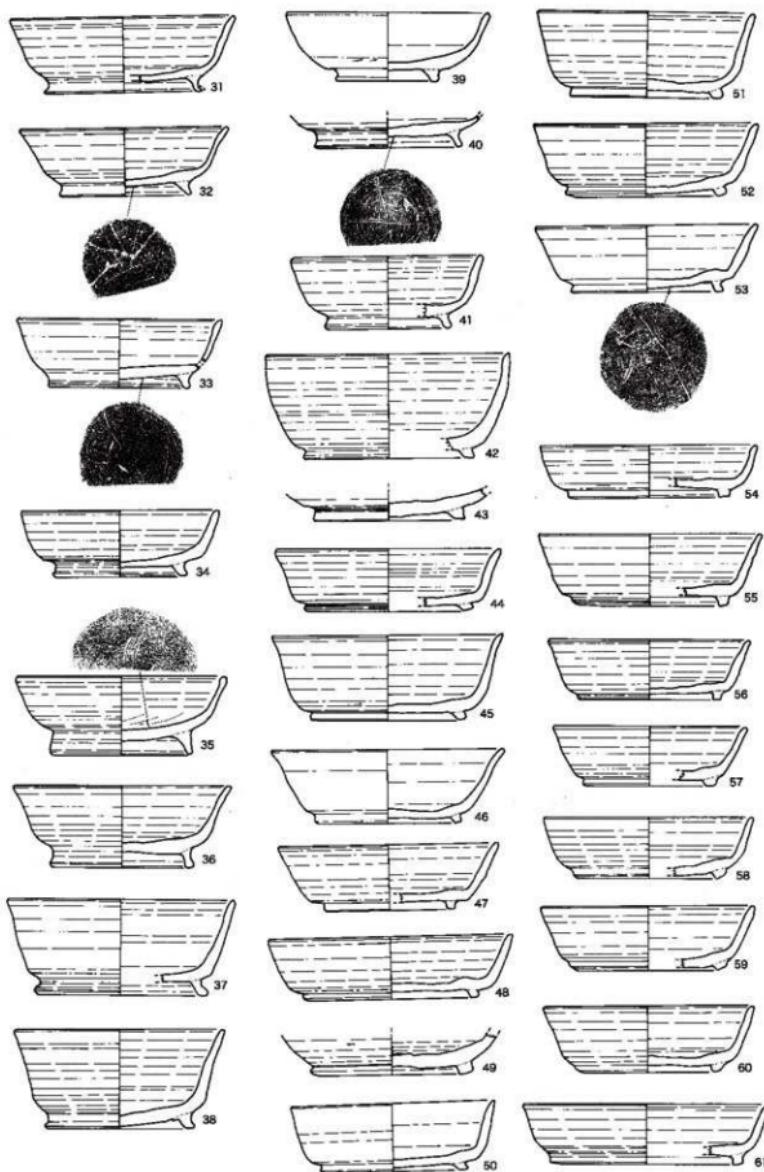


Fig.47 包含層 SX100 北部 (G ~ I 区) 出土遺物 2 (1/3)

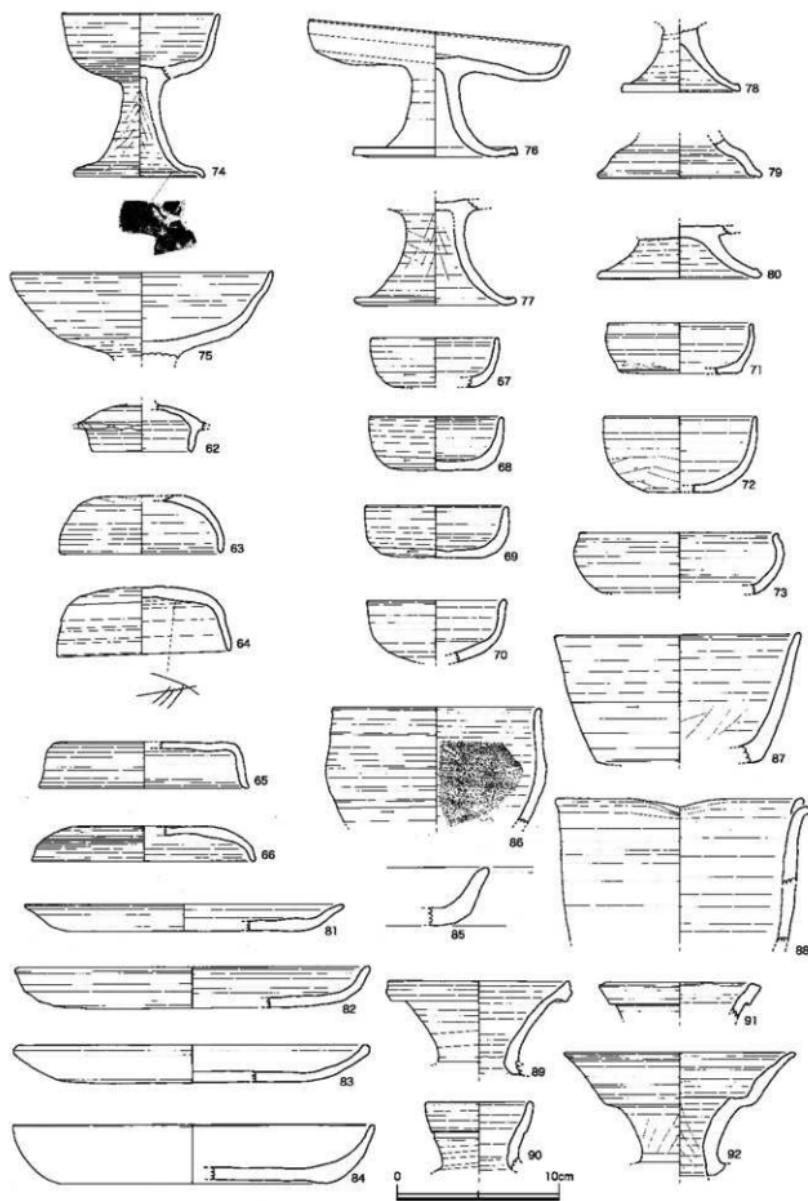


Fig.48 包含層 SX100 北部 (G ~ I 区) 出土遺物 3 (1/3)

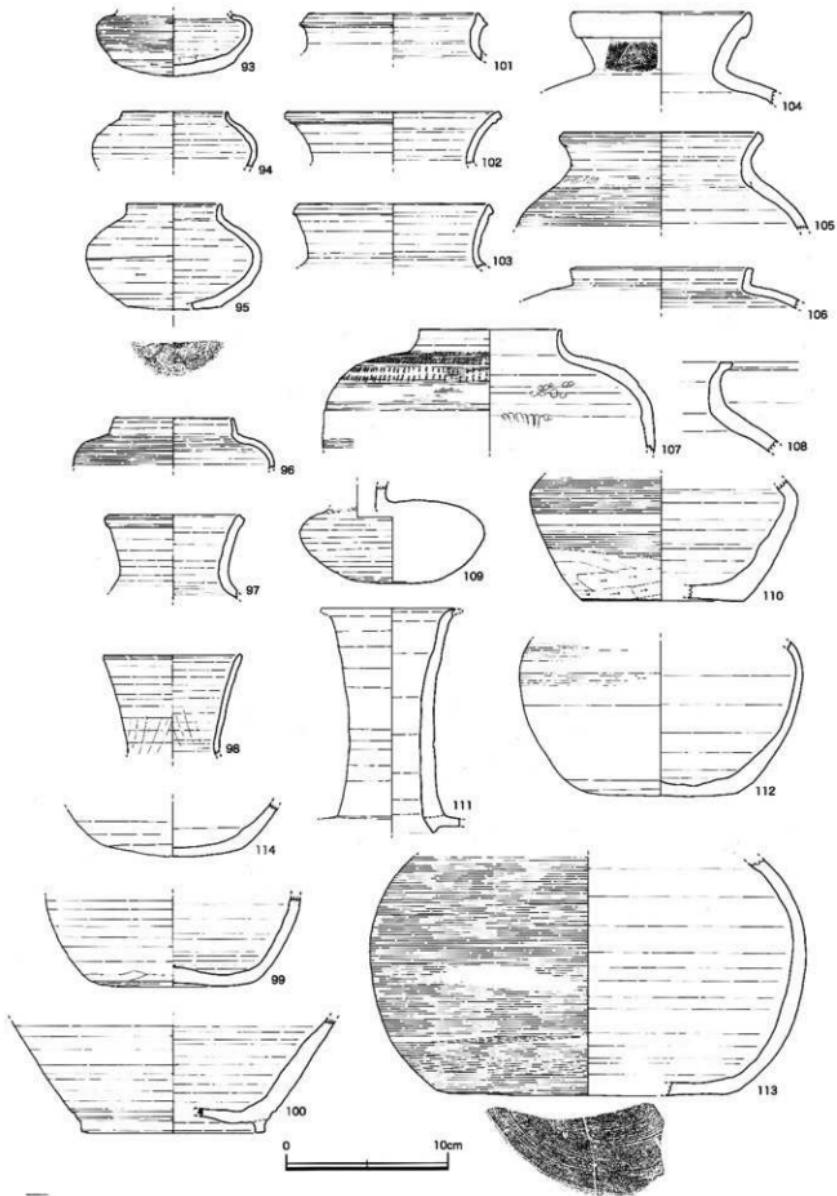
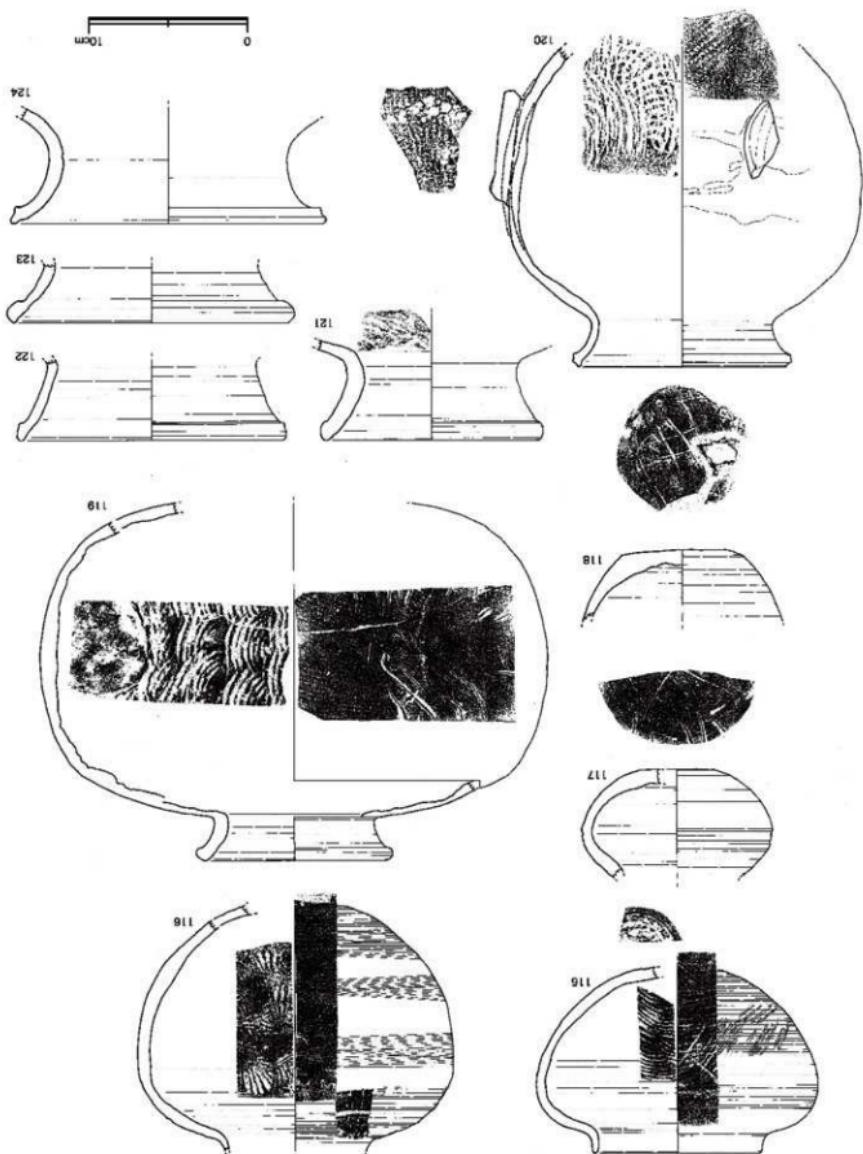


Fig.49 包含層 SX100 北部 (G ~ I 区) 出土遺物 4 (1/3)

FIG.50 包含层 SX100 北部 (G~I区) 出土遗物 5 (1/3)



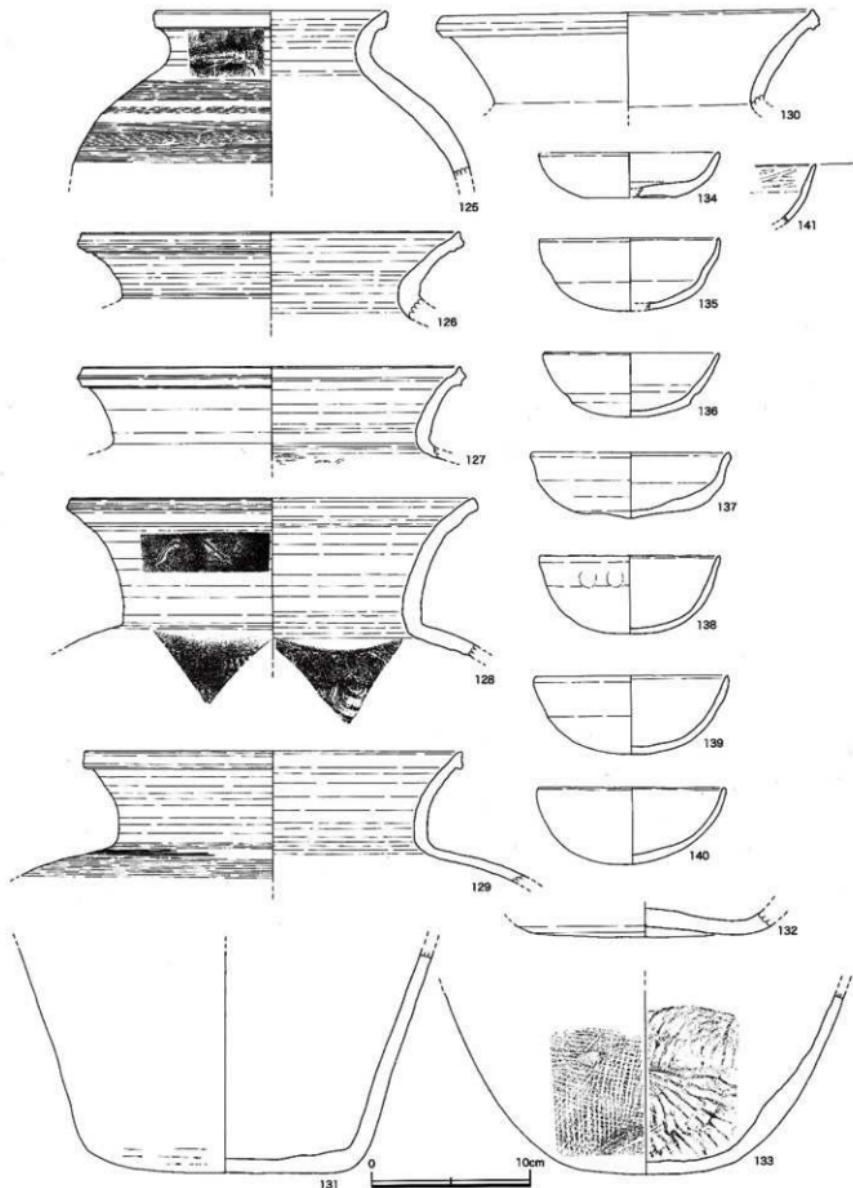


Fig.51 包含層 SX100 北部 (G~I 区) 出土遺物 6 (1/3)

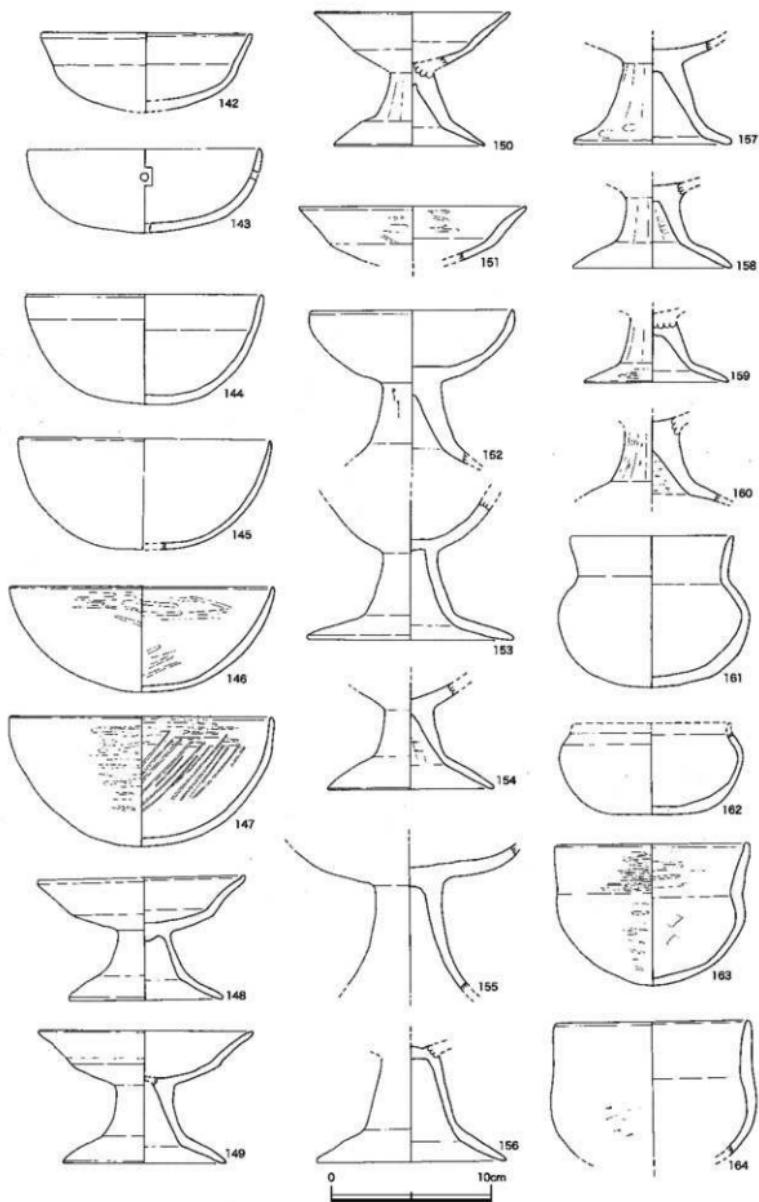


Fig.52 包含層 SX100 北部 (G ~ I区) 出土遺物 7 (1/3)

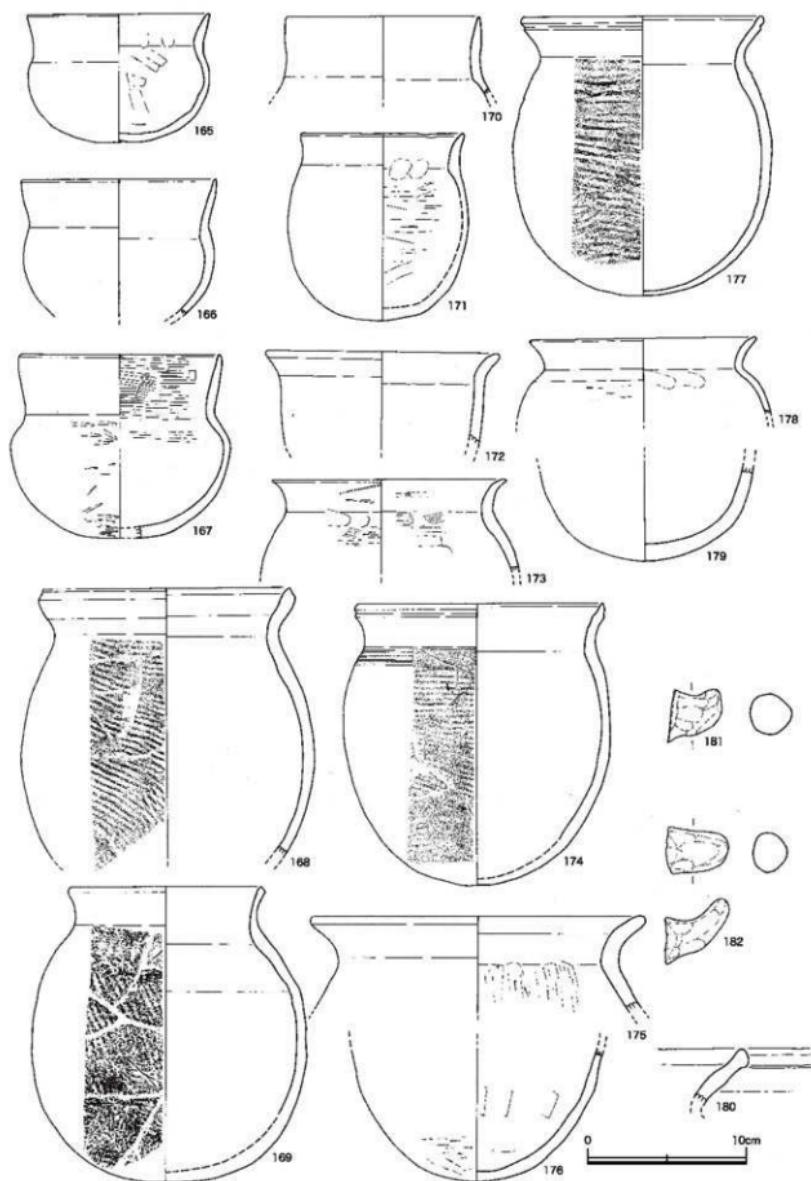


Fig.53 包含層 SX100 北部 (G ~ I 区) 出土遺物 8 (1/3)



Fig.54 包含層 SX100 北部 (G ~ I 区) 出土遺物 9 (1/3)

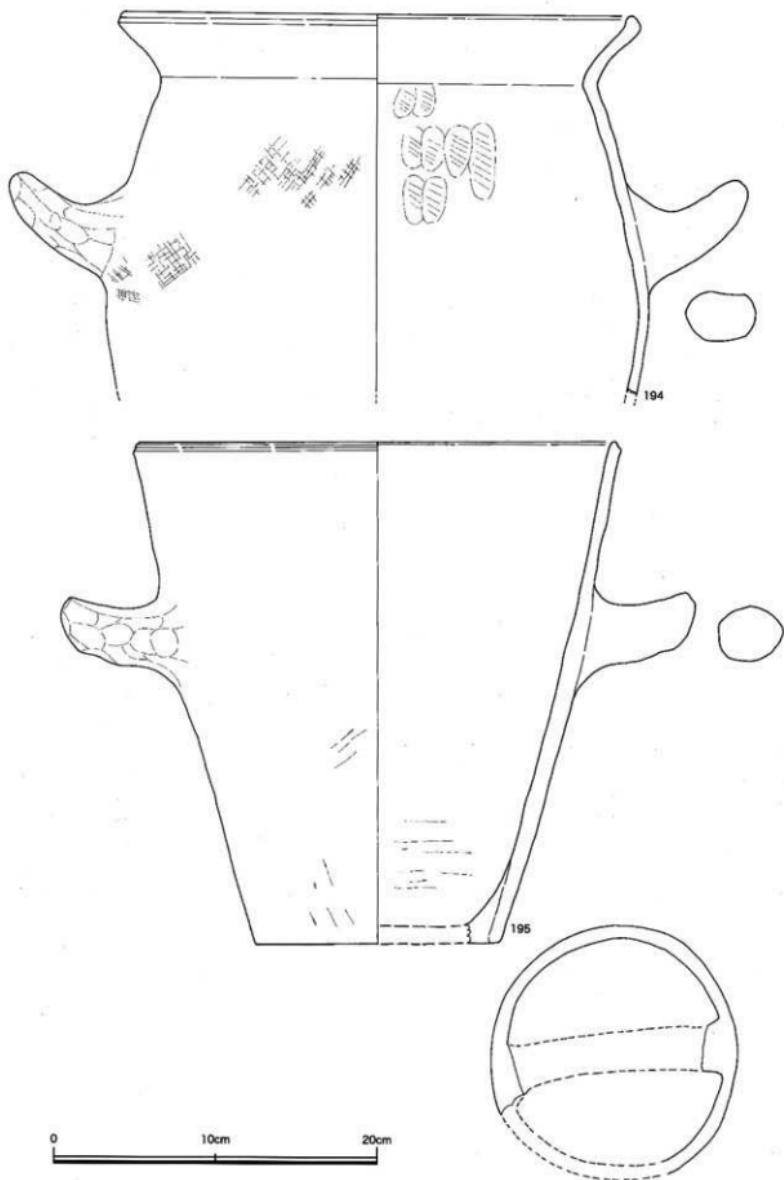


Fig.55 包含層 SX100 北部 (G~I区) 出土遺物 10 (1/3)

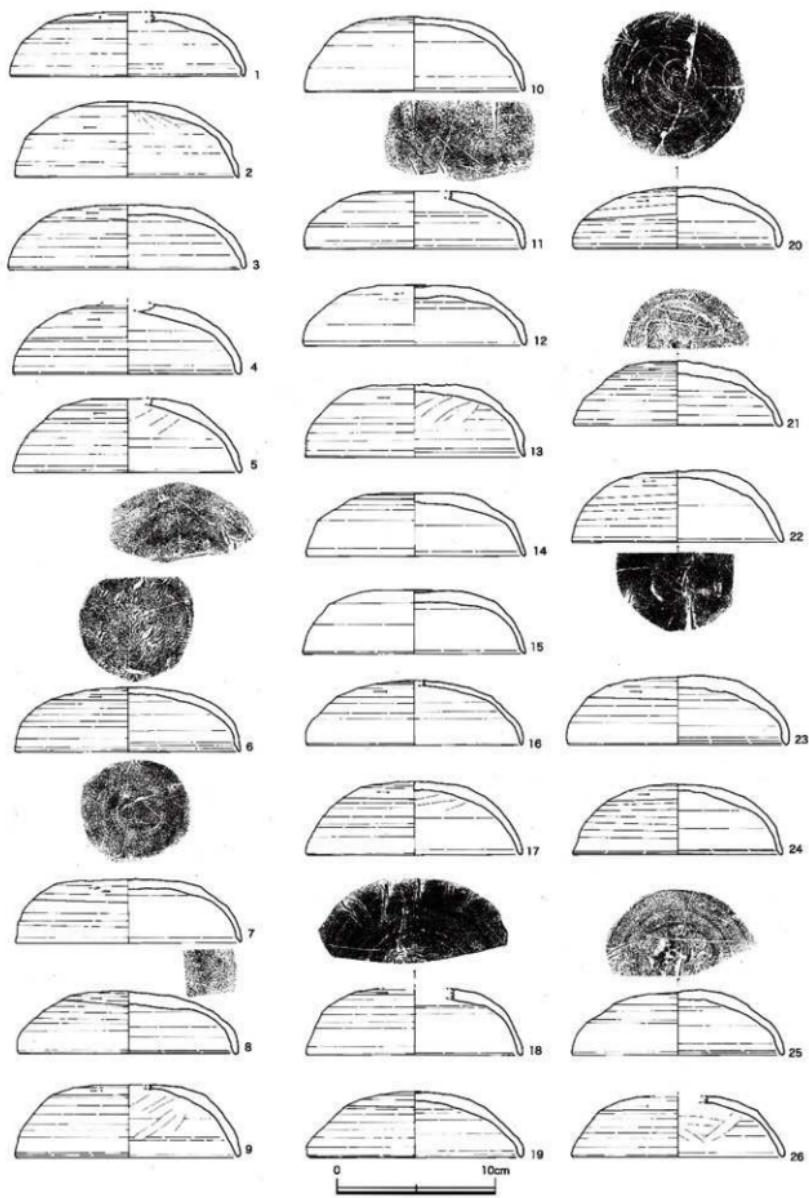


Fig.56 包含層 SX100 中部 (D~F 区) 出土遺物 1 (1/3)

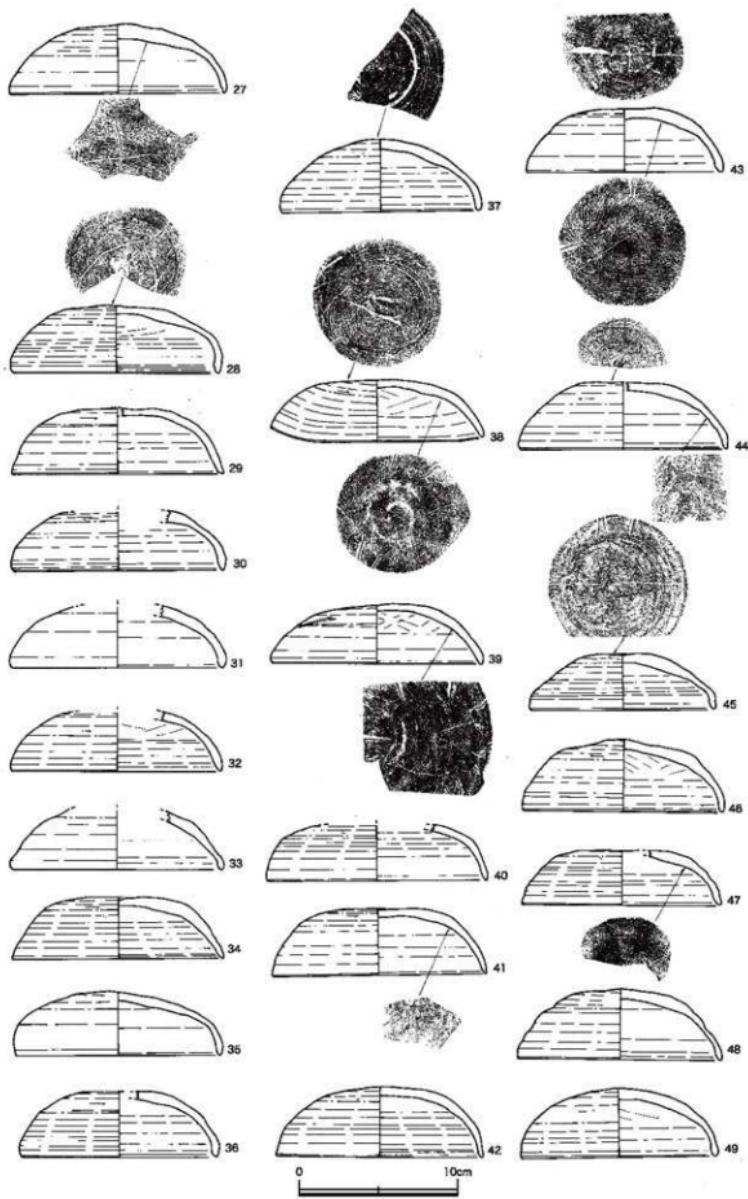


Fig.57 包含層 SX100 中部 (D~F 区) 出土遺物 2 (1/3)

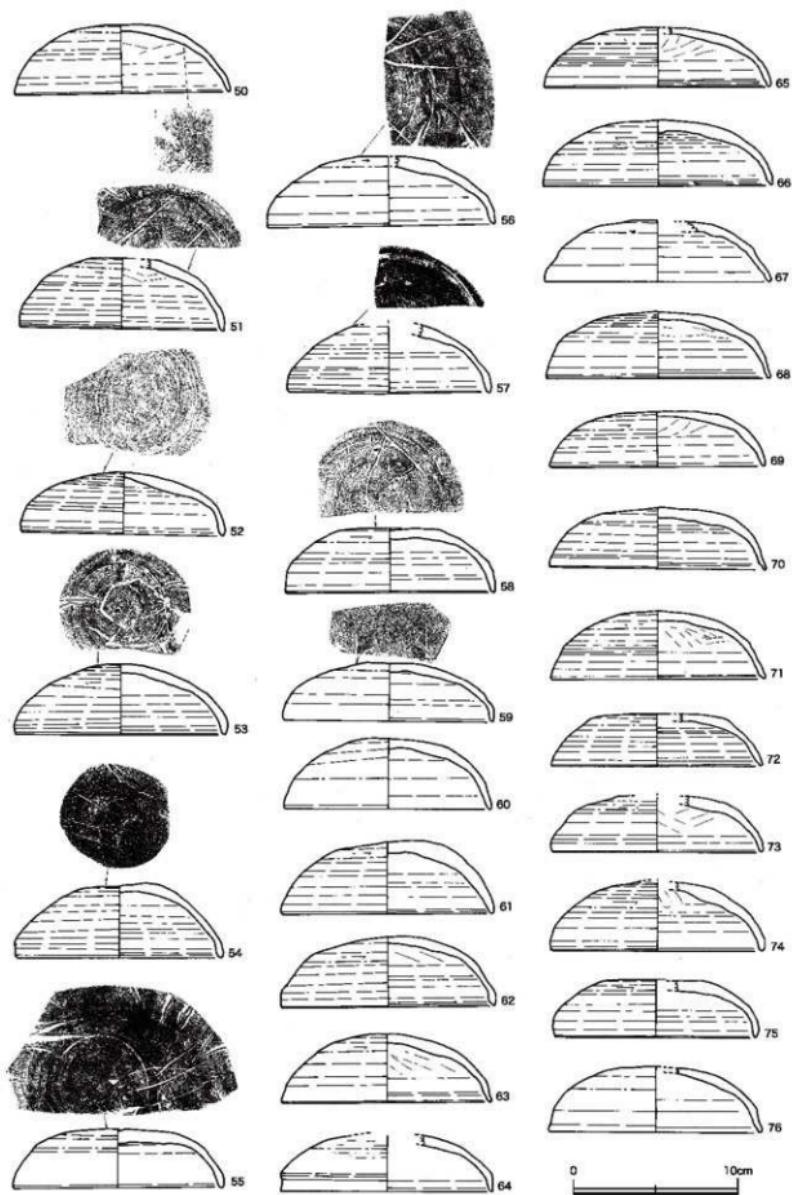


Fig.58 包含層 SX100 中部 (D~F 区) 出土遺物 3 (1/3)

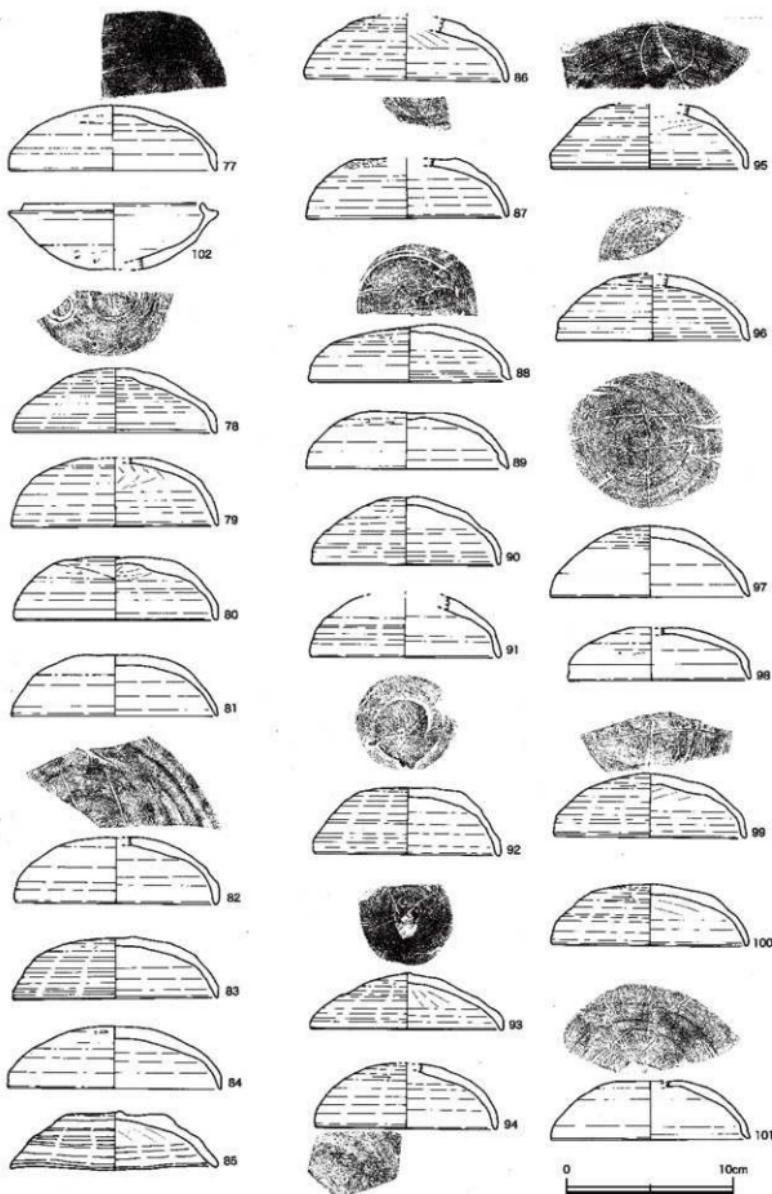


Fig.59 包含層 SX100 中部 (D ~ F 区) 出土遺物 4 (1/3)

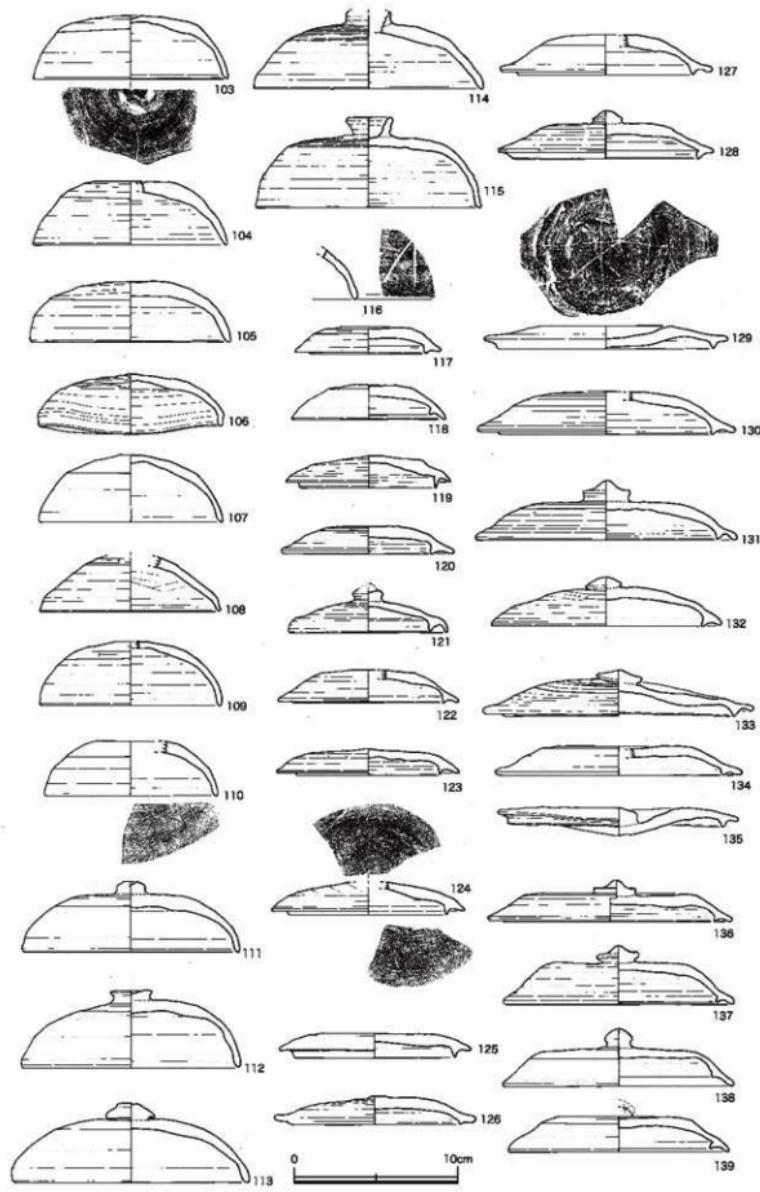


Fig.60 包含層 SX100 中部 (D~F 区) 出土遺物 5 (1/3)

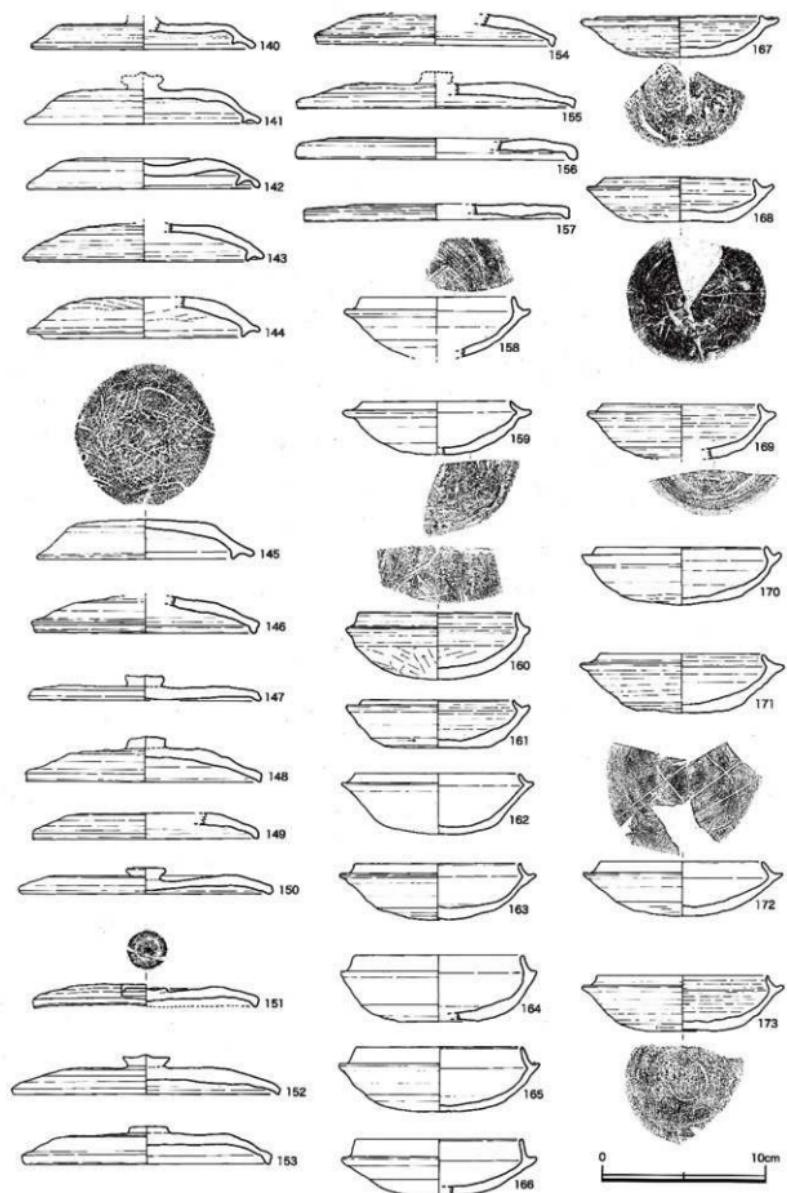


Fig.61 包含層 SX100 中部 (D ~ F 区) 出土遺物 6 (1/3)

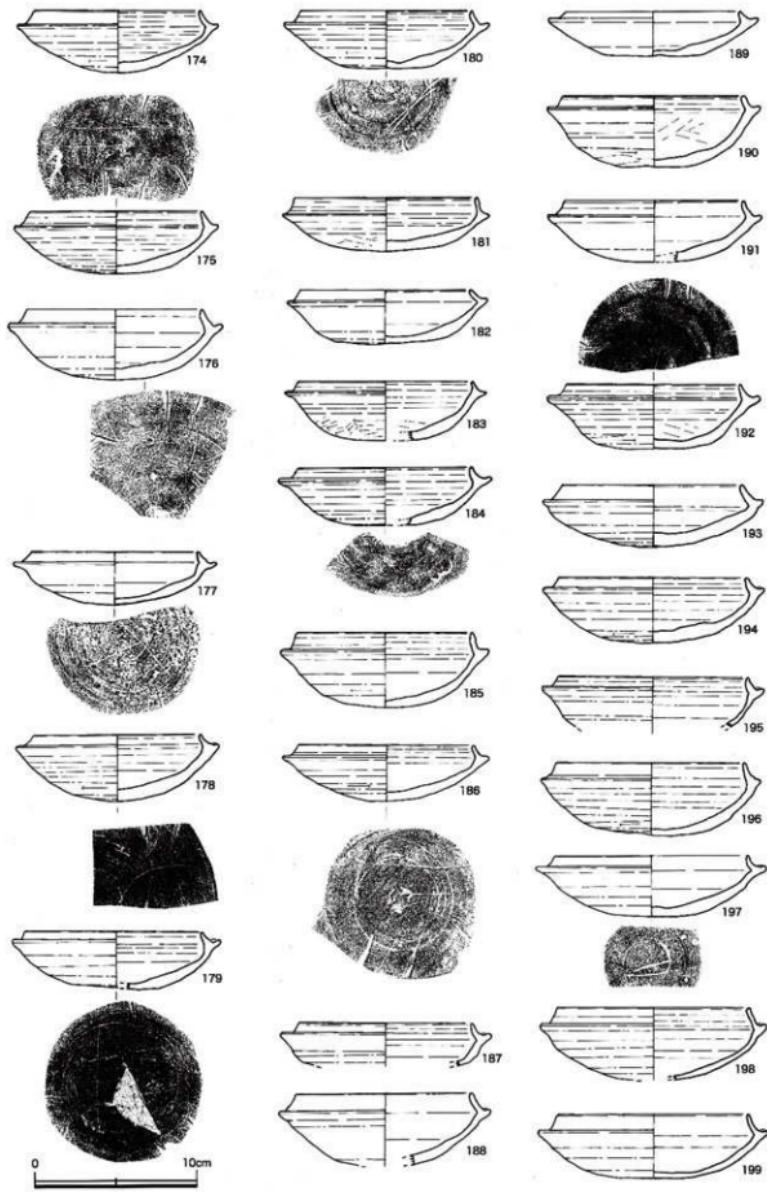


Fig.62 包含層 SX100 中部 (D~F 区) 出土遺物 7 (1/3)

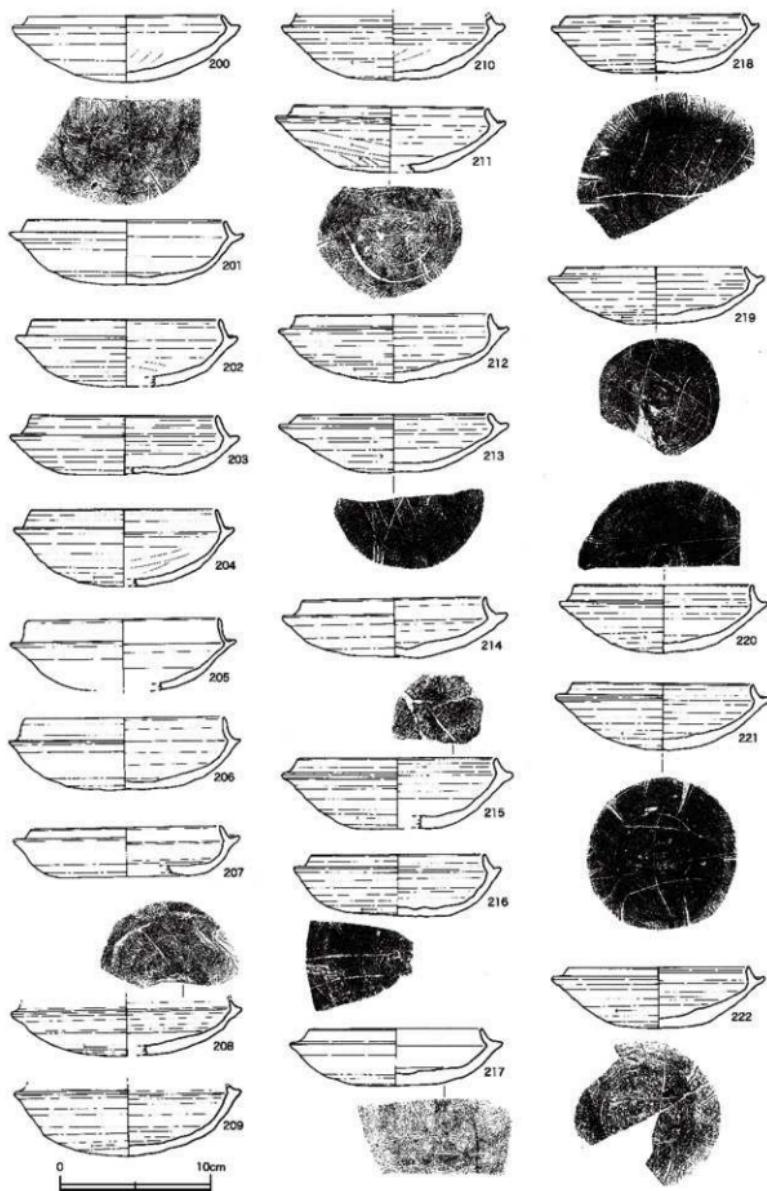


Fig.63 包含層 SX100 中部 (D ~ F 区) 出土遺物 8 (1/3)

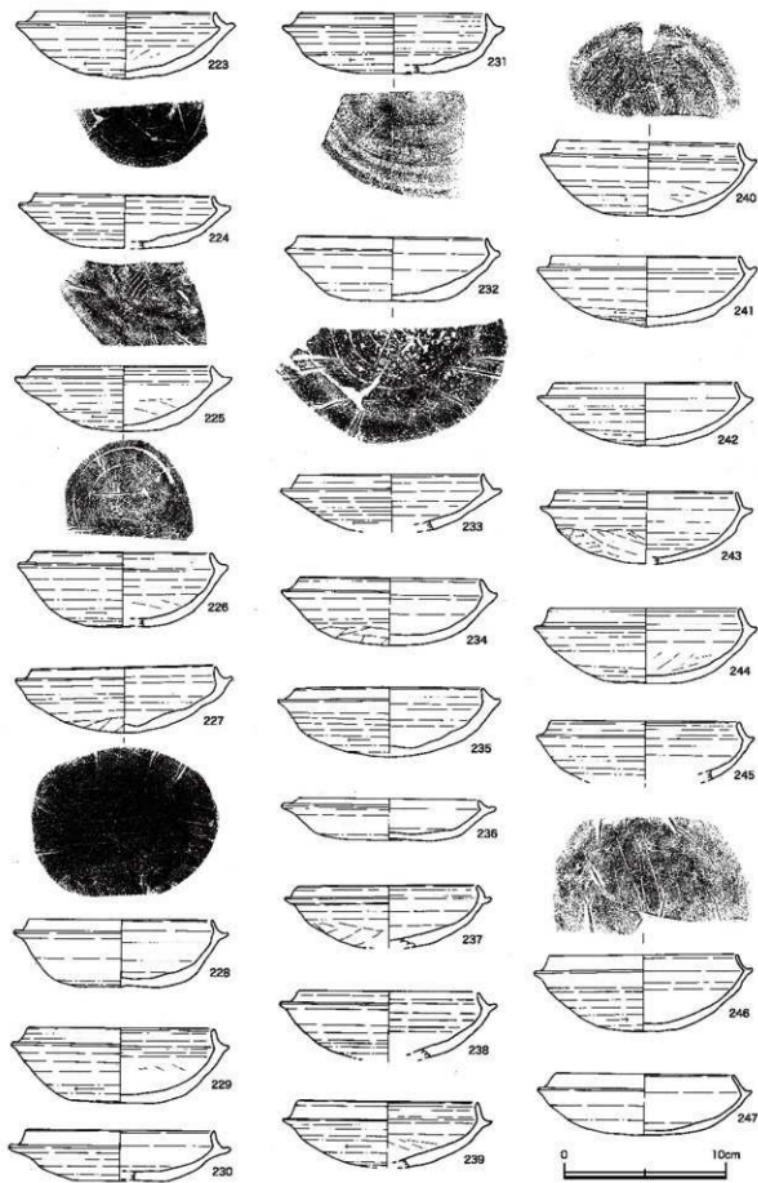


Fig.64 包含層 SX100 中部 (D ~ F 区) 出土遺物 9 (1/3)

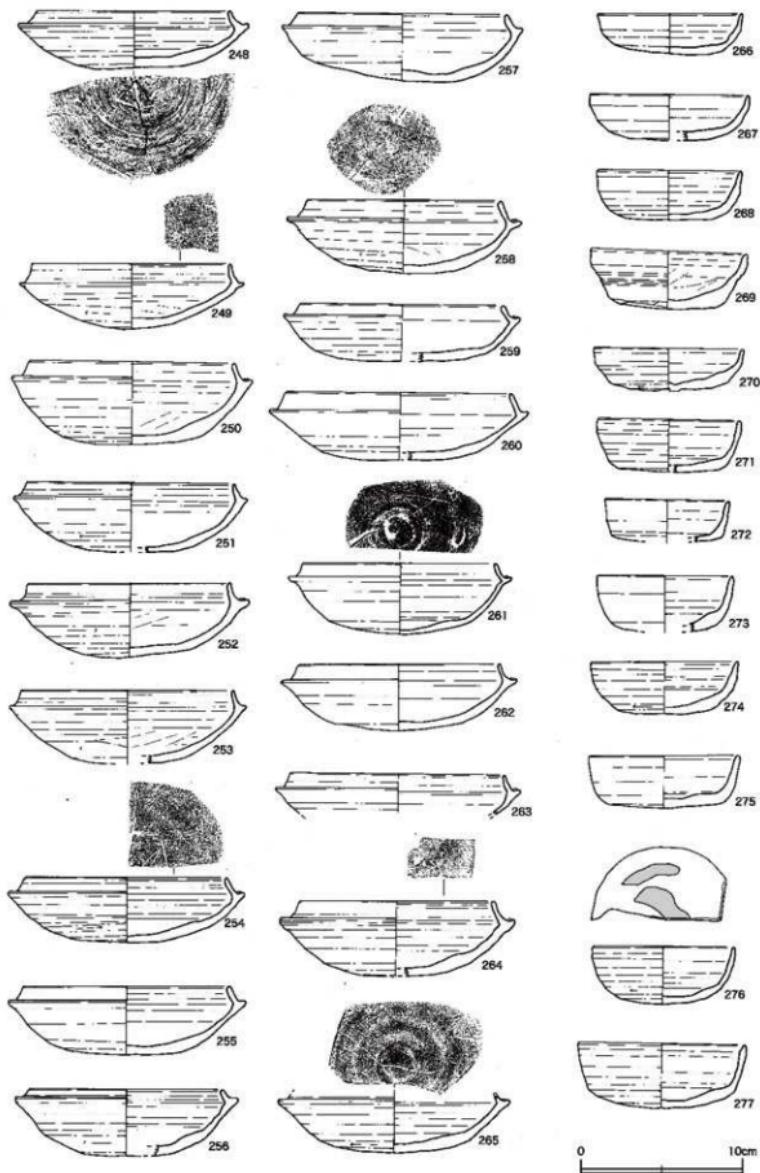


Fig.65 包含層 SX100 中部 (D ~ F 区) 出土遺物 10 (1/3)

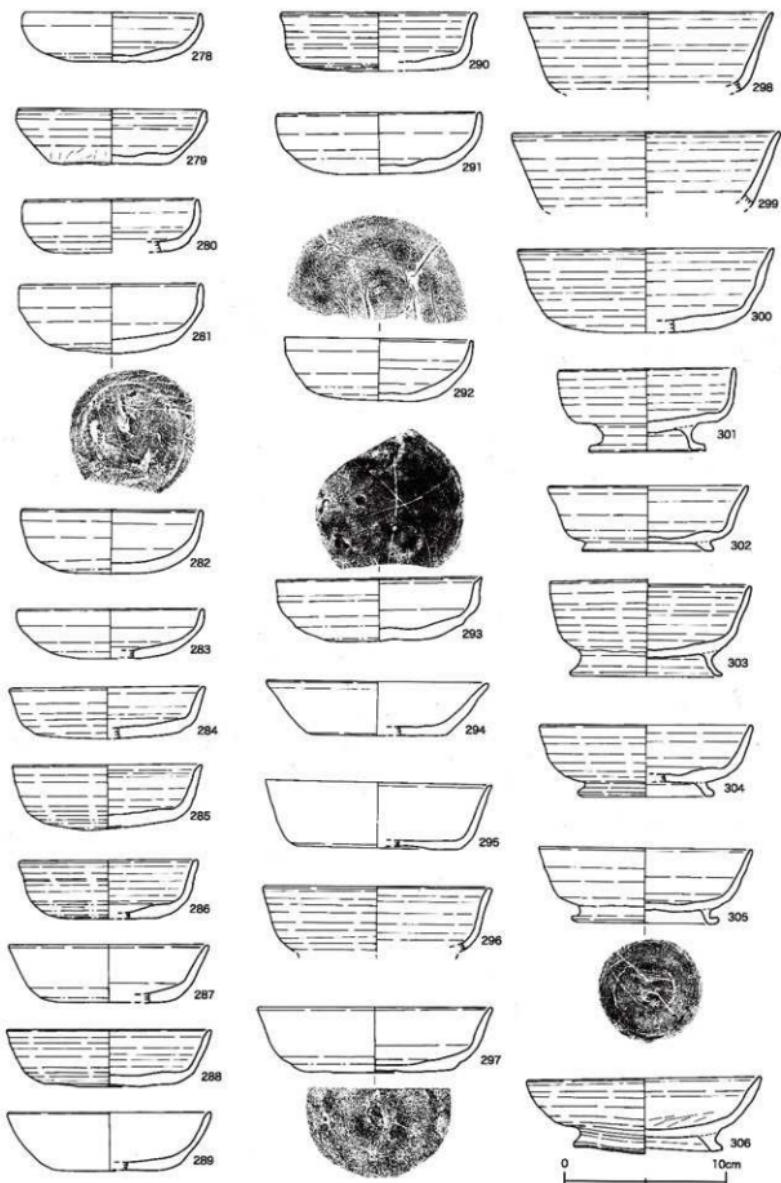


Fig.66 包含層 SX100 中部 (D ~ F 区) 出土遺物 11 (1/3)

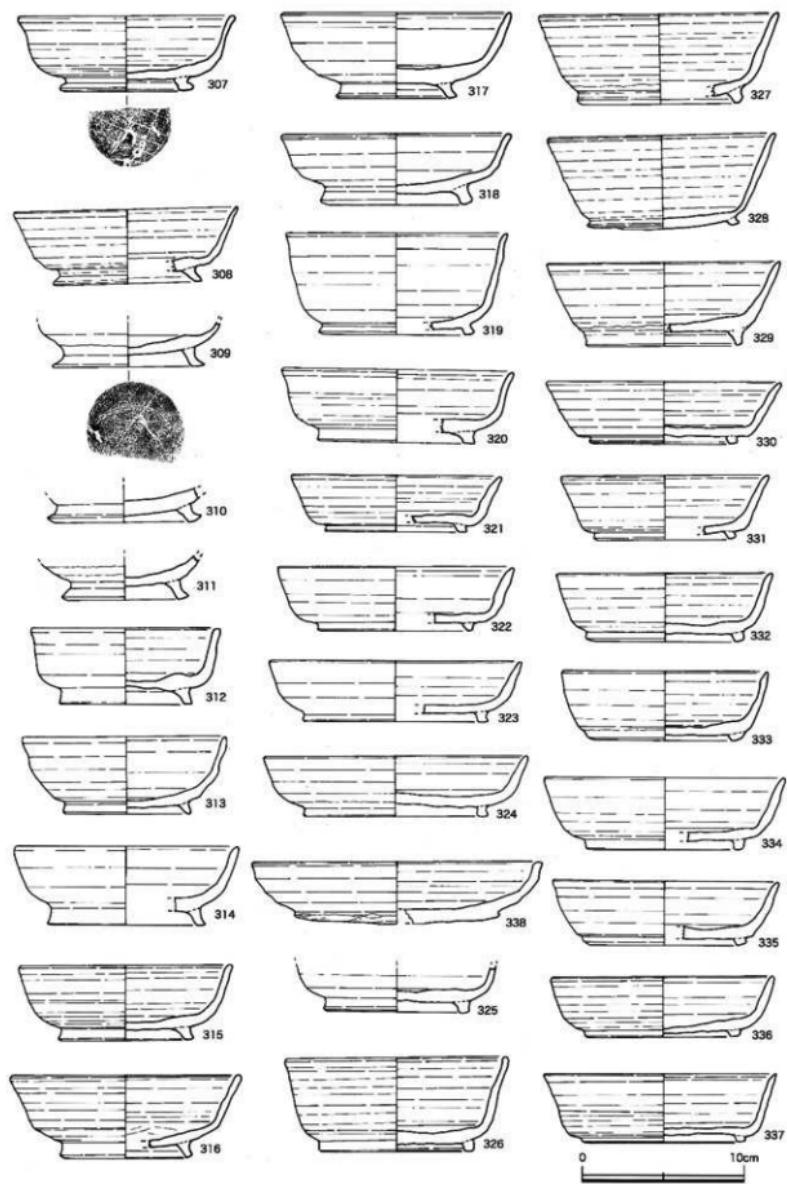


Fig.67 包含層 SX100 中部 (D ~ F 区) 出土遺物 12 (1/3)

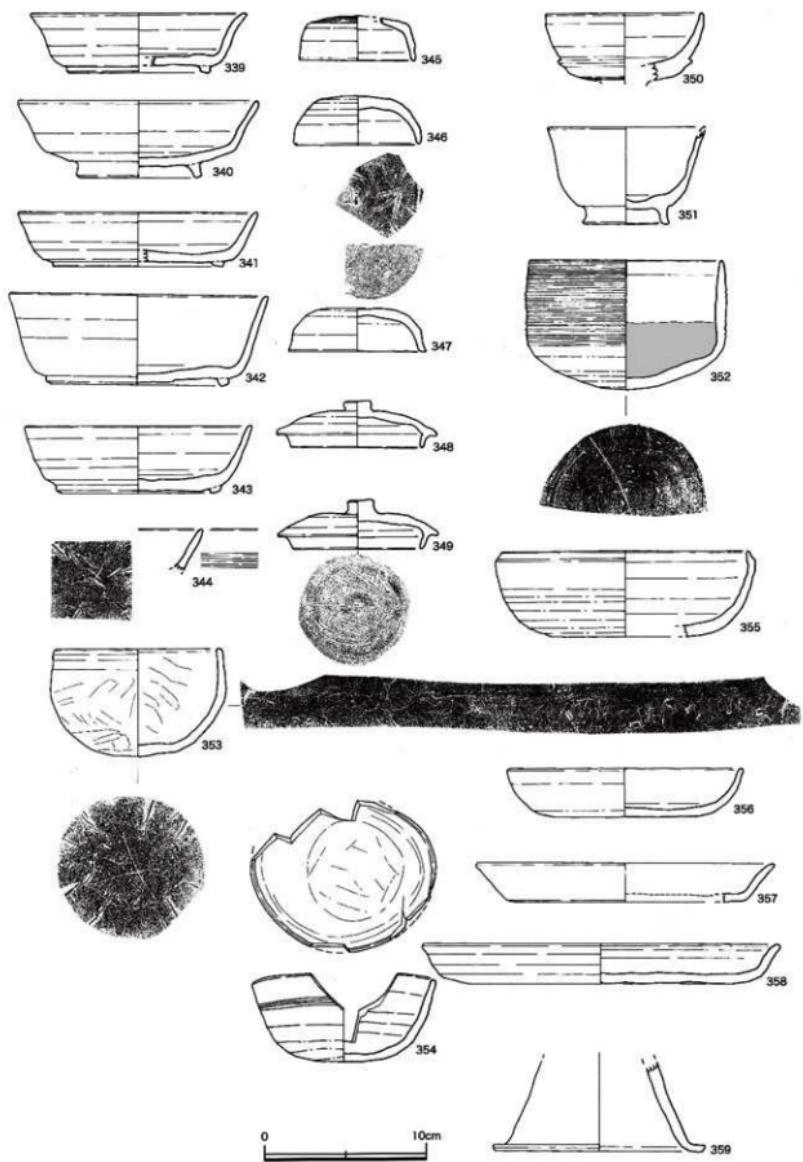


Fig.68 包含層 SX100 中部 (D ~ F 区) 出土遺物 13 (1/3)

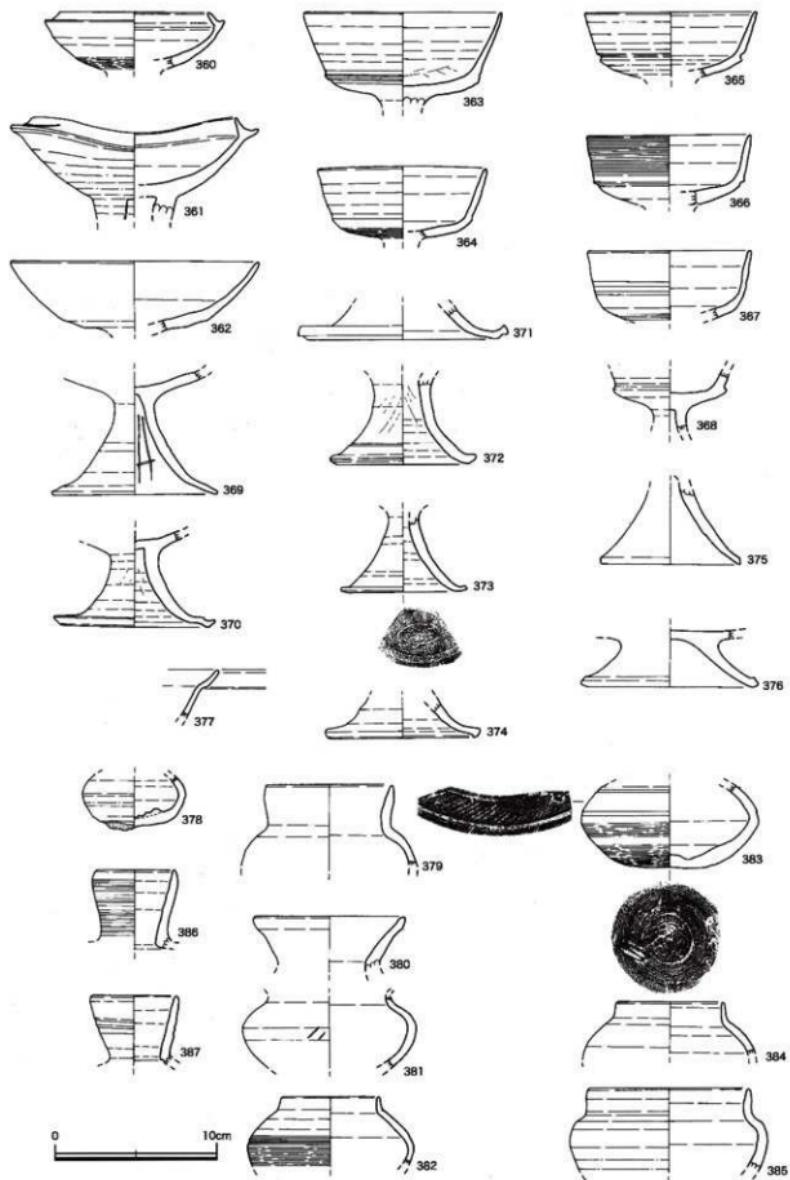


Fig.69 包含層 SX100 中部 (D ~ F 区) 出土遺物 14 (1/3)

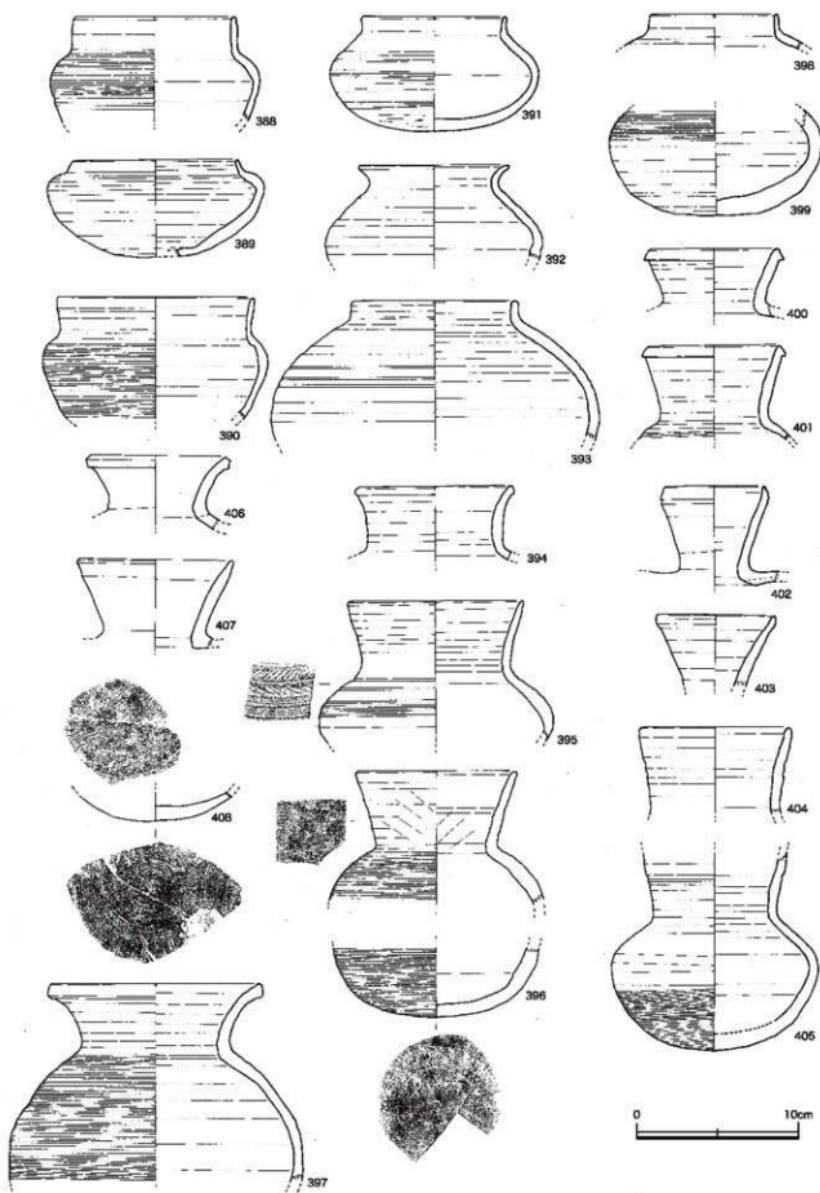


Fig.70 包含層 SX100 中部 (D ~ F 区) 出土遺物 15 (1/3)

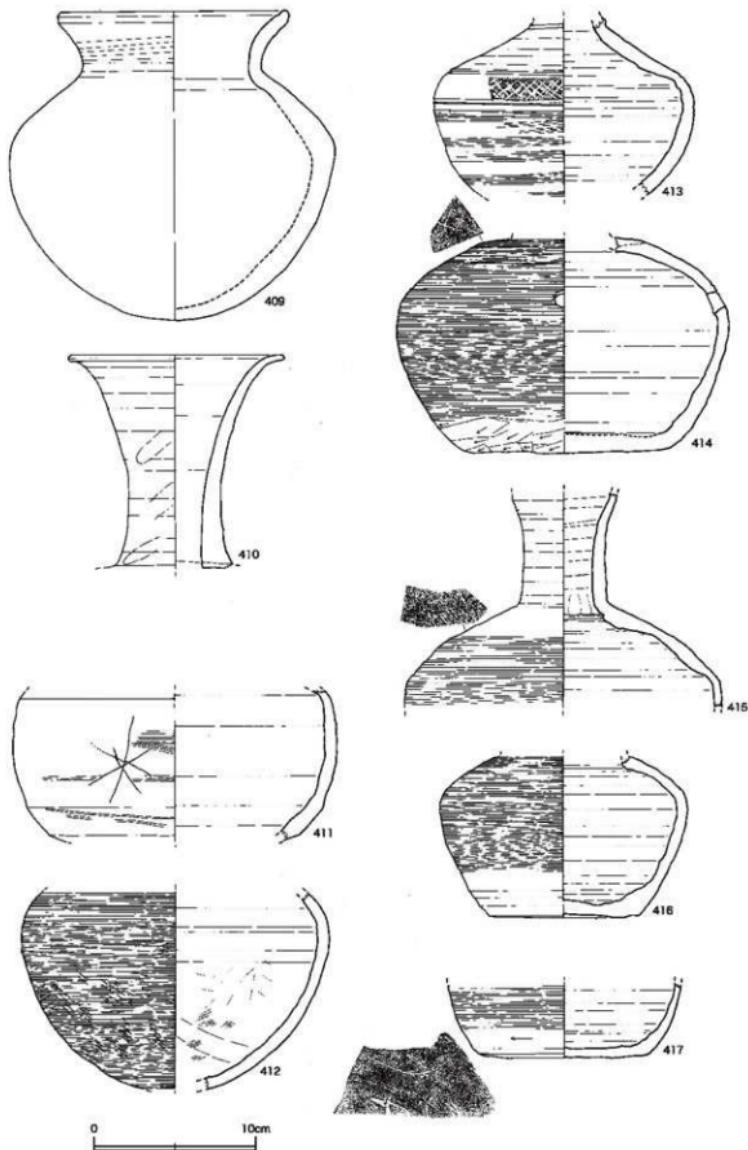


Fig.71 包含層 SX100 中部 (D ~ F 区) 出土遺物 16 (1/3)

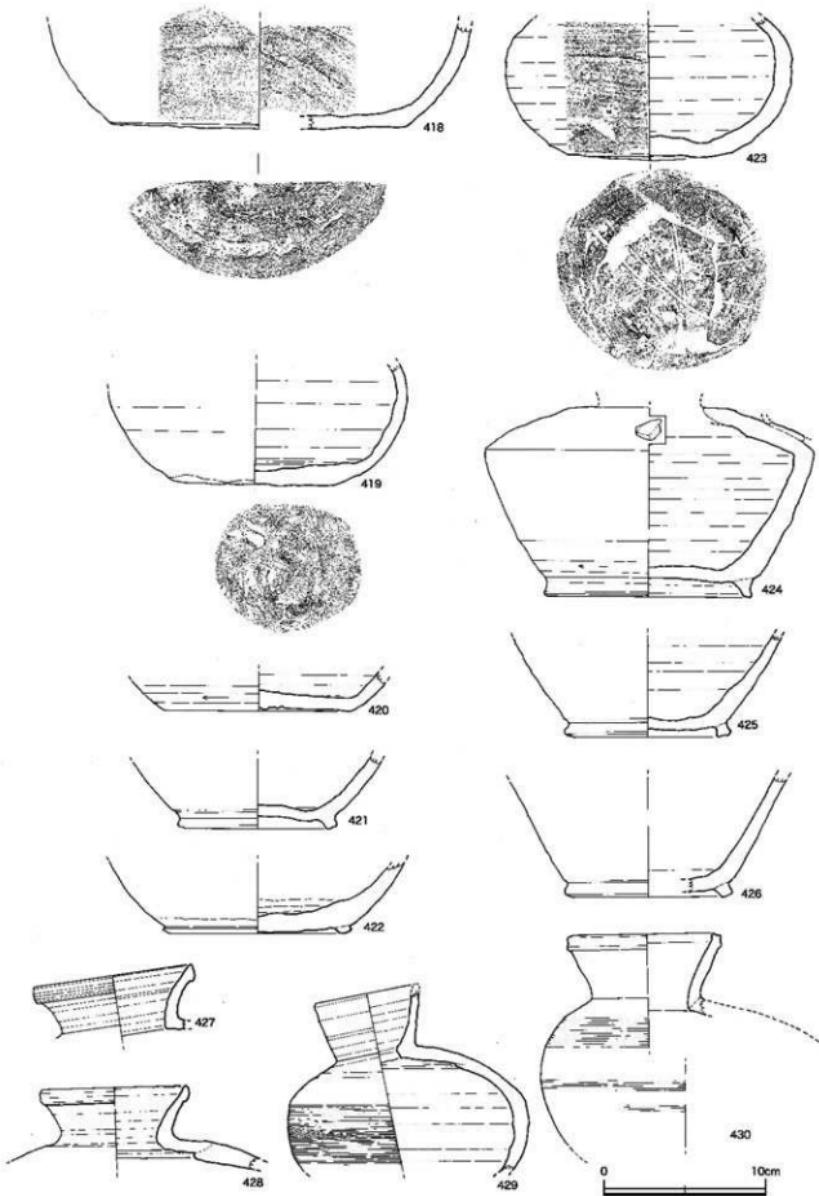


Fig.72 包含層 SX100 中部 (D ~ F 区) 出土遺物 17 (1/3)

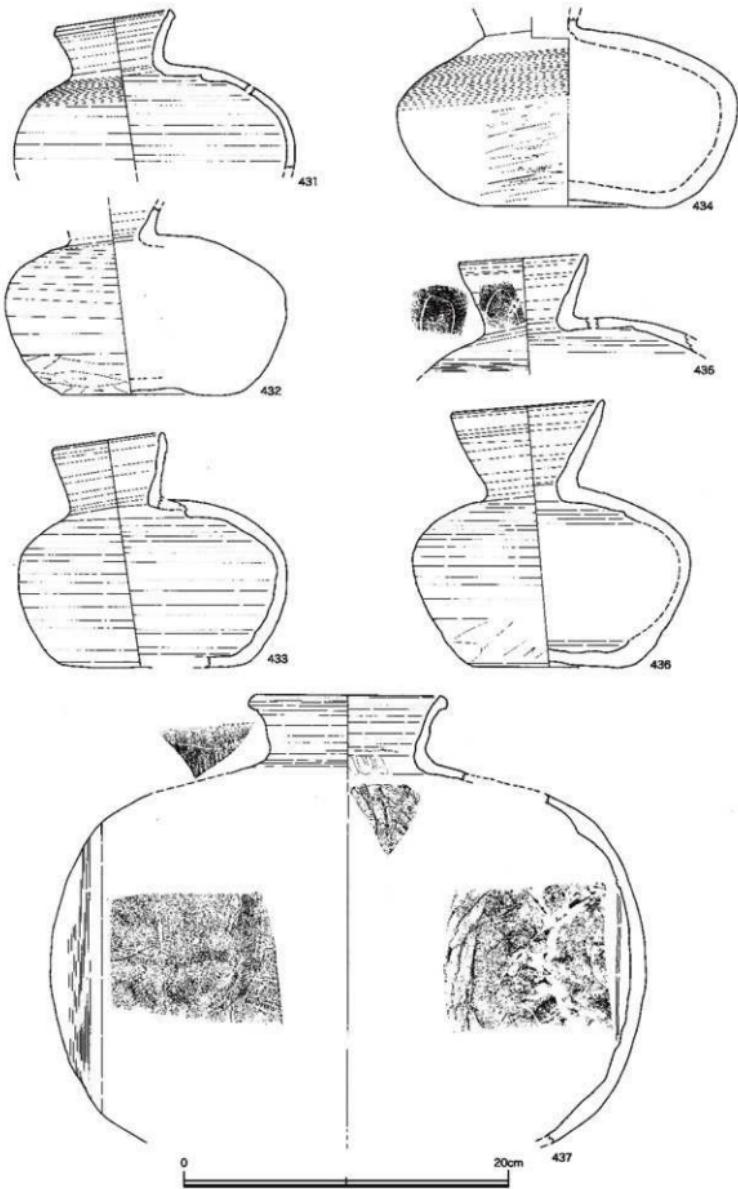


Fig.73 包含層 SX100 中部 (D ~ F 区) 出土遺物 18 (1/3)

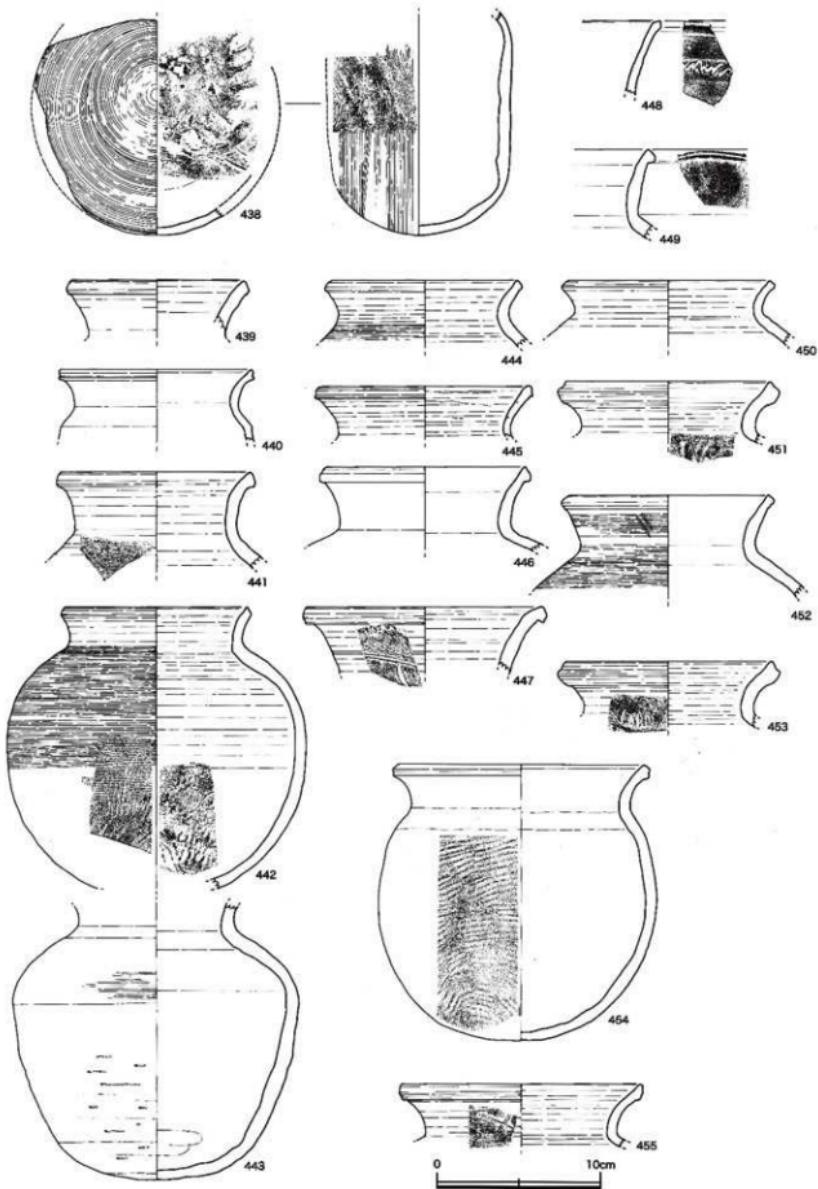


Fig.74 包含層 SX100 中部 (D ~ F 区) 出土遺物 19 (1/3)

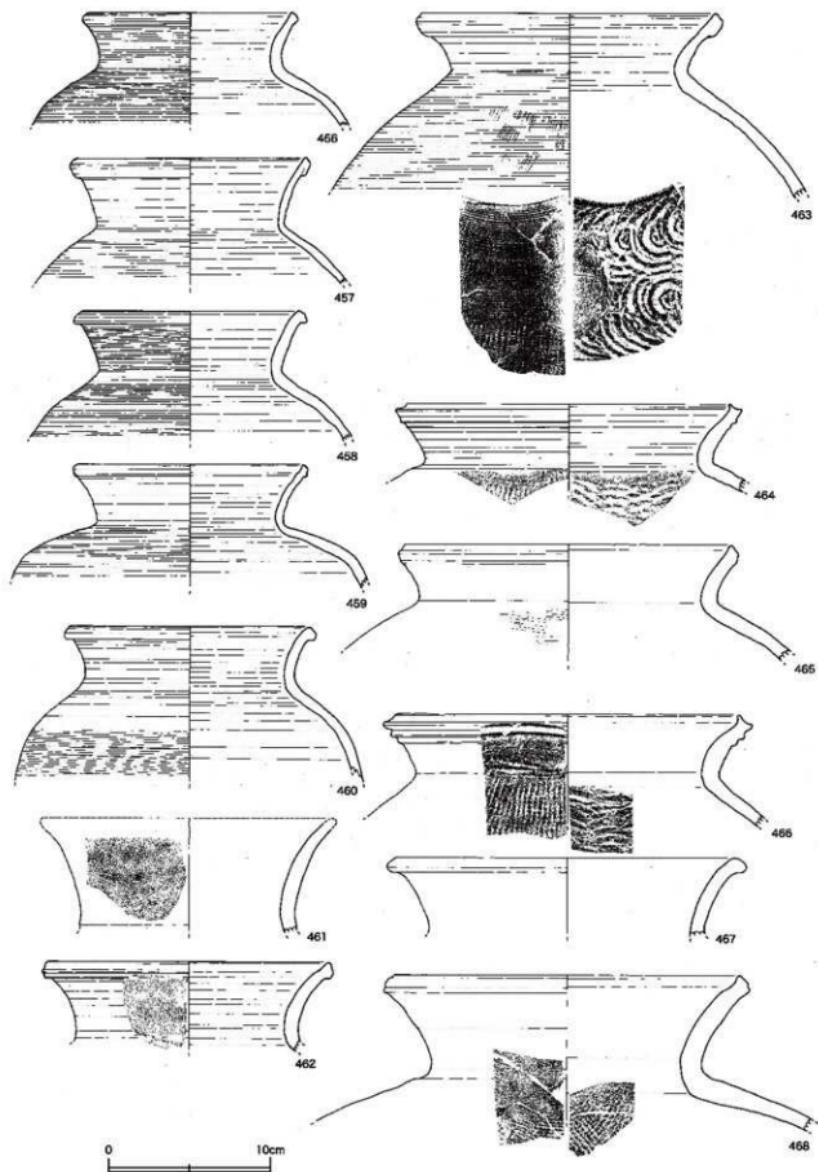


Fig.75 包含层 SX100 中部 (D ~ F 区) 出土遗物 20 (1/3)

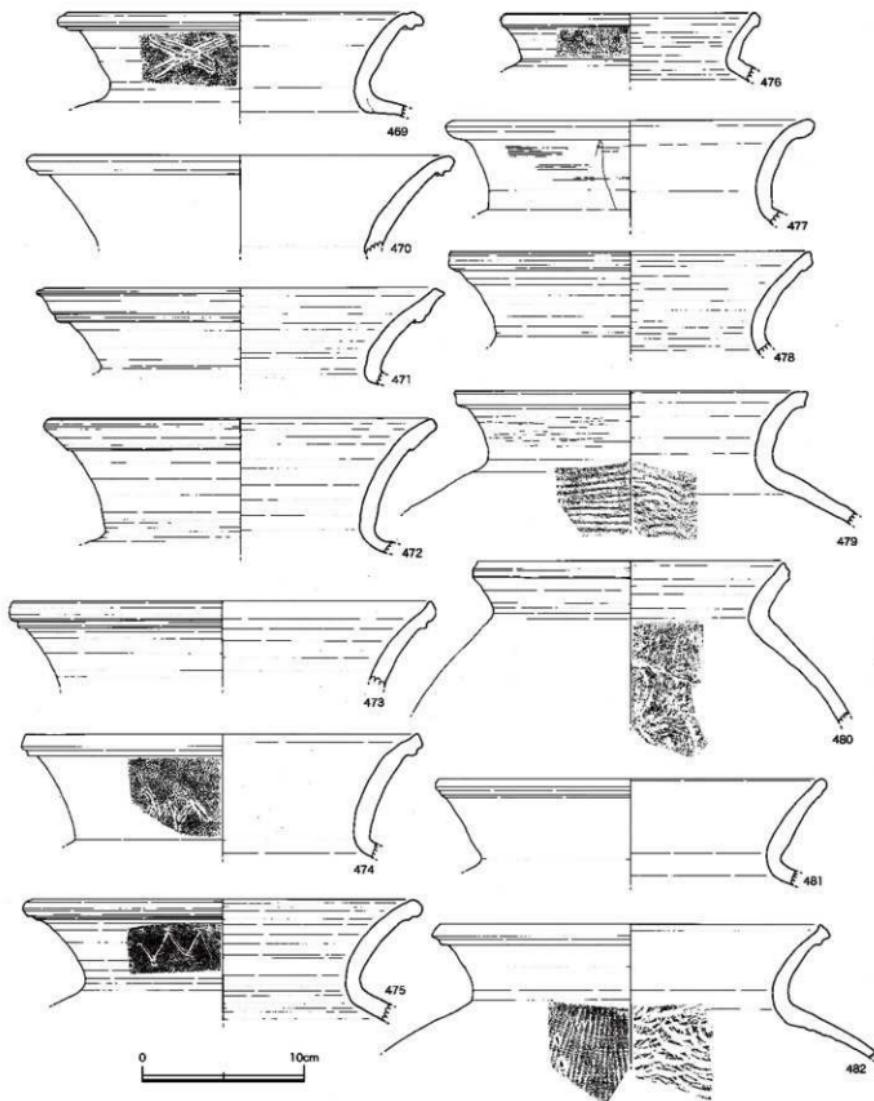


Fig.76 包含層 SX100 中部 (D ~ F 区) 出土遺物 21 (1/3)

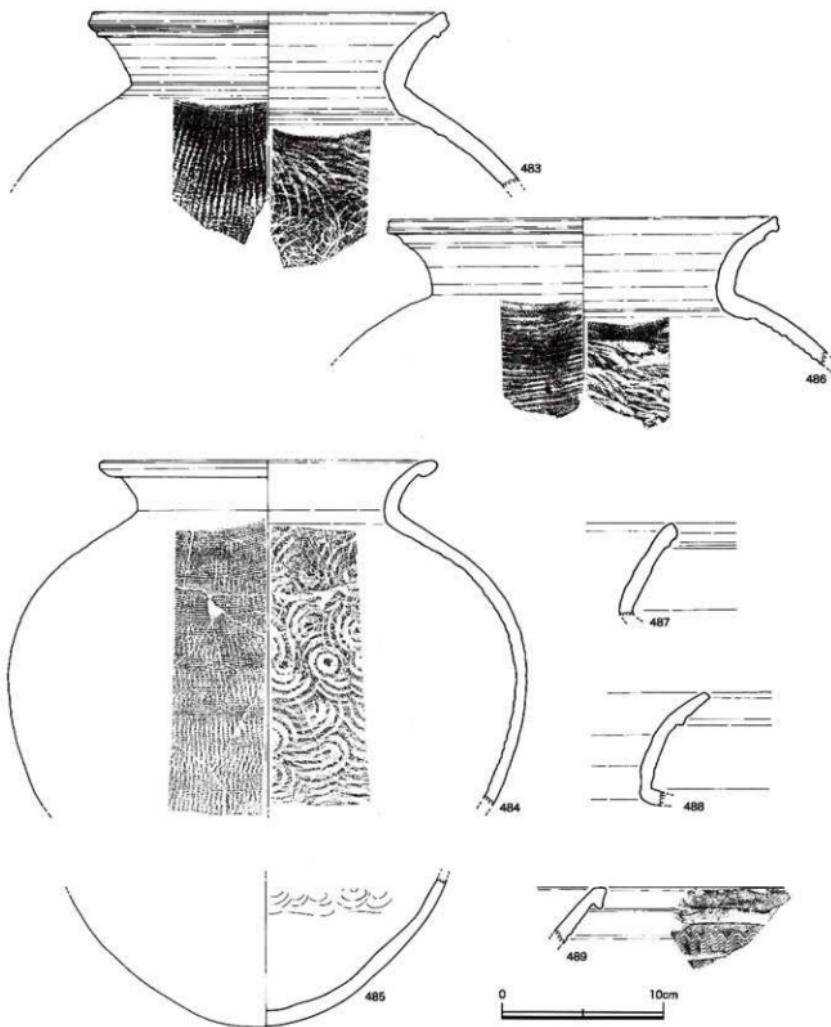


Fig.77 包含層 SX100 中部 (D ~ F 区) 出土遺物 22 (1/3)

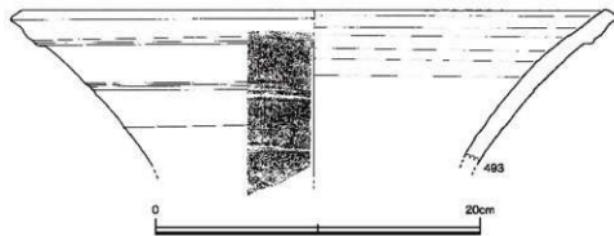
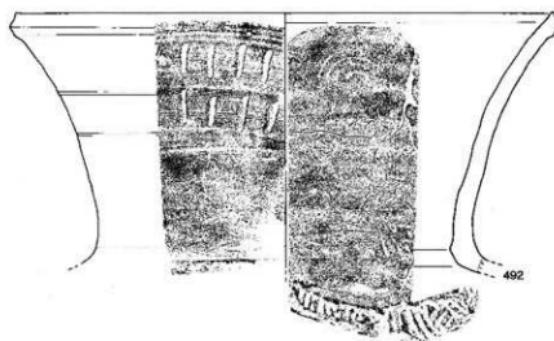
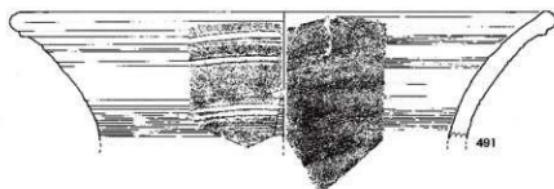
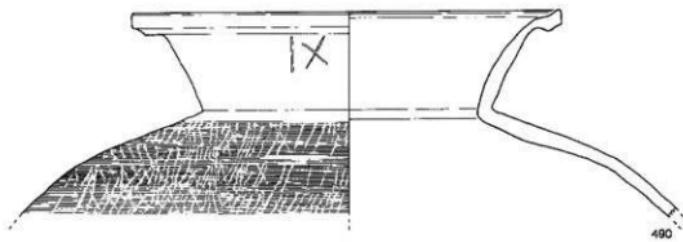


Fig.78 包含層 SX100 中部 (D ~ F 区) 出土遺物 23 (1/3)

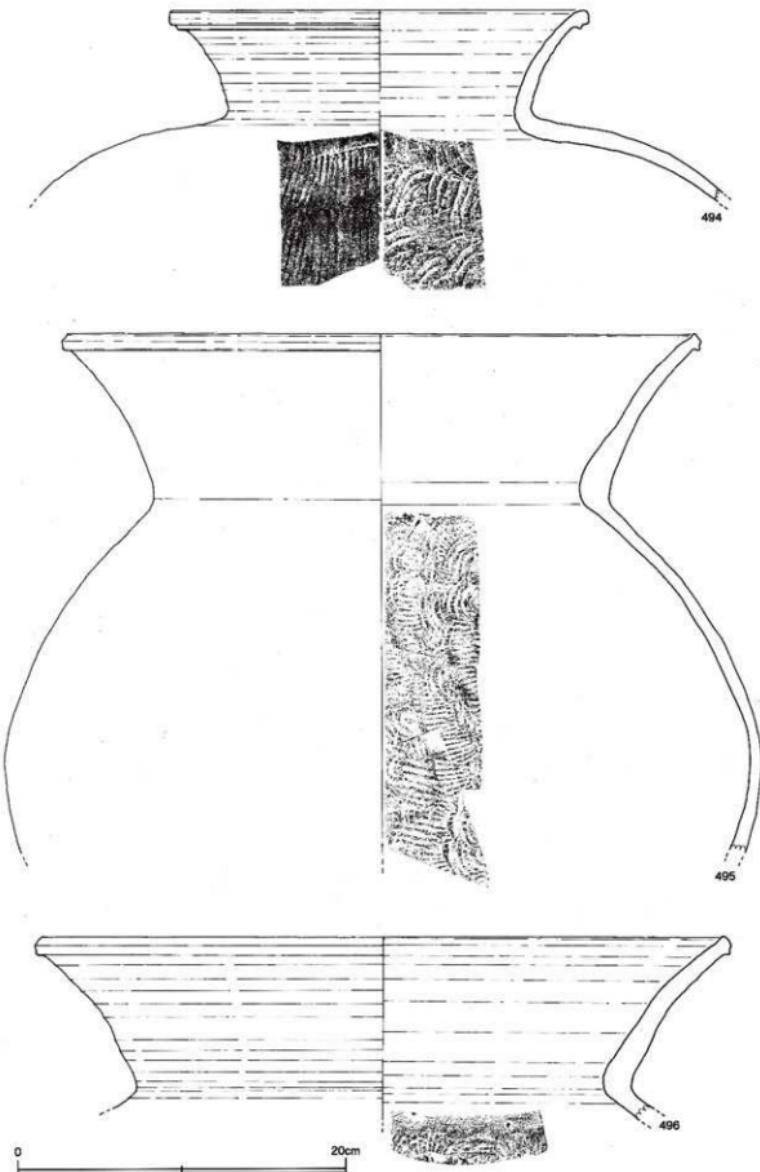


Fig.79 包含層 SX100 中部 (D ~ F 区) 出土遺物 24 (1/3)

SX404 中部からは 120 点の須恵器、土師器類が出土した (Fig.36 ~ 43)。須恵器には、壺蓋 (1 ~ 18)、の壺身 (19 ~ 41)、の椀 (42 ~ 43)、皿 (44 ~ 45)、高壺 (46 ~ 47)、壺類 (48 ~ 52・54 ~ 56)、平瓶 (53)、鉢 (55)、甕類 (57 ~ 64) がある。壺身 (40) の底外面には墨書があるが、破片のため判読できない。時期は 8 世紀前半代のもので、近接し、重複する SX387 出土の「廣刀自」銘墨書須恵器 (1102 集にて報告済み) とも関連が考えられる。土師器には、壺身 (65 ~ 67)、椀 (68 ~ 86)、高壺 (89 ~ 95)、壺 (87 ~ 88)、甕 (96 ~ 114・116)、櫃 (115 ~ 117 ~ 120) がある。

SX404 南部からは 55 点の須恵器、土師器類が出土した (Fig.43 ~ 45)。須恵器には、壺蓋 (1 ~ 7)、壺身 (8 ~ 11)、椀 (13 ~ 14)、皿 (15)、平瓶 (16)、瓶 (17)、壺 (18)、甕類 (19 ~ 23) がある。土師器には、椀 (24)、鉢 (25 ~ 27)、高壺 (28 ~ 31)、壺 (32 ~ 34)、甕 (35 ~ 53)、櫃 (54 ~ 55) がある。

SX100 北部からは 195 点の須恵器、土師器類が出土した (Fig.46 ~ 55)。須恵器には、壺蓋 (1 ~ 30・63・64・66)、壺身 (31 ~ 61)、壺蓋 (62 ~ 65)、椀 (67 ~ 73)、高壺 (74 ~ 80)、皿 (81 ~ 85)、壺 (89 ~ 100・107・110 ~ 113・115 ~ 118)、平瓶 (109)、横瓶 (119)、甕 (101 ~ 106・108・120 ~ 133) がある。土師器には、椀 (134 ~ 141)、鉢 (142 ~ 147)、高壺 (148 ~ 160)、壺 (161 ~ 167)、甕 (114・168 ~ 180・184 ~ 191)、櫃 (181 ~ 183・192 ~ 195) がある。

SX100 中部からは 620 点の須恵器、土師器類が出土した (Fig.56 ~ 79)。須恵器には、壺蓋 (1 ~ 157)、壺身 (158 ~ 265・301 ~ 344・351)、椀 (266 ~ 300・352 ~ 354)、高壺 (350 ~ 359 ~ 376)、鉢 (355)、皿 (356 ~ 358)、壺 (377 ~ 385・388 ~ 399・404・405・408 ~ 426)、瓶類 (386・387・400 ~ 403・406・407)、平瓶 (427 ~ 436)、横瓶 (437)、提瓶 (438)、甕類 (439 ~ 496) がある。なお須恵器椀 276、352 の底部内面には褐色の流動成分が水平に固着した痕跡があり、漆容器であった可能性がある。その時期は 6 世紀後半から 7 世紀初めの間とみられる。

また、SX100 中部の土師器と、同南部出土資料は、紙数の都合で本報告書に掲載できなかったので、次回報告するが、その概要を示しておきたい。

SX100 中部出土の土師器には、壺蓋 (3 点)、壺身 (4 点)、椀 (19 点)、鉢 (3 点)、皿 (3 点)、高壺 (25 点)、壺 (7 点)、甕 (80 点)、櫃 (14 点) があり、生産関連の特殊土器として、蜻蛉 (1 点)、製塙土器 (1 点) などがある。

SX100 南部からは 347 点の須恵器、土師器類が出土した。須恵器には壺蓋 (52 点)、壺身 (63 点)、椀 (9 点)、高壺 (3 点)、鉢 (10 点)、皿 (1 点)、壺 (14 点)、瓶類 (2 点)、提瓶 (1 点)、平瓶 (2 点)、甕類 (24 点) などがある。土師器には、壺蓋 (5 点)、壺身 (5 点)、椀 (4 点)、鉢 (17 点)、高壺 (24 点)、壺 (13 点)、甕 (78 点)、櫃 (18 点) などがある。

東 1 ~ 3 群、西 1 群の土器組成と集落との関係についても次回検討することとする。

(4) 元岡遺跡群第18次調査区の自然遺物

元岡遺跡群第18次調査区の数ヶ所の遺構・包含層数ヶ所から貝類、魚骨、獸骨、植物遺体等の自然遺物が出土している。量的には多くないが、古墳時代後期の食料残滓の一部を示す遺物であり、採集地の推測も可能と考えられる。一部、中世の遺物も含んでいるが、それについては15)項で示した。以下、ここでは古墳時代後期の各自然遺物について見ていく。

貝類

6ヶ所の遺構・包含層から貝類が採集されている。ある程度の量があるのはSX-276、SX-277、D-1区の3ヶ所、他は量的に極めて少量で遺存状態が悪く貝種の同定もできない。上記3ヶ所の貝種と構成比率は第2表に示した。

SX-276では斧足綱がマガキ、ヤマトシジミ、オキシジミ、ナミノコガイの一種、マテガイの5種、18個体、全体の20.22%を占め、腹足綱がサザエ、スガイ、ヒメタニシ、カワニナ、ヘナタリ、フトヘナタリ、ウミニナ、ツメタガイの8種、71個体、79.78%を占めている。

SX-277では斧足綱がオキシジミ、ナミノコガイの一種、マテガイの3種があるが、オキシジミ以外は存在が確認できるのみである。4個体、全体の8.51%を占め、腹足綱がクボガイ、ヒメタニシ、カワニナ、フトヘナタリ、ウミニナ、ツメタガイの6種、43個体、91.50%を占めている。

D-1区では腹足綱のフトヘナタリ、ウミニナの2種、6個体のみが存在する。

量的に少なく構成比は正しく示していない可能性もあるが、主体を占めるのは内湾砂泥性のウミニナである。この外、淡水域、汽水域の貝種が一定量存在するので、これらの貝は汽水域に近い場所で採集されたと考えることができる。

(山崎純男)

表2. 元岡遺跡群18次調査の貝種構成比率

綱	種名	SX276				SX277				D-1区			
		I(フタ)	r(殻)	個体数	%	I(フタ)	r(殻)	個体数	%	I(フタ)	r(殻)	個体数	%
斧足綱	マガキ	2		2	2.25								
	ヤマトシジミ	3	3	3	3.37								
	オキシジミ	12	7	12	13.5			4	4	8.51			
	ナミノコガイの種												
	マテガイ	1		1	1.12								
計				18	20.2			4	8.51				
腹足綱	クボガイ					1	1	2.13					
	サザエ	1	2	2	2.25								
	マガイ	2		2	2.25								
	ヒメタニシ	5	5	5	5.56	1	1	2.13					
	カワニナ	1		1	1.12			1	1	2.13			
	ヘナタリ							2	2	4.26			
	フトヘナタリ	14	14	15.7		6	6	12.77		2	2	33.33	
	ウミニナ	44	44	49.4		31	31	65.96		4	4	66.67	
	ツメタガイ	3	3	3.37		1	1	2.13					
計				71	79.8			43	91.51			6	100
総計				71	100			43	100.07			6	

ウニ類

貝層に混じって少量のウニ類の遺体が出土している。

SX-276、殻 1 点

SX-277、殻 3 点、棘 5 点、口器の左顎骨 1 点、

魚 骨

貝層中より若干の魚骨が出土している。

SX-276、マフグ科、歯骨左 1 点（大型）、脊椎骨 2 点、タイ類、背鰭棘 1 点、不明種、主上顎骨右 1 点、方骨 2 点、その他 8 点

SX-277、マフグ科、前上顎骨 1 点（大型）、ヘダイ歯骨の歯 1 点、不明種、歯骨右 1 点、タイ類、背鰭棘 1 点、その他 17 点、

G-16～17 泥土貝層、その他 20 点

G-16～17 混貝土層、タイ類、背鰭棘 1 点

植物遺体

モモ核—(1) C-1・2 区黒灰色砂地山直上、半截核 1 点、(長) 23.0 × (幅) 18.6mm、(2) SX-100、D-1 区谷底黒色粘質土、半截核 1 点、26.2 × 21.3mm、(3) SX-100、D-1 区最下黒色土、完形核 6 点、① 20.9 × 18.7 × (厚さ) 15.1mm、② 25.0 × 20.4 × 16.1mm、③ 22.7 × 17.4 × 13.4mm、④ 25.1 × 19.1 × 14.9mm、⑤ 27.2 × 22.3 × 19.0mm、⑥ 25.9 × 19.6 × 16.2mm、(4) D-1 区北斜面黒色土、完形核 1 点、22.1 × 17.8 × 14.5mm、半截核 2 点、① 21.8 × 19.5mm、② 23.5 × 18.1mm、(5) E・F-1 区黒灰色砂質土、完形核 1 点、24.7 × 19.5 × 15.4mm、(6) P-9・10 区旧谷部茶褐色～黒色土、半截核 1 点、19.6 × 16.7mm、(7) I-16 区谷底部直上黒色土、完形核 1 点、22.7 × 16.8 × 15.0mm、(8) SX-276 貝層、核破片 1 点、(9) サンショウ種子—SX-277、1 点

15) 追加資料（古代以降の自然遺物）

これまで報告した 18 次調査地点の古代～中世の資料について、未報告分についてここで示しておきたい。

植物遺体

モモ核—SX-404、半截核 1 点、22.0 × 17.8mm

16) 獣 骨

井戸北群に隣接する石組造構 SX-432 の下部黒色土層からウマの歯が出土している。碎片で部位は決め難い。